日本への回帰

第27集

日本への回帰（第二十七集）

—第三十六回学生青年合宿教室（厚木）の記録より—

大学教官有志協議会
社団法人　国民文化研究会

はしがき

旧臘二十五日、マルクス・レーニン主義の総本山クレムリンから赤旗が降ろされた。

経済の計画化と産業の国有化によって階級なき平等社会を建設するとした社会主義革命、その象徴である「赤」を下地に、労働者と農民の団結を示す交差した「槌」と「鎌」、さらに万国の労働者の団結を意味する「星」が意匠された〝ソビエト社会主義共和国連邦〟の国旗が消えたのである。代って掲げられた「白」「青」「赤」から成る三色旗はピョートル大帝によって定められた〝ロシア帝国〟の国旗であった。レーニンが打倒すべきとして転覆した帝政ロシアの国旗が蘇ったのである。

赤旗が降ろされてロシア国旗が掲揚されたことは、何よりも「イデオロギー支配の終焉」を示して余りあるものであった。亡命ロシア人経済学者W・S・ウォイチンスキーは次のように記してゐた。「ツアー政府は、緩やかな、弱い専制主義であって、抜け穴と矛盾に満ちてゐたが、ソビエト政府は全体的な専制であり、抜け穴は一つもない」。

この抜け穴なき矛盾なきマルクス・レーニン主義こそが、秘密警察と密告奨励と粛清と強制収容所とをもたらしたのだった。机上で推考された観念は確かに整合性には富むだらう(そ

れは如何やうにも都合よく齟齬をきたすことなく空想し構想することができる)。しかし人間の心の動きは理論の枠をはるかに越える。その論理的には辻褄が合ふが故に「科学」を自称した社会主義理論を教条的に信奉した時、階級なき平等社会を目指すはずの革命政権は「抹殺すべき人間」を選別するための恒常的機関を抱へることとなった。経済の計画化・産業の国有化は共産党一党独裁イデオロギーによる「思想の計画化・国有化」に他ならなかったのである。

イデオロギーの鋳型に人間を填込んで自づからなる心の動きを圧殺してしまっては、経済活動が滞るのは当然であった。ペレストロイカ(建直し・再編)とは、要するに停滞気味の社会主義経済を活性化するために計画化・国有化路線を修正するといふものだったから、理屈の上からも筋の通らぬことであった。その結果が頭初の目論見とは裏腹の社会主義体制そのものの自壊へとつながったのは自然なことであった。

これまでマルクス・レーニン主義には我国の少なからぬインテリが痺れてきたのであるが、あらかじめ用意された「かくあるべし」とする青写真によって生身の人間生活万般を裁断した歴史否定の社会主義思想の陥穽は、ともすれば現代人が陥りやすい知的傲慢と表裏するものなのである。ソ連崩壊の現実を前にしてなほ「社会主義の平等思想だけは正しいものだ」などと大新聞は論説してゐる。しかし、一見、矛盾するかに思はれるものさへもそれぞれに居場所を与へてゐる「伝統」について、その意味と奥行きの深さについて、我々は謙虚に思

ひ巡らす必要がある。ソ連の解体から学ぶべきものがあるとすれば、まづこの点である。

若き学友からの年賀状に、近代的価値の再検討がなされてゐる激動の時代に際して invisible government の意義を思はざるを得ないとあった。それは「目に見えないもの、例へば〝伝統の力〟によって心の平穏がもたらされ、国が治り行くこと」だといふが、旧ソ連地域の国々の今後やユーゴスラビアの分裂劇などを思ふにつけても、我々を包み込んでゐる永き伝統の深大なる力を思はざるを得ないのである。しかしながら、我国の現状は「平和と民主主義」の名目で、あるいは「政教分離」を口実として、さらに「人権尊重」の理由から、そしてまた「国際化」を拠りどころに、invisible government に叛逆する歴史と伝統に対する知的驕傲が、無知と紙一重の驕傲が、まかり通ってゐる。

折しも日米開戦五十年に際し公けにされた両国指導者の発言を比べてみると、敗戦の後遺症とはいへ、我国の抱へる国民心理的な病痕がただならぬものであることが理解される。

ブッシュ大統領は「私には遺恨はない」としながらも「今でも死んでいった戦友の顔が思ひ浮かぶ。皆さんもきっと同じだらう」と語り「地球上の最も偉大な国家アメリカ合衆国に神の祝福があらんことを」と結んだ。我が方は「米国をはじめアジア各地域の皆さんに耐へ難い打撃を与へたことを深く反省してゐる」(宮沢首相)、「現在では、日本は民主国家として、個人の人権を尊重し、自由を愛し、米国と同じ価値観の国家に成長した」(渡辺外相)云々と

語った。

敗れたとはいひながら国を挙げて戦った戦争ではなかったのか。これでは戦陣に斃れた同胞の慰霊どころの騒ぎではない。かうした発言は、先人の労苦を一顧だにせずに今日的価値観の殻の中に閉ぢこもってゐる点で、知的驕傲と相通じてゐるのである。内における傲慢と外に対する卑屈は同根なのである。

日米開戦五十年は「講和条約調印四十年」であり「国際連合加盟三十五年」でもあったが、これに触れた論説を寡聞にして知らない。日本人の誰一人として原案作成に係はってゐない日本国憲法を「平和憲法」と崇めるほどに主体性を喪失してしまっては、戦後の国際社会復帰に努めた先人の存在さへ視野に入らなくなる。そもそも「平和憲法」などといふいひ方自体が無知と傲慢と卑屈のなせる業なのである。

ソ連の崩壊は世界史的大事件であった。その「イデオロギー支配の終焉」によって、例へばロシアもウクライナもそれぞれの国家的確信に基づいて自らの進路を開拓しようとする「普通の国」になることだけは間違ひないだらう。飜って我国の国家的民族的確信のほどはどうなのであらうか。我国が「普通の国」になるのは何時のことだらうか。それに向けてのささやかな集ひの記録がこの冊子である。私共の微意を汲みとっていただければまことに幸ひである。

最後に当り、田久保忠衛先生には御講義の要旨掲載をお許しいただいたばかりでなく、御懇切にも御加筆を賜ったことに深甚なる感謝を申し上げたい。

平成四年一月十五日

大学教官有志協議会
国民文化研究会

目次

はしがき

講義

第一日（八月七日）
楽しき哉！「敷島の道」……アサヒビール飲料㈱取締役営業部長　坂東一男……3

第二日（八月八日）
聖徳太子と楠木正成……神奈川県立金井高校教頭　国武忠彦……25

第三日（八月九日）
激動する国際情勢と日本……杏林大学教授・評論家　田久保忠衛……53

第四日（八月十日）
戦後思想からの覚醒を！——より人間らしく生きるために——
……神奈川県立湘南高校教諭・亜細亜大学非常勤講師　山内健生……87

講話

教育は難しい、然れど面白い……福岡県立新宮高校教諭　小野吉宣……121

相模の国に集ひて歴史を想ふ……富山女子短期大学教授　廣瀬誠……139

若き友らへ語りかける言葉　―いま私達の最も心すべきこと―……国民文化研究会常務理事　長内俊平……149

短歌入門

短歌創作導入講義　―短歌の本質と魅力―……福岡県立須恵高校教諭　那須三元……173

創作短歌全体批評……山口県立高森高校教諭　宝辺矢太郎……191

一年の歩み……亜細亜大学経営学部四年　佐藤順一郎……211

合宿教室のあらまし……千葉大学工学部四年　中富仁……223

合宿詠草……249

あとがき

講義

楽しき哉！「敷島の道」

アサヒビール飲料㈱取締役営業部長
坂　東　一　男

七沢自然教室・石碑

はじめに
出会ひ――おもふこと思ふがままに――
会社生活――天職の歌――
一人では生きられない
娘の命名
幼稚園の学芸会
父逝く
終りに

はじめに

皆さん、今晩は。（こんばんはの返事あり）あっ!!返事がありますね。これは嬉しい。なぜか最近は、「お早うございます」と言っても返事をしない人が多いんですよ。幸先の良い「今晩は」の返事に「ありがたう」とお礼を言ひます。

改めて自己紹介を。私は、昭和十二年生れで五十五才。家族は、妻と、二人の息子、五人の娘、計七人の子供がゐます。子供数では会社ではナンバーワン。私の誇りです。アサヒビールに入社以来営業畑一筋に三十年。昨年秋関連会社のアサヒビール飲料㈱の役員に就任。昭和四十七年第十七回阿蘇合宿で運営委員長を務めて以来二十年ぶりの参加です。しかも講義は初めてで、足がブルブル震へ、緊張してゐます。皆さんも合宿初日といふことで相当に緊張されてゐるやうですね。私の役目は、皆様の緊張感をほぐすこと。あとは運営委員長に任かせておけば良いと思って、冒頭の講義を引き受けました。

「楽しき哉！敷島の道」などと、仰々しいタイトルをつけてをります。

「敷島の道」といふ言葉は、

五七五七七、三十一文字、短歌形式の和歌のことをいふが、和歌を文芸の一ジャンルとしてだけ考へるのではなくて、「日本人のふみゆくべき道」として考へる場合に、使はれる言葉である。（夜久正雄著『しきしまの道研究』24頁）

私自身の生き方。私の人生。或は言葉を大切にして生きてゆくといふ生き方。通ひ合ふ言葉を話しながら生きてゆくことは非常に楽しいといふ意味を込めて、こんなタイトルをつけました。

出会ひ――おもふこと思ふがままに――

昭和三十四年、長崎大学三年の夏、廿四回阿蘇合宿に参加したのが、この国民文化研究会に連なる第一歩でした。今、初参加の合宿教室を思ひ起すと、正面に「日の丸」が飾ってあり、開会式で「君が代」を斉唱。私にとっても初めての経験でした。今日、入口のところに「友よと呼べば友は来りぬ！」といふ横断幕が飾ってありました。正面の日章旗をまん中にはさんで、三つのスローガンがかかげられてゐました。

「混迷の時代に消えざる地熱、祖国のいのち」、「孤立する心を友情交流の世界に投じよう」、

「まことの学風をわれらの学園に興さう」

このスローガンをみて、「わあ!!すごい合宿に来たなあ。俺は大丈夫だらうか。最後までもつかな」といふ気持ちになったことを思ひ起します。自分が今迄経験したことのない素晴らしい機会に出会ったんだといふ、大きな大きな感動でした。

しかし、今いろいろと思ひ返してみると、私のその後の生活に根づいていったもの、それは初めてふれた明治天皇の御歌を中心とした短歌でした。明治天皇の御歌を唱和してみませう。

書

をりにふれて
おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべに
なりもならずも（明治四十五年）

うるはしくかきもかかずも文字はただ読みやすくこそあらまほしけれ（明治三十八年）

この二首について、私の感懐を述べます。第一首目の歌は、自分の思ってゐることを、思った通りに、歌のしらべになるならないといふやうなことを考へずに、詠んでゆけばちゃんと歌になるといふお気持の歌です。第二首目の歌は、文字を書くときは、立派な字を書かうとかそんな気どった思ひは何も要らない。ただ心から伝はるやうに、相手が読みやすいやうにていねいに書くことが大切だと。これは、人の心の素直さをそのまま表はしなさいといふお歌で、何と素直な、本当に思ふこと、感じたことを、そのまま三十一文字に記した素晴らしい歌だらうと非常に感動しました。ああ、これなら、感性の鈍い、表現力の乏しい私でも歌を詠めるんぢゃないかと感じました。

合宿から帰って早速古本屋を探し、「明治天皇御集」を一冊みつけて、今日迄三十二年間、毎朝拝誦を心がけてゐます。この経験が私の生き方の一つの原点になってゐます。

会社生活――天職の歌――

三十六年。卒業と同時にアサヒビール㈱に就職。「いづれ日本一のビール会社にするぞ!!」

「いづれアサヒビールの社長に!!」との気迫で、青雲の志を抱いて……。勿論経営の中枢に係はるすべもなく、激しいシェアー争ひの最前線で、来る日も来る日も酒屋さんを回訪してアサヒビールの売込活動に明け暮れるなかで詠んだ歌。

もう一軒もう一軒と汗をふき歩きまはるか新米担当我は

これは大変な字余りの歌ですね。新人セールスマン時代の心意気を詠みこんだことも、今は懐かしい思ひ出です。

暑き日も雪降るときも心こめアサヒビールをすすめすすめし

辛口のビールはアサヒと笑みたたへ店陳棚入れはげむ楽しさ

なんだか宣伝臭の強い歌で申し訳ありません。会社での生活を三十一文字にならべてみては、俺はお国のために役立ってゐるんだと励んでゐました。

そんなとき、「お前の職業は天職だぞ!!」「お前は一生ビール屋として世のお役に立て!!」、そんな天の声が聞こえてくるやうな歌に出合ひました。その歌は、

酒といふ文字をみてさへ嬉しきに飲めといふ人神か仏か（土井晩翠）

誰あらう、あの「荒城の月」の詩人土井晩翠の歌です。

私の仕事に誇りと自信を与へてくれた三十一文字。毎日、三百六十五日、「アサヒビールを売って下さい」「アサヒビールを飲んで下さい」そして「お役に立ちたい」との私の気持を、これほど素直に、これほど簡明に代弁してくれてゐる歌。自信をもってアサヒビールを売込むことは、『世のため』『人のため』『自分のため』に本当に素敵な職業だとの確信に到った歌に出合ひました。この歌は一生忘れません。

お酒に関する歌を、もう嬉しいものばかりですが、紹介しておきます。

人の世に楽しみ多し然れども酒なしにして何の楽しみ（若山牧水）

まらうどよ飛騨は山国風寒し何がなくとも酒きこしめせ（福田夕咲）

全くそのとほりで、世の中から酒がなくなったら、私はもう死んだ方がまし。

杜氏殿の心澄みゆき魂きはるいのちの酝は生れ初めけり（司馬遼太郎）

これは飛騨の酒問屋さんでみつけました。社長さんのお話では、会社の創業記念の折に司馬遼太郎さんにいただいた歌とのこと。『短歌のすすめ』に、古来日本の為政者をはじめ各層の人々は折にふれて歌を詠んでゐたことが紹介されてゐます。日本を代表する作家の司馬遼太郎氏も歌を詠まれてゐるといふのも嬉しいことでした。

明治天皇の御集の中にもお酒の歌があります。

酒

冬の夜の寒さをしのぐ酒だにも得がたかるらむつはもののとも（明治二十八年）

日露戦争の厳しい戦で、寒さをしのぐ酒さえも手に入らないのではないかと、戦線の兵士を思って詠まれた御歌ではないかと思ひます。

盃

しづかにも世はをさまりてよろこびの盃あげむ時ぞまたるる（明治三十七年）

早く戦争が終り、平和な世にしたいものだ。早くかちどきの盃をくみかはしたいものだ。それを待ってゐるんだよ。そのやうなお気持がしんしんと伝はってくる御歌でございます。

一人では生きられない

現在の私を支へてゐるもう一つの歌。私の生き方の根幹にあって忘れられない歌があります。これも、合宿教室で巡り合った歌です。

ますらをのかなしき命つみかさねつみかさねまもる大和島根を
心しる友とかたれば心なごみながるるなみだとどめかねつも

この二首とも三井甲之先生の歌です。『短歌のあゆみ』に詳しく載ってゐますが簡単にふれておきます。

一首目の「ますらを」は、日本男子のことです。日本建国以来日本の伝統を受継がうとする男です。「かなしきいのち」は国と運命を共にする悲劇的な生命です。建国以来多くの「ますらを」が、そのいのちをつみ重ね、つみ重ねて、この美しい大和島根、日本国を守ってゐ

る。日本の伝統を受継がうといふ男の悲劇的な生命をつみ重ねてきてゐるのがこの素晴らしい日本なのです。これは昭和二年、演習中に沈没した駆逐艦「蕨」の機関長で、亡くなられた福田少佐を偲んで詠まれた連作短歌九首の末尾の歌と聞いてゐます。

二首目の「心しる」の歌は、涙が止まらないといふやうな感動を是非とも経験したいと思はずにはゐられないやうな歌ではありませんか。

昭和四十五年の合宿教室で、小田村理事長が、「われわれ人間は自分ひとりで生きてゐるのではない」といふタイトルで講義をなさってゐます。その中で非常に印象に残ってゐるお話を、先生のお許しをえて少し披露させていただきます。

私、七人の子宝に恵まれたと申しました。幸に、七人とも母乳育ちです。この世に生まれた赤ん坊が一番先につき合ふのは母親です。母親のオッパイに、母親の命を分けて生まれてきた赤ん坊はすぐ吸ひつきます。母親の目をじっと、見えない目で見ます。これが母親と赤ん坊のつき合ひです。つきあひの原点。人と人とのつきあひは、その意志のあるなしに拘はらず、赤ん坊が本能的に母親を信頼してゐるやうに、本当にあなたを信頼するといふところからスタートしてゐるのです。

日本で生まれた赤ん坊は日本語をしゃべるが、外国で生まれた赤ん坊は外国語をしゃべります。子供は母親の目をみ、口をみて言葉を覚えます。私、自分の七人の子供達を見てゐて

さう思ひます。

夫婦で話すとき、ちゃんと返事をすると、子供は覚えてゐるんです。だから「声」と「言葉」とが違ふのは何故かと云ふと、「声」といふのは音だけなのです。「言葉」といふのは、人づきあひを伝へる手段です。伝達の手段であり、また心のこもったものなのです。だから「太郎ちゃん」と呼ばれたとき、「うん」と言ふのは、これは返事じゃなく、相づちをうってゐるだけですよ。「ばい。何でせう」これが返事です。さうすると心が通ひ合ふんですよ。さう思ひませんか。大事なことでせう。

ちょっと自慢話みたいになりますが、私、子供達に教へられました。そのことをご披露します。子供達がまだ小学生の時のことです。バスに乗って街に出かけた折、降りる際、運転手さんに、「ありがたうございました」と言って降りるんですよ。三人とも大きな声でね。私、ドキッとしました。「ありがたう」の一言が言へないのです。私には出ないのです。バスに乗せて貰ふのはあたりまへ。こちらは銭を払ってゐるのだ。そんな気持があるからでせうか……。「ありがたう」といふ素直な言葉が出てこない。バス通勤の折に実行してみました。翌日、出ません。「ありがたう」と言へない。一週間位言へない。やっぱりてらひがあるんです。お客さんに恥づかしいのでせうか。「こんなところで、大声で、ありがたうと言ったら、又あの野郎格好つけやがって……」と囲りの人がみるんぢゃないかと。さういふ心になってゐるの

ですね。これがいけないのでせう。で、どうしたかと云ふと、最後に降りるやうにしました。終点でしたから。「アリガタウゴザイマス」最初は小さな声でした。三日目位から声が大きくなり、運転手さんが「ご苦労さん」とニコニコして言ふので嬉しくなります。段々自信が出て、一週間たったら、もう堂々と「ありがたう」と言へるやうになりました。やっと、「ありがたうございました」と大声で言へた時の爽快感は忘れられません。

しかし、この合宿は違ひますよ。講義が始まるときは、「お願ひします」、終ったら、「ありがたうございます」とやるんです。気持が良いですね。けじめですよ。さういふところから人と人とのつきあひは生まれてくるんですよ。言葉が生きてくるんです。私は、さう思ひます。

「オ・ア・シ・ス」聞いたことありませんか。これは「お早うございます」の『オ』。感謝の気持を込めて言ふ、「ありがたうございます」の『ア』。お詫びの心を表わす「失礼しました」の『シ』。謙そんして言ふ言葉の「すいません」の『ス』。これは便利ですから覚えておいて下さい。これ営業用の言葉です。営業ではみんなやってゐるんですよ。なんで日常生活で言へないのでせう。私、非常に大事なことと思ひます。

娘の命名

長女は、国文研の江里口淳一郎先生にとりあげていただきました。その命名の折、

文

みじかくてことの心のとほりたる人の文こそ読みよかりけれ（明治四十三年）

江里口先生からこの明治天皇の御歌を示されました。簡潔で、真心の通った人の文章は本当に読みやすい。素直な子に育つやうにと云ふ意味で長女は「文子」といふ名をいただきました。

その長女が高校に入学した年、「日本人として忘れてはならないこと―高校生の娘に―」と題した私の一文が「国民同胞」五十九年六月号に掲載されました。お手もとのレジュメにあります。最初と最後を読んでみませう。

「文子ちゃん。高校の制服姿も板についたね。東京古川橋病院で江里口先生にとりあげていただき、明治天皇の『みじかくてことの心のとほりたる人の文こそ読みよかりけれ』の

御製の『文』を名前にいただいた文子。幼稚園児の頃から、福岡の油山での慰霊祭に毎夏参加させていただき、……」

それから最後の六、七行目

「お父さんが今一番強調したいことは、一見無事平穏にみえる毎日の生活も、自分や、父、母だけの力で送れるものではなく、自分の任務を自然なかたちで一つ一つ遂行してきた、尊い祖先の生命の積み重ねで日本の国柄が守られてゐるお蔭であることを決して忘れてはならない。……」

この中で、ソ連に係わるニュースを五つとりあげ、私が最も力点を置いたのは、

「まして絶対に忘れてはならない事実は、長崎に原爆が投下された日、即ち昭和二十年八月九日の未明、日ソ不可侵条約を破り、突如攻めこみ、戦勝国として、国後、択捉、歯舞、色丹の北方四島を不法に侵略し、軍事基地化してゐる事実。……」

これは事実ですからね。この事実を遺言的な意味で高校生になった娘に伝へたかったのです。

その折、江里口先生からお寄せいただいた歌をご披露させていただきます。

忘れゐしその人の名はおぼろなる古きことどもよみがへりつつ

健やかに育ち給ひし夏の日の面影しらず逢はず久しも

「夏の日の面影しらず」と云ふのは、ここに幼稚園のころ油山の慰霊祭に参加して云々といふことを歌ってをられるのです。

嬉しかったことに、国民同胞編集長の宝辺正久先生からも歌をいただきました。

いとし子にかたることばは咲く花を待つがごとくに心こもれり

浦安の日の本の民の目の前の虎狼を教ふ君は我が子に

「虎狼」といふのは、ここではソ連のことだと思ひます。

幼稚園の学芸会

子供達とのコミュニケーション、なかなか普段は出来ません。私、七人の子供全員をお風呂に入れました。子供が歩けるやうになると、日曜日は子供を連れて散歩に出かけます。その折、小さい子供達に、やってはいけないこと、守るべきルール等を教へてをりました。「人に迷惑をかけるな」、「感謝の心を忘れるな」、「人に後ろ指をさされるやうなことをするな」と、大体この三つを言ってをりました。先程ご披露したバスを降りる時の「ありがたうござ

います」は子供達が、私の教へをキチンと守ってゐるなあと感じ、大変嬉しかったことを記憶してゐます。

ゐみたたへ「もう春ですよ」と喜びを体いっぱい歌ふ吾子はも
くりかへし声はりあげて歌ふかな「ステキな世界子供の世界」
「通りゃんせ」「トッピンシャン」に「村祭り」ド・ドーンとひびく吾子の太鼓は

この括弧でくくってあるのはみんな歌の題です。幼稚園の学芸会、五女と次男にまつはる歌です。園児たちの演芸が終ると、その場で、感じたことをちょっと即興的に詠んで、先生に差しあげました。「とっても楽しい雰囲気の歌ですね」と、幼稚園の先生にいたく喜んでいただきました。

父　逝　く

昭和五十八年九月、私が四十五才のときに父を亡くしました。七十五才でした。大変残暑の厳しい年。その折も、先生方や諸先輩、仲間からたくさんの歌をいただきました。私のつ

たない歌のみ披露します。

蟬の声なほしはげしき暑き日に父みまかれり笑顔のこして
死に目にはあへぬかもとくみかはせし七年前の宴偲ばゆ

「七年前」といふのは、福岡から仙台に転勤になり、当時は仙台―福岡間の直行便がありません。私が父に、「もう二度と逢へないかもしれないよ」、「仙台に行くのを止めようか」と申したら、「そんなことはない」、「人生到るところに青山ありだ、行きなさい。宮仕へをしたら死ぬまで仕へるのが日本人の生き方だ」と諭された記憶がございます。危篤の知らせを受け二度帰り、三度目は、もうこと切れてをりました。私が帰ってくるのを待ってゐたかのやうに、デスマスクは笑顔に満ちてゐました。

翌五十九年九月待望の支店長の辞令を拝命。サラリーマンにとって、一国一城の主となることは、何にも勝る喜びです。たった部下十二名、年商わづか五十億足らずの小さな支店ですが、意気込んで歌ひました。

一城の主になれとのたまひし父の遺影に辞令を拝しぬ
必ずや越の国での我が務はたしてみせんと誓ひ新たに

「越の国」は新潟の昔の呼称です。「一城の主」とは大げさですけれども、そんな気持ですね。先程の「飲めといふ人神か仏か」から約二十年たってをりました。

終り に

私は子供達には、大学に入ったら国文研の合宿教室に参加するのが学費を出す条件だと言ってゐます。とんでもないおやじと言はれるかもしれません。親が生活費をみてゐる間は子供は親の庇護下にあるべきで、これが日本の伝統であり、我々が守ってゆくべき大切なことであると思ってゐます。長男も合宿に参加しました。次女が短大一年のとき、しゃにむに参加させました。中学一年生の三女をアルバイトのお伴につけて参加させました。甘い親と思はれますが、何としても合宿を体験させたい。絶対に、参加すれば役立つ合宿だとの強い信念を持ってゐましたので……。

一昨年の合宿レポートに二人の娘達の歌が載ってゐます。

天皇の御言葉御歌聞きゆかむ心無にして耳そばだてて　（恵子）
熱心に講義聞く人聞かぬ人よりどりみどり沢山ゐるな　（陽子）

陽子の歌は参加最年少者の歌といふことで短歌相互批評で披露されてゐたやうです。

心

つくろはむことまだしらぬうなゐごのもとの心のうせずもあらなむ　（明治三十九年）

「つくろふ」は構へるとか整へるとの意味で、先程のバスの例で引き合ひに出したやうに、疑はしい心を持ってゐることかと思ひます。子供はさうぢゃありませんね。生れたときはお母さんのお乳に食らひついて、あの信用してゐる心を墓場まで持ってゆけば、世の中のもめ事は起らないのでせうが、なぜかさうはいきません。生まれたときの、あの純真なもとの心を失はないままであって欲しいなあといふ明治天皇の御歌です。

最後に、「つきあひ」といふ言葉について、小田村先生からうかがったことを話します。つきあふの「つく」は、相手と自分がくっつくほどに相手に近づくこと。そして「合ふ」は相

手とぴったり一体になること。その真意は、相手の心を慮るといふことなのです。営業の言葉では、「お客さんの立場になる」といふことです。企業では皆やってゐるのに、日常生活ではなぜ出来ないのでせうか。残念です。やっぱり、学校教育と家庭教育がキチンとしてゐないせゐでせうか。非常に大切なことだと思ひます。そんな意味からも「敷島の道」を学び、相手の立場になって、言ふならば気働きを働かしたこの合宿の班別討論はつきあひの基本を実践する場です。班別討論の折は、自分の一方的主張を押しつけるのではなく、相手の立場になって、「あの人はどう考へてゐるのだらうか」、「僕のこの発言をどう思ふだらうか」、といふやうに相手の気持ちに思ひをこめて発言して下さい。言葉と心の通ひ合ふ道、これが敷島の道と思ってやってきました。これからもやってゆきます。

ご静聴ありがたうございました。

聖徳太子と楠木正成

神奈川県立金井高校教頭
国武忠彦

七沢自然教室・管理棟

はじめに
国土統一と朝鮮出兵
任那の滅亡
蘇我・物部の対立
『憲法十七条』
聖徳太子
天智天皇
楠木正成

はじめに

昭和天皇が亡くなられて三年目を迎へました。一昨年の一月七日に崩御され、この七日と八日は新聞・テレビは特別編成となり、天皇のご足跡をたどり天皇をしのびました。

休みあけに生徒に天皇崩御についてきくと、「天皇なんて考へたことはないよ」「知らないよ」といった返事がほとんどでした。

『朝日新聞』に〝昭和から平成〟といふ記事があり、その中の〝「天皇」教育〟といふところで「触れない、考えないの40余年、次代の岐路に」といふのがありました。

戦前は天皇について「教えられすぎた」、戦後は「教えられなさすぎた」、高校の『政治・経済』の教科書には天皇制の説明に四行。『日本史』では昭和時代の千行以上におよぶ記述のうち天皇には一〇余行を費やすのみ。戦争については教へても、天皇にかかはる点には、できるだけ触れないできた。憲法を学ぶときも、冒頭の第一章（天皇）は、現実には授業で素通りされてきた。

「戦後ずっとタブー視してきた天皇制の本質について、日本人みんなが自分なりに解決しなければならなくなったように思います」と書いてゐる。私はこれを読んでその通りだと思

ひました。憲法に、天皇は「日本国の象徴であり、日本国民統合の象徴」と定められてゐるのに「天皇なんて考へたことはないよ」とか「知らないよ」といふことは一体どういふことでせうか。私たちにとって、天皇はどうも真に「国民統合の象徴」になってゐない気がするのです。

そこで私は、『日本史』の教科書のこの箇所では、天皇についてかう教へたい、或はかう考へたいといふことをお話したいと思ひます。引用する教科書（《　》の部分）は『詳説・日本史』（山川出版社）を使ひます。

国土統一と朝鮮出兵

今回は、聖徳太子を中心に話をしたいのですが、その前に三〇〇年さかのぼって四世紀の日本から始めます。

四世紀は大変な時代でした。天皇を中心にした大和朝廷が成立し、国土統一と朝鮮出兵が同時に行はれてゐました。

国土統一については、五世紀の雄略天皇の「倭王武の上表文」に、《昔より祖禰躬ら甲冑を擐き、山川を跋渉して寧処に遑あらず》と書かれてゐます。私の祖先の天皇たちは、天皇み

づから鎧冑に身を固め、山川を歩き国土統一のために休むひまもありませんでしたといってゐます。

同時に朝鮮出兵。このころ朝鮮では、北の高句麗と南の百済・新羅が対立してゐました。高句麗は領土を広げようとして南下するし、百済と新羅はこれに抵抗し、さらにあはよくば日本の勢力下にあった弁韓、当時はまだ小国分立のままでしたがここに支配の手を伸ばさうとしてゐました。

日本は、昔から鉄資源を確保するために弁韓諸国を確保してきたが、この弁韓を守るために百済と結び、新羅や高句麗と戦ひました。高句麗の百済侵入に対し、日本軍は続々と海を渡り百済の肖古王を助けて、三七一年には高句麗王を戦死させ、南の弁韓諸国に任那を樹立し、日本の領土としたのです。加羅国に「日本府」をおいて、この任那を治めることになった。これが四世紀です。いかに大変な時であ

ったかを想像してください。

次の五世紀になると「倭の五王」の時代といはれます。日本の五人の天皇が次々と中国の皇帝に使を送った。なぜか。これは、日本が南朝鮮に実力で得た地位と領土とを、あらためて中国皇帝から認めてもらはうとしたからです。五世紀には、百済・新羅・任那の南朝鮮の支配をめぐって、わが国と高句麗とは対立してをりました。そこで、これらの地に対する支配権を中国の皇帝によって認めてもらひ、南朝鮮経営を有利にしようとした、真剣な外交のかけひきがあったのです。その結果、四七八年雄略天皇のときに百済を除く六カ国の、諸軍事の安東大将軍たることを中国から正式に承認されました。この称号は、名ばかりで有名無実だったかもしれませんが、当時では大事なことだったのです。日本のこの地に対する支配的立場が、国際的に公認された意味があったのです。このやうに歴代の天皇は、朝鮮半島経営に心血をそそぎ海外の領土を守ってきました。

任那の滅亡

ところが次の六世紀になると、教科書には「大和朝廷の動揺」と記されてゐます。何が「動揺」なのかといふと、朝鮮半島の経営が失敗し、任那がほろぼされてしまふのです。蘇我・

物部の対立は起こるし、天皇が暗殺されるし、全くいいところがないのです。

《6世紀の初め、日本は百済のもとめに応じて任那の4県を割譲したが、このとき大連の大伴金村は百済から賄賂をうけたとして非難され引退したという》

百済から使ひがきて任那の四県（こほり）、四つの地方をほしいといってきたのです。任那に派遣してゐた将軍で、国司も兼ねてゐた穂積臣押山（ほづみのおみのおしやま）も、「この四県は百済に近く、日本からは遠くて守り難い。これから先のことを考へれば百済にやったはうがなにかと得策でせう」といってくる。大伴金村も、よし百済にわけてやらうと決定した。物部麁鹿火（もものべのあらかび）に命じて百済の使ひに伝へることにした。ところが、このことを聞いた麁鹿火の妻は、夫をいさめていった。

「住吉大神がはじめて海外の金銀（しろがねこがね）の国である百済・新羅・任那を応神天皇に授けました。そこで、神功皇后と武内宿禰は国ごとに官家（みやけ）をおき、海外の垣（かきね）として、わが国の守りとして随分久しくなります。大切なところなのです。もしこれを割いて百済に与へたら、後世いつまでも非難をうけることになりませう、おやめなさい。」

病と称して使ひを断りなさい。麁鹿火はこの妻の忠告に従って、使ひを断る。私はこの箇所が好きです。「長く日本の領土であったところを、そんな簡単な理由で、むざむざ百済に譲

るべきではない。そんな使ひは断りなさい。」『日本書記』には強く諫めたといふが、『漢書』には力づくで押しとどめると註に書いてゐます。

大伴金村は仕方なく、別人を通じて難波に待ってゐる百済の使ひに任那の四県を与へることを伝へました。ところが噂が広まる。大伴金村と穂積臣押山は百済から賄賂をもらってゐた。このため大伴金村は失脚するのです。

さて、こんどはこれがきっかけになって、任那諸国に不平と怒りがまきおこり、日本への反発・不信感が高まります。このときとばかり、新羅は突然任那に侵入してきます。五二三年ごろのことです。さあ大変です。大和朝廷は、任那を救ふために、五二七年近江臣毛野に六万の大軍を率ゐさせ、新羅を討つために出発させようとした。ところが、その途端、さうはさせないとばかり九州の筑紫国造磐井が反乱をおこし、立ち上ったのです。

この磐井といふ豪族は、かねてから大和朝廷に叛逆の心をもち、機会があればいつかこれを倒したいとすきをねらってゐました。これを知った新羅は磐井に賄賂をおくり、そそのかして兵を挙げさせ、この新羅征伐軍を阻止させようとしたのです。さあこれから新羅と戦はうとするとき、何と新羅と手を結んで反乱をおこした豪族が日本国内にゐたのです。これはまさに日本にとっては危機でありました。

この内乱は二年間かかり、継体天皇の激励によって出発した物部麁鹿火によって、やっと

倒すことができました。翌年、新羅征伐軍は海を渡るのですが、新羅打倒も任那再建も思ふやうに進まず、継体天皇は内外多難のうちにこの世を去ります。そして、つひに任那は、五六二年新羅に滅ぼされてしまひました。

蘇我・物部の対立

大事な任那が滅ぼされたとき日本国内はどうなってゐたのか。蘇我・物部の対立と抗争。

『日本書記』には、この対立を仏教伝来を通して見事に描いてゐます。

仏教伝来は『日本書記』によると、欽明天皇の壬申の年、五五二年、百済の聖明王が釈迦の仏像と経論を送ってきたと記してゐます。

欽明天皇はかういってゐます。「朕、昔より來、未だ曾て是の如く微妙しき法を聞くことを得ず。然れども朕、自ら決むまじ」。信じていいのか否か、みづから決めることができない。そこで「群臣に歴問」したと書いてあるので、一人一人に意見を聞いたのです。

蘇我の稲目は、「西蕃の諸国、一に皆禮ふ。豊秋日本、豈獨り背かむや」。西の諸国が皆信奉してゐるものを、どうしてわが国だけが信奉しないことがありませうといふ。

物部尾輿と中臣鎌子は、「我が国家の、天下に王とましますは、恆に天地社稷の百八十神

を以て、春夏秋冬、祭拝りたまふことを事とす」。これは注目すべき言葉です。神をまつることは天皇の大事なお仕事といってゐます。さらに「方に今改めて蕃神を拝みたまはば、恐るらくは国神の怒を致したまはむ」と奏上している。

天皇は困って、「蘇我稲目、そなたは信奉したいといふのだから、そちにさづけるから試みに拝んでみるがよい」といふのです。蘇我稲目は喜んで礼拝してゐると、疫病（天然痘）が流行しはじめた。物部尾輿と中臣鎌子は、「国神の怒りだ」と天皇に奏し、蘇我稲目の仏像を難波の堀江に棄て、寺院を焼きはらふ。以後、この争ひは次の物部守屋と蘇我馬子の時代まで続きます。

『憲法十七条』

朝鮮半島に対する支配が窮地におちいってゐるとき、二大豪族が争ってゐる。この争ひは、仏教に名をかりた政治上の争ひなのです。さて、聖徳太子に仏教を教へてくれた、父である用明天皇がなくなると、次の天皇をだれにするかで二大豪族は、ついに武力で決着をつけようとします。

物部の推す穴穂部皇子か、馬子の推す泊瀬部皇子か。このとき聖徳太子は一四歳でした。

おじさんの馬子の側に立って戦さに参加します。物部守屋と行動を共にした穴穂部皇子や宅部皇子が、馬子によって殺されます。これは一族の争ひです。太子にとっては、血のつながりのあるおじさん同士の争ひでした。どんなに悲しくてつらひことだったでせう。『憲法十七条』の冒頭に、《和を以って貴しとなし》といふ言葉がありますが、この言葉を最初にもってきた意味がわかるやうな気がします。「人皆党あり、亦達れる者少し」。人は皆、徒党を組みたがる、そして対立しあふやうな心がある。この痛切なお言葉は、太子のこの争ひの中から出てきた言葉だと思ひます。「達れる者少し」ともいってゐます。悲しい言葉です。

物部守屋も、五八七年つひに馬子によって滅ぼされてしまふ。これで排仏派は、滅びる。この勝利で馬子は、泊瀬部皇子を天皇に推戴する。これが崇峻天皇です。ところが、任那を奪ひかへす出兵問題で、意見のくひちがひが、この天皇との間に出てきたのでせうか、馬子はこの天皇を殺します。帰化人の東漢直駒、自分の部下に命じて殺します。崇峻天皇は、太子にとっては母の弟で叔父さんにあたる人です。臣下が天皇を弑逆する。これは日本の歴史上はじめてのことでした。殯もせず、その日のうちに葬ってゐます。殯といふのは、天皇などが亡くなるとすぐ埋葬しないで別れををしみ、徳をおしのびする告別の儀式です。この殯をやらずに、すぐ埋めてしまったのは異例のことです。埋葬地もわからないのです。『憲法十七条』の三に、《詔を承りては必ず謹め》とありますが、天皇の言葉を大切にしてほしい、

そして天皇の力を強くして、国家をまとめあげようとした太子の気持が痛いほどわかります。

馬子は、この東漢直駒を殺す。天皇を殺した罪をこの部下にきせて殺します。『太子伝暦』によると、馬子は駒をしばりあげ、大きな松の木の枝に髪でつり下げ、自ら矢をとって殺してゐます。「お前はおれの命令だからといって天皇を殺し奉った」といって矢を放ち、「おれが怒りに駆られていったことなのに天皇を殺し奉った」と次の矢を放つ。このとき駒は、「わたしは、ただ大臣(おほおみ)あるを知って、天皇の尊ぶべきを知らなかった」と叫んでゐます。

これも注目すべき言葉です。駒にとっては主人である馬子が全てであって、その上にいらっしゃる天皇といふ権威ある存在、大事なお方がいらっしゃるといふことを知らなかったといふのです。太子は、『憲法十七条』の十二で、《国に二君なく、民に両(ふたりのあるじ)主なし。率土の兆民(くにのうちおほみたから)、王(きみ)を以って主(あるじ)とす》といってゐますが、天下の土地・人民の主(あるじ)は天皇である、といはなければならなかった原因がここにあると思ふのです。天皇でもって国をまとめてゆく、国家のまとまりは天皇しかないといふ確信なのです。

馬子は、崇峻天皇(うまやどのみこ)を弑逆したあと五九二年に姪にあたる推古天皇を擁立します。日本最初の女帝です。厩戸皇子、のちの聖徳太子が、この女帝を助けるために皇太子となり、また摂政として蘇我馬子と一緒に実際の政治を執ることになります。このとき聖徳太子は一九歳でしたが、満年齢でいへば一七・八歳で、今の高校生ぐらゐです。

私は、なぜこのとき馬子は自から天皇にならなかったのだらうか、と思ひます。権力を独占(ひとりじ)めして、ならうと思へば何でもなれたのに、なぜ天皇にはならなかったのか。天皇家を廃止することも、自分が天皇になることも可能であったと思ふのです。しかし、彼は天皇になりませんでした。

中国や西洋では、力のあるものが次々にとって代って王になってゐます。しかし、日本の天皇はちがひます。武力や権力で、その地位を得たのではありません。天皇になる家系は固定してゐたのです。その中から豪族たちに推され、推戴されて天皇になってゐるのです。だから自分の姉妹を天皇に嫁がせ、その子供を天皇にすることはあっても、自分が天皇にはなれないのです。

聖　徳　太　子

私は、今まで太子が登場するまへの六世紀が、いかに多くの課題をかかへてゐたかを話してきました。任那滅亡といふ最悪の状態の中で、蘇我・物部は対立してゐる、天皇は暗殺される。六世紀には全くいいところがありません。外交政策は破綻し、国家は分裂の危機をはらみ、まさに内憂外患そのものでした。

太子は、これらの難問を一つ一つ解決してゆかねばならぬ。そのためには、天皇を中心にした強力な国家をつくる。その手始めが《冠位十二階の制》。生まれながらに身分が決定される氏姓制度ではあっても、その中で秀れた働きや才能のある個人を役人として登用する。世襲ではなくて、天皇の任命による役人で国家組織を整へようとする。これは画期的な改革でした。

そして、《憲法十七条の制定》。これはこの豪族たちに国家の役人としての心がまへを説いたものですが、この中の十条を読んだときは驚きました。

「忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ」

忿は心の中の怒り、瞋は表情に表はれる怒り。これらの怒りを棄てて、人の違ふことを怒ってはいけない。

「人皆心有り。心各執有り。彼是とするときは則ち我は非とす。我是とするときは則ち彼は非とす」

なぜ怒ってはいけないかといふと、人は皆んな心をもってゐる。また心といふものは執着しがちなものである。だから、彼が正しいといへば私は違ふといふし、私がこれが正しいといへば彼は違ふといふ。

「我必ずしも聖にあらず。彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。是非の理詎ぞ能く定

むべき」。

私は必ずしも聖人ではなく、彼だって必ずしも愚かであるわけではない。共にいたらぬ凡夫である。どうしてどちらが正しいと決めることができようか。私はここで馬子のことをつい想ひだしてしまひます。

「相共に賢愚なること鐶の端無きが如し」賢さと愚かさは皆んなもってゐる。ちゃうど耳飾りがまんまるく端がないやうに現はれたり入ったりしてゐる。

「是を以て、彼の人瞋ると雖も、還って我が失を恐れよ。我獨り得たりと雖も、衆に従ひて同じく挙へ」

だから、もし彼が怒っても自分を反省しなさい。自分が正しいと思っても、まず皆んなに従って行ひなさい。

私には、この十条に出会ふまでは、太子は夢のやうな、童話の世界のやうな人でした。しかし、この文章に出会ひ、太子は人間なのだ、このやうな心の苦しみ、矛盾に耐へながら、国家の事業に専念されてゐた。教科書では断片のみですが、『憲法十七条』の全文を読めば太子の考へが具体的にわかります。太子は、今までの豪族連合にのっかった天皇ではなく、天皇と人民が直接つながった国家を作らうとされてゐる。一君万民の統一国家を作りたい。既成豪族ではなく、下級の秀れた役人の登用によって作りたい。この意気込みが伝はってまゐ

ります。

さて、次に大事なことを一つお話したい。それは、太子は単なる平和主義者ではないといふことです。任那回復に全力をつくしました。国家の大事業でした。今日、私が四世紀から話をはじめたのもそのためです。三百年間、日本の唯一の海外の領土が滅びたのです。

欽明天皇は死に臨み、「新羅をうちて任那を回復せよ。任那と相和して元のやうにならないならば死んでも死にきれぬ」と敏達天皇に遺言される。この遺言は、敏達・用明・崇峻天皇と引き継がれます。太子はこれを実行に移す。

一回目は、六〇〇年新羅の五城をおとし、新羅は任那の地を返し降伏する。しかし、日本軍が撤退するとまた任那を奪ひ返す。二回目は、弟の来目皇子を将軍として出発させるが、九州の筑紫でなくなるので、三回目は兄の当麻皇子を将軍として出発させる。するとこの皇子の妻がなくなり、遂に沙汰やみとなる。任那回復がいかに困難なものであるか、痛感されたものと思はれます。

しかし、太子はこの半島出兵と同時に隋に使者を送ってゐます。遣隋使の派遣です。《日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す》　有名な国書の言葉です。誠に堂々たる言葉で、五世紀の「倭の五王」のへりくだったところがありません。中国と対等の外交をひらく。高句麗や新羅は、このころ隋に朝貢し封冊をうけてゐました。封冊といふのは、中国王朝の

臣下として従属外交を意味しますが、日本はこれときっぱり手を切った。この外交方針の転換は、画期的なものです。

「日出づる処の天子」とは天皇のことを意味しますが、「天皇」といふ言葉がはじめて登場するのは、やはりこの遣隋使の国書においてです。「天皇」といふ言葉には、独立国家の自覚がこめられてゐます。

天智天皇

聖徳太子が六二二年、四十九歳でなくなると、また蘇我氏が威勢をふるってきます。天皇家しか許されぬ八佾（やつら）の舞ひを自分の祖先の墓の前で舞はせたり、天下の人民を徴発して生前に自分たちの蝦夷と入鹿の墓をつくり、陵（みささぎ）とよびました。陵といふのは、天皇と皇后だけの墓です。蝦夷は天皇になったつもりだったのか。

このとき、次の天皇をだれにするかといふ皇位継承の問題がおきたとき、入鹿はかねてから人望の高い、有力な皇位継承者のお一人であった聖徳太子のお子さま山背大兄王をきらって、つひに大軍をつかはし、王を討たせました。

王は妃や子弟と一緒に生駒山に逃れ、四五日の間飲まず食はずにがんばりました。周囲の

ものが「東国に落ちのびて兵を集めて攻めのぼりませう。必ず勝ちます」といふ。しかし王は、「その通りであらうが、わが身一つのために民を苦しめることはしたくない。わが身を入鹿にあたへよう」といって一族二四人もろとも首をくくって亡くなりました。「一つの身の故によりて百姓を残り害はむことを欲りせじ。是を以て、吾が一つの身をば、入鹿に賜ふ」。これも忘れられない言葉です。王は、父聖徳太子の教へに従って死んだのです。聖徳太子一族はここに滅亡しました。

しかし、王の死は豪族たちに深刻な衝撃を与へます。もはや入鹿を思ひのままに振るまはせてはいけない。これから一年半ののち、あの若き一九歳の中大兄皇子を中心に、入鹿打倒が成功します。世にいふ「大化の改新」です。王の死は無駄ではなかった。「夫れ身を損てて国を固めば、亦丈夫にあらずや」。父聖徳太子の夢みてゐた「大化の改新」を実現させたのです。天皇家を中心とする新しい中央集権国家のありかたが、はっきりと打ちだされました。聖徳太子の政治を「大化の改新」が受け継いだのです。

「大化の改新」では、皇族や豪族が土地・人民を支配することをやめて国家の所有とします。公地公民制です。皇太子となった中大兄皇子みづからが入部といふ私有民と屯倉といふ直轄地を天皇に献じてゐます。この行動は、自分の私有民、自分の土地を手放し切れない豪族たちにはショックだったでせう。中大兄皇子は「天に雙の日なく、国に二の王無し。是の

故に、天下を兼ね扞せて、万民を使ひたまふべきところは、唯天皇のみ」と孝徳天皇に奏上してゐます。断固とした態度で公地公民化に踏み切り、天皇を中心とした新しい中央集権国家の確立を目ざしたのです。

ところが、一五年後に難問が発生。朝鮮問題です。お母さんの斉明天皇の六六〇年、日本の友好国である百済から救援を求めてきた。百済が、唐と新羅の連合軍に占領されたのです。百済が滅びれば、日本は朝鮮半島での足場を全て失ふことになる。中大兄皇子は百済救援の出兵を決意しました。斉明天皇は詔を出す。「百済が救ひを求めてきた。依るところなく告げむところもなしといふ。戈を枕にし敗戦の苦しみを忘れまいとしてゐる。必ず救ってほしいと、遠くから来りて申す。志奪ひ難きあり。将軍は分れて百道よりともに進むべし。雲のごとくに会ひ、雷のごとくに動きて、新羅をおとし百済を救はう」。

兵士を乗せた軍船は難波をたって、まづ九州に向ふ。その途中、四国の熟田津に勢ぞろひしたとき、額田王は斉明天皇に代って、たからかに歌ひあげた。

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は榜ぎ出でな

熟田津で、舟出を今か今かと待ってゐると明るい月も出てきた。潮も満ちてきた。さあ軍

船よ、今こそ漕ぎ出さう。いい歌ですね。熟田津は瀬戸内海に面した今の松山の近くの港でせう。何百といふ軍船が兵を満載し、今か今かと船出を待つ、そのひしめきあふさまが目に浮んでまゐります。美しい月が出てきた。潮も満ちたぞ。今こそ積年のうらみをはらさうぞ。一挙に形勢を挽回しよう。

ところが九州の朝倉宮にいったとき、突然思ひがけないことが起ります。母斉明天皇の死です。六八歳。唐・新羅との決戦を前にしてのはりつめた時期に母の死を迎へました。中大兄皇子は、母を偲びつぎのやうな歌をよみました。

君が目の恋しきからに泊(は)てて居てかくや恋ひむも君が目を欲(ほ)り

母帝にもう一度お目にかかりたいから柩のそばに泊ってゐる。それにしてもなぜこのやうに恋しいのだらうか。お母さん、目を開けてください、もう一度お会ひしたい。これは何と優しい歌でせう。母をかぎりなくお慕ひする、その悲しみが伝はってまゐります。

衝撃は大きかったが、いつまでも悲しみにくれてゐるわけにもいかなかった。彼は称制といって、皇太子のままで天皇に代って政治を執った。そして一気に勝敗を決しようと、数万の百済救援軍は続々と海を渡ってゆきました。だが、白村江(はくそんこう)といふ河口で日本軍は唐・新羅

の連合軍にやぶれました。水軍においては日本軍は劣勢であり、まっしぐらに敵の戦列に突進しましたが、唐の水軍はあっといふ間に左右にわかれ、日本軍をとりかこみ、四方から攻撃をうけ敗北しました。四百余艘の船は次々と潮の中に沈み、溺死するもの多く、海は赤く染まりました。

白村江の敗戦は、未曾有の国難となりました。傷つき敗れた兵が帰国してきます。敵は勝ちに乗じて、今にも日本に押し寄せてくるかもしれません。敗戦の責任者として中大兄皇子の苦しみはいかばかりだったでせう。彼は防人をおき水城を築き、近江に都をうつし、そして、やっと即位しました。天智天皇、五五歳です。あの蘇我蝦夷・入鹿をほろぼしてから二三年がたってゐたのです。

さて、皆さんいかがでせうか。私は急ぎながら四～七世紀の歴史を天皇を中心にみてまゐりましたが、それぞれの天皇がいかに多難なご生涯であったかが、わかっていただけたでせうか。

天皇といふものはたとへば武力や財力をたくはへた確固とした存在ではなく、権力者が現はれればいつでも倒せるやうな弱ひ存在でもあったといふことも、おわかりになったと思ひます。それにも拘らず、なぜ倒すことができなかったのか。または周囲のものがさうさせなかったのか。考へれば不思議な思ひがするのであります。そして数々の危機に陥ったとき、

天皇を中心にまとまり、分裂を防ぎ、国として発展してきた。それは、これを支へてきた国民の努力といふものを考へなければならないと思ひます。

楠木正成

次に楠木正成について一寸お話したいと思ひます。これはNHKの大河ドラマで「太平記」を今やってをりますので、みなさんもご関心をお持ちだと思ひます。時代は急に鎌倉時代にとびます。

鎌倉時代も末期になると土台がゆるんできました。惣領制はくづれるし、御家人は貧乏になるし、借金はつもるし、生活は苦しくなる。一方将軍を輔ける執権として、実質的に幕府の最高責任者であった北条氏は守護職を独占し、地頭もまた、多くが北条氏に帰してゐた。御家人の不満は高まり、幕府は危機を深めてゐました。このやうなとき、幕政の責任者である執権北条高時は凡庸で、「田楽の外他事なく候」といったありさまでした。

このやうなときに後醍醐天皇が登場します。三一歳でした。幼いときから賢明で気性にすぐれ、りっぱな天皇として評判は高く、関所を撤廃したり、米が高いときは公定価格を定めたり政治に意欲的で、皇位継承をめぐって対立的関係にあった花園上皇でさへ日記に、「近日

政道淳素に帰し、君すでに聖主たり、臣また人多きか」と評したほどでした。天皇は政治に熱心になればなるほど幕府の政治が我慢できなくなり、これを倒し天皇みづからが政治を執ることを決意したのです。

幕府を討つ計画は二度失敗。三度目、またもや計画が露顕しさうになり、皇居を脱出し挙兵します。小高、笠置山におちのびるが、集まる兵はごくわづかでした。とても幕府と対抗できる兵力ではない。天皇は憂ひの色深く、疲れて眠りにつく。このとき夢をみます。御所の庭先と思はれるところに大きな常磐木（ときはぎ）があり、葉がよく繁り、特に南側の枝は一段と緑が多い。そこへ二人の童子があらはれ、「あの大木のかげに南に向いた御座があります。あの席で、しばらくお休み下さい」といって天のかなたに消えます。眠りから醒めた天皇は、木の南といふことが印象にのこり、木に南と書くと楠といふ字になる。楠といふ武士に頼れといふことか、といふことでさがすと「河内国金剛山の麓に楠木正成といふ、弓矢をとって名を得たる者が候なれ」（『太平記』）といふことで、天皇のもとに召し出される。このとき三七歳。正成は、たのもしきことをいふのです。「正成一人いまだ生きてありと聞こし召され候はば、聖運つひに開かるべしと思召され候へ」。これは決して大げさなことばではなく、これ以後の正成の戦ひぶりをみると、まさにこの通りになるのです。

しかし、ここでは天皇は幕府軍に攻められ、捕へられて隠岐に流されますが、正成は天皇

との約束どほり赤坂城で兵を挙げる。手勢わづか五百騎ばかりでした。赤坂城は小さな砦ですが、幕府軍はこれが落せないのです。城の塀にたどりついても二重造りで、外側の塀を切り落す。大木や大石を投げ落す。熱湯をあびせる。神出鬼没のゲリラ戦で、幕府軍の死者はおびただしい数となる。そこで兵糧攻めに切りかへると、正成は城内に火をはなち全員自刃とみせかけ、実は金剛山へと逃げてゆくのです。このとき、正成と共に戦ったものは野伏です。野伏は武士ではなく百姓で、これをうまく使って奮戦した正成とは、余程魅力のあった人物にちがひありません。

一年後、正成は再び挙兵。こんどは千早城である。幕府は三〇万の大軍をもって押し寄せてくるが、正成はまたもや弧軍奮闘する。九〇日間持ちこたへ、敵の戦力を浪費させた。このとき幕府軍の無力をみて、各地で〝北条氏を倒せ〟〝幕府を倒せ〟の声が起る。このとき後醍醐天皇は隠岐を脱出。天皇から幕府討滅の綸旨をうけた足利高氏は、京都の六波羅を攻めほろぼし、新田義貞は鎌倉をほろぼした。江戸時代の新井白石は『読史余論』の中で、「六十六ケ国のうちで、ただ正成一人が筋をまげず、終始小勢で大勢とたたかひつづけたからこそ、幕府にそむく武士がつぎつぎにあらはれた」と指摘してゐる。幕府討滅の功績は、地方の一土豪にすぎなかった楠木正成によると思ひます。

後醍醐天皇は京都に帰り、新しい政治を行ふ。幕府も院政も摂政・関白も廃し、天皇親政

の理想を実現しようとします。これを建武の新政といふ。しかし、三年たらずで崩壊。足利尊氏の反乱です。尊氏は、奥州からやってきた北畠顕家、若冠二〇歳にやぶれ九州へ敗走します。このとき正成は、「義貞を討って尊氏を召し返し、和睦されたはうが得策です」、それしか建武新政を存続させる道はないと上奏するが、公家たちに笑はれとりあげられなかった。

尊氏は一カ月後九州を支配下におき、大軍となって京都をめざして攻めのぼってくる。正成の予言通りです。「正面から立ち向っても敗北するので、ここはいったん天皇は比叡山に行幸し、自分は河内へ撤退する。そして敵を京都に入れて兵糧攻めにし、弱ったところを京都へ攻め上るべきだ」と正成は公家たちに進言するが取りあげられず、わづか五百騎ほどを従へて兵庫の湊川へ下ってゆきます。正成は死を覚悟してゐました。

途中桜井で待ってゐたわが子正行（まさつら）を呼びよせて、「このたびの合戦は天下分け目の一大事ゆゑ、父が汝の顔を見るのも今日が最期となるかも知れぬ。汝はこれより河内に帰り、母に孝養を励むがよい。父が戦死したのちは、おそらく足利尊氏の世とならう。しかし、天皇への忠節を忘れてはならぬ。大君に身命をささげることこそ、第一の孝行と心得よ」。このとき正行は一一歳でした。

正成は湊川に向ふ。戦ひは壮烈なものとなる。二〇万とも三〇万ともいはれる足利軍と朝一〇時から三刻（とき）（六時間）の間に、一六回も死闘をくり返した。残り七三騎となる。正成は身

に一一カ所の傷をうけ、顔は血だらけだった。正成は弟の正季に向ひ、「こんど生まれるときは何に生まれたいと思ふか」ときくと、正季はからからと笑ひ「やはり人間に生まれてくることにしませう。七たび人間に生まれかはって、朝敵を滅ぼしたく存じます」と答へた。正成は大きくうなづいて「わしもさう願ってゐた」といって、共に脇差をぬき互ひに刺し違へて死んだ。

足利方の者が書いた『梅松論』にも正成の死を悼み、「まことの賢才・武略の勇士とも、かやうの者をや申す可きとて、敵も味方も惜しまぬ人ぞなかりける」と評してゐる。正成の死は決して無駄ではなく、のちの明治維新の志士たちに大きな感銘を与へ、明治といふ時代を生む源泉となってゐます。

それにしても、正成は後醍醐天皇から「急ぎ兵庫にくだり、義貞を支援せよ」と命じられると、勝ち目のない戦とわかってゐながら潔く湊川におもむく。もっと他に生き方がなかったのか。もっと合理的な生き方ができたのではないかと人はいひますが、さういひながらも人々が正成が好きなのはなぜか。正成が戦前も戦後も一貫して人気があるのは、純粋な愚直なまでの天皇への忠誠心にあるのかなと私は思ひます。天皇にそこまで魅力を感じた男。そのためには命を捨ててもよいと思った男。さういふ楠木正成について語りました。

どうか、はじめに申しましたやうに「天皇なんか考へたことないよ」とか「知らないよ」

といったことではなくて、この機会に、もっと身近かなものとして受けとめ、考へていただきたいと思ひます。

激動する国際情勢と日本

杏林大学教授・評論家
田久保　忠衛

タツナミソウ

国際情勢を見る基本姿勢

㈠視野が広ければ広いほどよい

㈡判断する材料は事実以外の何ものでもない

㈢国際の常識で判断する

今日の国際情勢

㈠東西関係を変貌させた三つの要因

①西側の軍事力

②共産主義の自壊作用

③ユニークな指導者ゴルバチョフ

㈡ソ連の直面する諸問題

㈢湾岸戦争の本質

ニュー・ワールド・ディスオーダー時代の日本

質疑応答

国際情勢を見る基本姿勢

私は三十年間現場にゐてこの目で色々なものを見て来た。そこで皆さんに私がどういふ姿勢で国際情勢を見てゐるかを先づ申し上げてみたい。第一、視野が広ければ広いほどよい。第二、国際問題を判断する材料は、事実以外のなにものでもない。第三、国際の常識で判断する。この三つです。

㈠視野が広ければ広いほどよい

昭和四四年（一九六九年）、私は、時事通信社の支局長として那覇に駐在してをりました。当時の沖縄は、アメリカの軍政下でその下に琉球政府があり、首席は屋良朝苗さんだった。屋良首席が、当時、我々記者団を一週間に一回自分の部屋に招かれる。オフレコといふ約束で或る日かういふことを言はれた。「今、沖縄返還の大交渉が始まってゐる。自分は沖縄県民の先行きが不安でならない。それで月に一度ないし二度首相官邸に行って佐藤栄作首相にご相談申し上げた。ところが三度に一度しか首相にお目にかかれない。外務大臣か内閣官房長官

で誤魔化されてしまふ」。私は沖縄にゐた時、日夜沖縄のことばかりを考へてゐた。屋良首席と同じサイクルでものを考へてゐたので「内閣総理大臣といふのは何だ。」と実に怒り心頭に発した訳です。かういふことを一年やってゐるうちにワシントン支局長になれといふ転勤命令が来た。そこで東京に一週間滞在してビザ交付の手続きをしてワシントンに行くことにした。東京滞在中、佐藤首相担当記者を通じて文句を付けようかと思った程ですが、東京に二、三日ゐるうちに考へ方が変はった。

沖縄にゐた時に、私は琉球新報と沖縄タイムスといふ二つの地方紙を読んでゐた。この一面トップには沖縄の問題が来る。沖縄の女学生がアメリカ兵隊に追っ掛けられた、こんなことが大きな活字で一面トップになる。一年一カ月こればかりを読んでゐて東京に帰って『朝・毎・読・日経・産経・東京』といふ全国紙を読んだ。ここに沖縄の問題が一面トップに来ますか。当時、沖縄は大問題だったけれども、それでも一面トップなんかに来はしない。琉球新報の編集局長は、百万県民にいい新聞を一部でも売らうと思ってゐる。読売新聞、朝日新聞の編集局長は、北は北海道から南は沖縄まで、一億二千万の国民にどういふいい記事を送らうかといふ視点でものを考へてゐる。従って全国紙を読んで私が考へ方を変へたといふのは「視点が違ふな」と思ったといふことです。要するに、佐藤栄作首相にとって沖縄返還は一つの問題、「ワン・オブ・ゼム」でしかない。その他に経済政策や外交がある。様々な仕事

のうちの一つが沖縄の返還問題だから、屋良首席に一々会ってゐる訳にはいかない。つまり那覇と東京の間に視点の相違がある。だから私は佐藤首相に文句をつけないでワシントンに行った。

ワシントンに行ってからまた気付いた。アメリカの『ニューヨークタイムズ』と『ワシントンポスト』の一面トップに日本のニュースが出て来ますか。日本から内閣総理大臣が来てワシントンで大統領と会っても余りニュースにならなかった。『ニューヨークタイムズ』『ワシントンポスト』の編集局長は日本だけ見て新聞を作ってゐるのではない。部数は百万足らずだけれども、この新聞を怒らせたら、ニクソン大統領も失脚してしまふ。ニクソン大統領が失脚すれば地球全体にその影響が及ぶ。従って編集局長は地球儀全体を見て新聞を作ってゐる。皆さん、ホワイトハウスに身を置いてください。アメリカから見

たら日本は重要かどうか。重要ではない。経済以外には役に立たない国です。当時は、経済も大したことない。当時のアメリカの最大の関心はソ連です。中東、中国も大事だ。イギリスもドイツも大事だ。つまりホワイトハウスからものを見てゐると日本といふ国自体は、「ワン・オブ・ゼム」、たくさんある国のうちの一つに過ぎない。

私が何を申し上げたいかと言ふと、那覇、東京、ワシントン、三つの観察地点がありますが、国際情勢を見る時は、那覇や東京で見てゐてもわかりません。地球儀全体をホワイトハウスから見て下さい。あるいはクレムリン宮殿でジーッと世界地図に目配りをして下さい。あるいは天安門広場に立って世界の大戦略を考へて下さい。視野が広ければ広いほどよいと申し上げたのはこの為なのです。

㈡判断する材料は事実以外の何ものでもない

昭和五八年(一九八三年)、当時、私は時事通信社の編集局次長だった。朝刊担当の編集局次長ですから翌日の朝刊をつくるために午後一時に出社するのですが、ある日、私が出社すると社会部長が私のところに来て「大変なことになりました。大韓航空機が、消息不明になった。北海道の近辺から交信が途絶へた」と言ってゐるのです。これには日本人が多数乗って

ゐて、アメリカからソウルへ行く便だといふ。政治部は首相官邸、防衛庁などを、社会部は警視庁、道警察本部などをカバーし、外信部には、アメリカ、ソウル、あるいはモスクワの特派員に「あらゆる飛行機の情報を入れろ」と手配をさせたが、手掛りとなる情報は来ない。従って「大韓航空機行方不明」といふ朝刊用の最初の見出しを作って早版用のニュースを流した。するとテレビ朝日から「特別番組に出てくれ」といふ電話がかかってきて、私はそこへ行った。夜の十一時ぐらゐからの番組でしたが、そこに突然フラッシュニュースが流れてきて、アメリカのシュルツ国務長官が午前十時過ぎ(日本の午後十一時は向かうの午前十時になります)に緊急の記者会見を開いて「樺太上空でソ連の戦闘機に撃墜された」と発表したといふ。私は社に大急ぎで帰って来て朝刊の見出しを差し替へた。「行方不明のKAL機、樺太上空でソ連戦闘機撃墜、米国務長官緊急の記者会見で発表」、かういふ見出しに差し替へて、本文を入れ替へて、家に帰った。一時半か二時ぐらゐだった。するとフジテレビから電話がかかってきて、「あしたの『三時のあなた』といふ婦人番組に出てくれませんか」といふので出演することになった。女性司会者の質問に答へてゐると「ここで、日本で有数の国際情報通の先生のインタビューを取ってありますので、ご覧下さい」といふ。見るとその先生がいきなり「この飛行機はCIAのスパイ機だ」と言った。私はびっくりした。私は事件の経過を時系列的に知ってゐるので、それを見て「何の根拠があるんだ。それは推理ではないか」と

言った。申し上げて置きますが、事実以外に信用できるものはない。ところが「推理」といふのが今の国際情勢分析には大変流行してゐる。私にはノートが二冊あるが、「何月何日、誰がどこで何を言った、やった」、これしか書いてゐない。これ以外に一切材料がない。これを積み上げていって大体無理のない予想をする。これ以外にないのです。怪情報に惑はされてはいけない。事実以外に材料はありません。

㈢国際の常識で判断する

国際問題を勉強する時には、「日本の常識」で判断してもらひたくない。国際の常識といふものがあるのです。例へば、非核三原則といふものがある。「作らず、持たず、持ち込ませず」、これを信用してゐる人がゐますか。ゐたらその人は頭がをかしい。ただし、日本の常識では、日本の領海にアメリカの第七艦隊の艦艇は核を持って入って来ないことになってゐる。領海の外で核をポイと捨てて、どこかに置いておいて、横須賀に入ってきて給油をして出て行く。出て行く時、また核を積んで行く。本当にさういふ風に考へてゐる人が居たら、その人は頭がどうかしてゐる。ところが、日本では、与野党、政府の答弁がさうなってゐる。「寄港も通過も許しません」と言ってゐる。今から六、七年前、ライシャワー元駐日大使がインタビュ

ーで「まだ日本はそんなことを言ってゐるのか。積んで入ってゐるに決まってゐるではないか」と言ってゐる。世界中皆さうです。なぜ日本はこんなばかばかしいことを信じ込んでゐるのか。もっと冷めた大きな基準で判断してほしい。

今日の国際情勢

㈠東西関係を変貌させた三つの要因

一九八九、九〇、九一年のここ三年の間にとんでもないことが起こった。共産主義が我々の眼前で音を立てて崩れ始めた。ゴルバチョフがペレストロイカを推進したことが発端となって一九八九年の暮れには東独でホーネッカー議長が、国民に突き上げられて倒れた。これが切掛けになってブルガリア、ハンガリー、チェコ、ポーランド、ルーマニアと、僅か二カ月の間に東欧に革命が起こってしまった。その中からドイツの統一が生まれた。これはドイツ人自身も予想できないことだった。この状況の中で米ソの関係が崩れてきた。軍事だけは依然として対立の構図は残ってゐるが、政治と経済はガタガタになってきた。東西関係が崩れると、今度は中東にゴタゴタが起こってきた。イラクのサダム・フセインがクウェートに

突如として侵攻した。これをアメリカを中心とした多国籍軍が押さへた。

かういふ激動の情勢であるが、実は今後何が起こってくるかわからないのです。北朝鮮がどうするか。今、核に接近してゐるといふ。サダム・フセインもまだ健在だ。すぐ横でシリアのアサド大統領がジーッと狙ってゐる。イランがイラクとのバランスが崩れて目立って強大な勢力になって来て、何が起こるかわからない。中国でも鄧小平が死んだら何が起こるかわからない。インドが今、ものすごい勢ひで海軍力を増強してゐる。ところが日本では、「緊張が緩和した」、「ソ連の脅威はなくなったから、自衛隊の役割は終はった。防衛費を削減して社会福祉に回せ」などと言ふ人もゐる。何かおかしいのではないかと私は思ひます。

ではどうしてかういふ激動が起こってきたのか。東西関係が変はった原因は三つあります。第一、西側に軍事力があったこと。第二、共産主義が自壊作用を起こしたこと。第三、ゴルバチョフといふユニークな人物がゐるといふこと。

①西側の軍事力

一九七五年から七九年までの間、ソ連の影響力は先づインドシナ半島に及び、南ベトナムが北ベトナムに侵略された。ベ平連の小田実氏などがこれを「民族解放闘争の輝かしい勝利だ」と言ってゐたら、バン・チェン・ズンといふ北ベトナムの参謀総長が自伝の中で、侵略と自分で言ってゐるのです。「ホーチミン大統領がソ連と密接な関係を結んで、これをバック

に計画的にやった。南を侵略した」。北は更にラオスを支配下に収め、一九七九年、カンボジアに一斉攻撃を加へた。インドシナ半島が赤くなった。次に、アンゴラ、モザンビーク、エチオピア、南イエーメン、ニカラグア、そして、一九七九年一二月二十七日、アフガニスタンにソ連が十万の兵を入れた。これでアメリカは、これではどこまでソ連の影響力が伸びて来るかわからないと思った。

その時のソ連はどうであったのか。一九七三年の暮れに中東戦争によって石油ショックが起こった。石油の価格が上がり、八五年まで高値が続く。ペレストロイカをしなくても石油がジャブジャブ出てくる。この只の石油が高い値段で売れるから、経済は安定して国内の改革まで頭が回らなかった。そこで、第三世界に莫大な支援をして力を伸ばして来た。

その時のアメリカの大統領はカーターだった。ニクソン大統領を私は素晴らしい大統領だと思ふが、この人がウォーターゲート事件で失脚した反動で、カーターといふ真面目な人を持ってきた。真面目な人は、外交、防衛問題が必ずしも得意ではない。人権外交と言ってゐるうちに、このやうになってしまった。アメリカ国民は、深刻な反省に基づき、カーターを引き下ろした。アメリカ国民は、ソ連の世界的進出を、カーターのやうな弱いピッチャーでは防げないと思ってレーガンといふ剛球投手をマウンドに送った。

一九八一年一月二十日、レーガンが大統領になった。大統領になって第一回目の記者会見

で「ソ連はうそつきで裏切り者である」と、大声で言ったのです。レーガンは、物凄いパンチを四年間に亙って繰り返しソ連に叩き付けた。レーガンは八年間大統領を務めますが、その前期の四年間に黙って実質三二パーセントの軍事費増を推進した。後になってわかったのですが、レーガンの側近が、戦争をせずにソ連を潰す為の大戦略を考へた。ソ連が西側に脅威を与へるやう猛烈に軍事費を伸ばしてゐる。ＣＩＡ（中央情報局）とＤＩＡ（国防省情報局）とが協力して過去に遡って二十年間のソ連の軍事費と生活水準との相関関係を調べ上げた。年間実質五パーセント以上の軍事費増をソ連に強制すると、一九九〇年にはソ連の経済は音を立てて潰れる。ここまで計算して、物凄い勢ひでアメリカは軍事的にソ連を追ひ越した。ソ連はブレーキをかける訳にはいかないから、また追ひ越さうとする。

さうして、どうやらガタが来たらしいのが、八九年辺り。ただし、八五年の一月にレーガンは第二期目を務めます。またパンチを打たうとしたら、二ケ月後の三月にソ連共産党の書記長に就任したのがゴルバチョフ。ゴルバチョフはレーガンに付き合ってゐたら国が潰れてしまふ。そこで急遽ペレストロイカを始めた。これが本当の意味です。

つまり、ソ連を潰したのは、第一にレーガンの力です。レーガンに付き合ってＮＡＴＯ諸国も皆軍事費を積み上げた。西側の敷居が上がると、ソ連も上げざるを得ない。この悪循環で自分の首を締めることに気がついたのがゴルバチョフであった訳です。

②共産主義の自壊作用

ソ連の共産主義が音を立てて崩れ始めた。これは自壊作用です。今から七、八年前にソ連に行った時、ある新聞社の特派員が、「面白い所に連れていきませう」と言って、車である工場現場につれて行ってくれた。夏草が倒れてゐるので何だらうと思って見ると、午後二時位なのに、労働者が皆寝転がってゐる。見ると側に透明なビンが落ちてゐる。ウォトカを飲んで昼寝してゐるのです。さういふ習慣なのかと思ったら、さうではない。この中に共産主義の根本的な欠陥が端的に表れてゐるのです。九時に行って五時まで働けばいい。一定のノルマ位はあるかも知れないが、それ以外何もしなくてよい。こんなことをやってゐれば、潰れるに決まってゐる。

今、西側の社会にも、現在の日本の証券や銀行の問題の様に行き過ぎがあります。しかし共産主義といふものは、今述べた様な働かない人間がたくさん出て来る。ソ連の農業生産を日本の学者が計算した。馬鈴薯がどの位採れるか。ソ連の農地は全部国有地ですが、その内僅か三パーセントを自留地とした。自留地といふのは国有地ではなくて、自分でお金を出して借りてその土地で自分で耕して採れたものを売っていいといふ土地ですが、すると僅か三パーセントの所から馬鈴薯全体の四、五十パーセントが採れてしまった。これは共産主義に根本的な欠陥があるといふことです。それが漸く表面化して来たといふことです。一九一七

年にソ連に革命が起こって七四年目で、共産主義が潰れてしまった。今残ってゐるのは四つです。二つのP（ピョンヤンと北京）と二つのH（ハノイとハバナ）です。北朝鮮、中国、ベトナム、それからキューバ。ここにも、今や何か新しい波が押し寄せて来さうな気配です。

③ユニークな指導者ゴルバチョフ

ゴルバチョフ以前のソ連の最高指導者、先づブレジネフについてですが、彼はアルコール中毒でその上〝カーキチ〟だった。七三年に来訪した時、ニクソン大統領がリンカーンコンチネンタルの新車を送った。その時ブレジネフは、早くモスクワに帰ってこのリンカーンコンチネンタルを運転したくて仕様がないと側近に漏らしたといふのです。こんな者が書記長だったのですから、いい政治も、経済政策もできる訳がない。ブレジネフが亡くなった後がアンドロポフ。アンドロポフには笑顔の写真が一枚ものこってゐない。下から上に睨み付ける様な陰惨な写真だけです。これはいけないといふので、KGBが、情報操作を行なった。当時の日本の新聞を見て下さい。「アンドロポフは、ブランディを飲んで、ジャズを聴きながらアガサ・クリスティを読んでゐる」、かういふことを言った。しかし、あれはKGBの議長として暗殺、誘拐、人の国の転覆工作を長年やってきた人の顔です。ジャズが好きな顔なんかしてゐない。この人は一年余りで死んでしまった。その次にチェルネンコ。これまた、何か一つ病名を言へば当たる位に全身病気だった。この人は八ケ月で死んでしまった。三年間

で最高指導者が三人も亡くなった国は、少なくとも近代国家にはありません。

そこで八五年の三月、当時政治局で最年少の五四歳でゴルバチョフが書記長に選任された。ゴルバチョフが偉大な政治家かはわからない。しかし、若い。それに判断力は抜群。特に、自分が危ないと思った時、判断力は抜群である。彼のもう一つの特徴は、奥さんです。歴代書記長の夫人、こんなものはソ連人も見たことも聞いたこともない。ゴルバチョフ夫人は誰でも知ってゐる。ライサ夫人を連れてあちこち飛び回ってゐる。本人は陰で何をしてゐるかわからないけれども、奥さんを連れて歩くと、いかにも真面目な、家庭を愛する暖かい人間の様に見える。

ノーベル平和賞委員会が一九九〇年十月、ゴルバチョフにノーベル平和賞を授与した。ゴルバチョフは授賞式に行けずに、外務次官を代はりに遣らせた。彼はバルト三国に突っ込んでいくかどうかを考へてゐたのです。一月十三日、リトアニアに戦車隊を中心にして突っ込んで十五人を殺した。十六日、ラトビアに連邦内務省の特殊部隊黒いベレーが突っ込んでいって五人を殺した。するとノーベル平和賞委員会の某氏が「ゴルバチョフはノーベル平和賞を返すべきだ」と言ったといふが、初めからやるべきではない。現役の政治家といふのは、棺を覆ふまで評価が定まるはずがない。ノーベル賞を授与するなんて、ノーベル賞委員会は不見識な集団と私は思ふ。それはともかくとして、ゴルバチョフといふユニークな人物がゐ

なかったならば、米ソ関係がかうなったかどうかはわからない。

(二)ソ連の直面する諸問題

今、ソ連はどういふ問題に直面してゐるのだらうか。「大変なことになってきた」のひと言であります。先づ経済がどうにもならなくなって来た。今、西側で一番いい資料は、去年の十二月に、ＩＭＦその他四つの国際経済機構が共同で調べた『ソ連経済の現状に関する報告書』です。これに拠れば今年のソ連のインフレ率は四十パーセント以上になるだらう。失業率は二倍以上になるだらう。経済がガタガタで失業者があふれてゐる。その上、東欧諸国から軍隊を引き上げてゐる。今、東独には三八万駐留してゐるが、これも三年以内に引き上げる。全部失業者にカウントしなければならない。ＧＮＰの伸び率はマイナス十パーセント以上になるだらう。先月の数字ではマイナス十一パーセント。一人当たりのＧＮＰはコスタリカと同じ位で、日本の十分の一ではないかと言はれてゐる。

政治はどうかといふことだが、これもだめ。共産主義の特徴といふのは、政治理論では一党独裁、経済理論は計画経済。この計画経済がだめだといふことがわかって、「市場経済だ」と言った。しかし今度は保守派から反撃を食らって「混合経済だ」と言ふ。社会主義を主体

にして資本主義的手法を導入して混ぜるといふが、何を考へてゐるのだかわからない。ただし、計画経済はだめになったといふことだ。

一党独裁の方も壊滅状態です。共産党が幾つにも分裂し、その他にもたくさんの政党が出てきてしまった。今でも共産党は最大の政党ですけれども、内部分裂の兆しがある。いや、もうすでに分裂しかかってゐる。今後は無数に細胞分裂していくのではないかと言はれてゐるわけです。要するに、経済も政治もだめといふことです。（注＝九一年八月のクーデター直後ゴルバチョフ大統領は共産党の解散を発表した）

権力闘争。エリツィンといふロシア共和国の首領が選挙によって大統領に当選した。ゴルバチョフは共産党の首脳の談合で書記長になった。自分は民衆の信頼を得てゐるのだと、エリツィンが言ってゐる。保守派も、軍・KGB・共産党、これが三者一体になって「ゴルバチョフはけしからん」と言ってゐる。ゴルバチョフは書記長になってから、去年の今ごろまではうまく右と左を操ってきた。ところが今や右と左の双方から反撃を食らってゐる。しかも左の代表のエリツィンが大変力を持って来た。彼との力関係が次第に彼の方に傾き、権力闘争の問題に直面してゐるといふことです。（注＝クーデター失敗で軍・KGB・共産党は致命的な打撃を受け、ゴルバチョフ大統領に代はってエリツィン大統領の権力が増大した。）

もう一つある。共和国の問題、民族問題です。民族問題といふのは、ロシア民族の他に細

かくいって百六十幾つの民族があって、今、十五の共和国の内、ロシア民族はソ連の面積の三分の二を占めるロシア共和国に九十パーセントが住んでゐる。あとの十四の共和国はウクライナ以外は小さな共和国です。ここに色々な民族がゐて、ロシア民族も共に生活してゐる。ところがゴルバチョフは、民主化＝デモクラチザチア、ペレストロイカ＝世直し、それからグラスノスチ＝公開を行って円盤を回してしまった。民主化を推進すれば、強制的に併合された国は分離独立して外に出ていかうとするのは当然でせう。特に、エストニア、ラトビア、リトアニアのバルト三国は独立しようとしてゐる。バルト三国がソ連に併合されるには次の様な経緯があります。一九三八年、ヒットラーがミュンヘン会談でチェコスロバキアのズデーテンランドを寄越せとイギリスを脅したのです。イギリスのチェンバレンは、「独裁者の要求に応じてこれを与へれば緊張が緩和するだらう」と、自分の国でもないのに与へてしまった。彼がロンドンへ帰ってきた時、ロンドンタイムスは異例の社説を掲げて、「チェンバレンは偉い。平和の神様だ」と讃へた。チェンバレンは首相官邸でVサインを出した。ところがヒットラーはチェコスロバキアを三九年に奪ひ、更にポーランドの隣のソ連が変な動きをしない様に独ソ不可侵条約を結んで、三九年、ポーランドに突っ込んでいった。これが第二次世界大戦の始まりです。その時、独ソ不可侵条約の下に秘密の議定書が交はされた。ヒットラーの下のリッペントロップとスターリンの下のモロトフとの外務大臣同士で闇取引をした。

この時バルト三国の人達は、自分達の意志に因らずしてソ連に併合されてしまった。

丁度五十周年目の一九八九年八月二三日、バルト三国の人達は立ち上がったのです。あの三国に、長い〝人間の鎖〟といふスクラムを組んで、モスクワに対してデモンストレーションをした。数ケ月後にゴルバチョフは乗り込んでいって凄い勢ひで「お前たちは独立宣言を出しただけで独立が出来ると思ってゐるのか」とやった。周りをKGBが警護してゐますから、民衆の中に堂々と入っていって「軍隊と警察を持ってゐるのはどこだと思ってゐるのだ」とやった訳です。

しかし、バルト三国の人達はめげなかった。九〇年三月、一斉に独立宣言を行なった。それからウクライナ共和国、アルメニア共和国、アゼルバイジャン共和国、グルジア共和国と各地で独立運動が始まり、最後に、独立宣言をした。四つの共和国が独立宣言を行なひ、あとの十一の共和国は主権宣言を行なった。最後には、一番大きいロシア共和国が、エリツィンが九〇年の六月に大統領に当選した直後に、憲法を改正して主権宣言を出してしまった。日本の場合に喩へていふと、先づ北海道が「独立するよ」といふ。すると九州が「俺もだ」。四国も「俺もバスに遅れてはいけない」となる。ここまではわかりますが、そのうち本州までもが「俺も独立だ」と宣言する。ところで、どこからどこへ独立するといふのですか。変なことになってしまった。

各共和国が次々に独立していったらどうなるか。一年余り前ですが、カーター政権の大統領補佐官だったブレジンスキー氏が『フォーリン・アフェアーズ』にソ連の民族問題の将来について書いた。一番いいシナリオはどういふことか。ブレジンスキー氏は言ってゐる。「ゴルバチョフよ、どこかで決断しろ。『わかった。十五の共和国がみんな独立してくれ。やれるなら全部やってくれ』といへ。年に一回、英連邦首脳会談の様なものを開けばいいではないか。議題を掲げて、それが終はったらみんなでワインでも飲んで、仲良くして、またそれぞれの国へ帰っていけばいいではないか。ソ連は十五に別れるべきであって、これがソ連にとっても西側にとってもいちばん結構である。」

一番悪いシナリオはどうか。これはアメリカの国防総省が心配してゐることですが、三万七千発の核弾頭がソ連全土に展開されてゐる。各共和国、例へば、ウクライナ共和国でゴタゴタが起こったとすると、これらはどうなるか。共和国はウクライナ共和国軍を作って、今駐留してゐるソ連軍を「外国軍とみなして撤退を要求する」とまで言ってゐる。それぞれの共和国軍が核を握って、トラブルが起こった時、これをぶっ放したらチェルノブイリの惨事どころではありません。地球全体が暗黒時代に突入してしまふ。このため西側は、ゴルバチョフを助けなければいけないのではないかといふ考へ方になってきた。

もしゴルバチョフが失脚して保守派の軍人が天下を握ったら何が起こるかわからない。こ

れはまづいといふことになって、少し条件を付けながらも、ソ連、ゴルバチョフを少しづつ支へてやってゐるといふのが現状です。

この先どうなるのかは誰もわかりませんが、この国がどうなるかによって地球全体、国際情勢全体に大変な影響が出て来るのだといふことだけは申し上げたい。（注＝クーデター事件後、バルト三国は独立を認められ、国連に加盟した。ロシア、ウクライナ、ベラルーシの三共和国間に「スラブ国家同盟」が結成されさうな事態を迎へてゐる。）

㈢湾岸戦争の本質

ハーバード大学ハンチントン教授が最近の論文の中で次の様に言ってゐる。米ソが対立してゐる時は解釈しやすい。敵か見方か中立かといふ三色の鉛筆を持ってゐればよい。これがをかしくなってきたら何が起こったか。韓国とソ連が国交を樹立した。米ソ対決の構図で考へてゐると、これはわからない。アメリカの手先だと言はれてゐたイスラエルが、ソ連と今、地下で国交樹立の交渉をやってゐて樹立は時間の問題だと言ふ。共産主義国家である北朝鮮が日本との国交正常化の交渉を始めた。これらも従来の米ソ対立の図式で見てゐるとわからなくなってきた。

中東も米ソが対立してゐるとわかりやすかった。アメリカは長年、ここに三つの柱を立てようとした。中東第一の軍事力を持ったイスラエル、中東第一の人口を抱へたエジプト、中東随一の金持ちであるサウジアラビア、この三つを抱へてゐる。イスラエルとエジプトはキャンプデービットの合意で仲良くさせる。三つさへ抱へておけば湾岸の穏健な国は皆くっ付いて来る。一方、ソ連は金がふんだんにあったころは、自分の手先になる威勢のいい国を三つ考へた。イラク、シリア、リビアです。米ソが対立してゐれば、米ソ絡みの戦争といふのは起こりにくい。トラブルがあるとすれば、地域戦争でイスラエルとパレスチナの問題で戦争が起こった。ところが、この過激派三国に対する経済支援、軍事支援がソ連、東欧が崩れた為にできなくなってしまった。その結果、サダム・フセインがやりたい放題にできることになった。湾岸戦争の本質はなんであったのか。

サダム・フセインは生まれた時にはお父さんがもう亡くなってゐた。母方の伯父さんがバクダッドの大学を出してくれた。ここで彼は革命を夢見るんです。当時の指導者を暗殺しようとする。機関銃で撃ったけれども当たらなかった。逆に警護の兵隊に左足を撃たれて、命からがらシリアを経てエジプトに逃げる。エジプトで彼が目撃したのがナセル大統領だった。ナセルは凄かった。「これは我々のものだ。西側帝国主義、出ていけ」と、スエズ運河をいきなり国有化した。「アラブよ、俺の旗のもとに集まれ」と言へばアラブ諸国が皆集まった。更

に非同盟諸国といふのを作った。米ソの対立に巻き込まれてはいけないといふ訳で、ユーゴスラビアのチトー大統領、インドのネール首相、インドネシアのスカルノ大統領の四人で肩を組みあって、第三世界の非同盟勢力を形成した。アラブは皆このナセル大統領を英雄と見たのです。その時、サダム・フセインは、頭が痺れてしまった。「よし、次のナセルは俺だ」といって、彼はイラクに帰って政界に入り込む。自分の従兄が三八歳で国防大臣をやってゐたのでこれをきっかけに大統領に接近して、僅かの間に副大統領になった。そして大統領になったのです。

彼は大統領になって何をやらうとしたか。二つあります。一つは、金を持たうとした。もう一つは核武装をしようとした。彼は何のために核を持たうとしたのか。核戦略を研究してゐる人なら、皆知ってゐる「相互確証破壊」（MAD）といふ考へがある。一つの国が核を持つと片方の国がバランスをとる為に核を持つ。これによっては絶対に核戦争は起こらない。つまり、一方が核攻撃をして相手が壊滅的打撃を受ける。すると今度は打撃を受けた方もやり返して最初に攻撃した方も壊滅的打撃を受ける。確実に相互が大変なダメージを受けここでカウンターバランスが働いて戦争が起こらない。この考へ方を証明するかの様に実際、戦後一回も核戦争は起こってゐない。皆バランスがとれてゐた為です。サダム・フセインが狙ったのは、中東で唯一核を持ってゐる国イスラエルの核を無力化する為に自分も核を持たな

ければいけない。しかも、必要とあれば使ふといふことです。五十万の大軍をいきなりヨルダンに入れる。イスラエルの安全保障の第一には「ヨルダンに兵を入れた国と宣戦布告」と書いてある。そこで「俺の旗のもとに集まれ」と言った場合にはエジプトもサウジアラビアもシリアもモロッコも皆集まって来るだらう。これで第二のナセルになれると考へた。それにはどうしたらいいか。八年間のイランとの戦争で金がなくなってゐた。隣に丁度日本と同じで、その代はり国防の意識のない絶好のカモがゐる。それで色々口実を言ってクウェートに突っ込んで来た。もう一つ、核を持ってイスラエルと最後の一戦をやらうとした。パレスチナ人はこの第一戦でイスラエルに突っ込んでいかうと今でも手ぐすねを引いてゐる。かういふ状況で湾岸戦争が起こったといふことです。

ニュー・ワールド・ディスオーダー時代の日本

現在の国際情勢は、敵と味方、中立の色分けが出来ない状況になって来た。これをブッシュ大統領は、戦争に勝った三月、議会で、「今や世界は二十一世紀にかけて〝ニュー・ワールド・オーダー〟＝新世界秩序〟が必要である」と述べたが、私は〝ニュー・ワールド・オーダー〟ではなくて、〝ニュー・ワールド・ディスオーダー〟、〝新無秩序の世界〟に入って来たと

思ふ。この中で日本はどうしなければいけないか。まだ日本は一人立ちできるやうな体質ではない。従って、どこと組むか、もう一回ここで確認する必要がある。私はアメリカと組まなければいけないと思ふ。なぜアメリカと組むか。なぜなら、アメリカが世界でいちばん強いからだ。経済が少しガタが来たけれども、軍事力、政治力はいちばん強い。いちばん強い国と組んでゐるのが、国の安全保障でいちばん重要だ、これだけの理由です。

社会党、共産党、公明党は「アメリカと組んでゐると戦争に巻き込まれる」と言ってゐるが冗談ではない。組んでゐないと逆に何に巻き込まれるかわからないからアメリカと組んでゐるのだと言ひたい。国の安全をどうすればいいかを考へる場合には、感情を一切取り去って冷酷非情に計算しなければいけないのです。そこで、日本がこの国際情勢の中で何をしなければいけないかを申し上げたい。

湾岸戦争について言っておかなければならないことがある。

第一に、あれはどことどこの戦争でしたか。去年の八月から十一月までの間に、十二本の国連決議が出てゐる。湾岸戦争を「所詮ブッシュ大統領とサダム・フセインのエゴイズムのぶつかりだ」と言った評論家もゐるが、彼らは国連決議はどういふ意味を持ってゐるのかといふ基本がわかってゐない。これはブッシュだけがやったのではない。最後の国連決議は、一月十五日を期して止むを得ず出してゐる。ソ連も賛成してゐる。この時、右も悪いが左も

悪いとアンパイヤ面宜しく、日本経済の血液である石油の七一パーセントが中東から来てゐるのに、これを一人の人間が持たうとしてゐる時に、これに対して「断固排除する」といふ気が起こらない。これは腰抜けか知識が全然ないかのどちらかです。国連決議の意味一つわからない。こんな学者・評論家がテレビで大きな顔をして国民が皆騙されてしまった。

第二に、何のための戦争でしたか。サダム・フセインは、「クウェートは歴史的にみて我が領土であった」と言って侵略して来た。林健太郎先生が書かれてゐる様に、歴史上、これほど明々白々に侵略を公言して突っ込んできた国はない。一回もクウェートがイラクの領土の一部であったことはない。これは中東を勉強した者なら誰でも知ってゐることです。これは明らかに侵略です。この侵略に対して、どうして日本は義憤を感じないのか。イラクはクウェートで五ケ月間やりたい放題のことをやって、何万人ものクウェート人が殺され、クウェートシティの中心で、女性といふ女性は暴行を受けた。生まれたばかりの三百人の赤ちゃんが薬と医療施設をイラクが持って行ってしまった為に腐って死んでしまった。これを日本は紙芝居でも見てゐる様に思って見てゐた。道義心も忘れた国民だと言ひたい。

第三に、日本の立場は何ですか。日本には国際的立場といふものがある。日本は国連加盟国です。日米関係は、日本外交の機軸ではなかったのか。アメリカ人は百何十人も死んでゐる。この時、日本はどうしたんですか。

アメリカのテレビには出征して行く兵士の姿が映し出された。黒人の恋人同士が、泣きながら語ってゐる。「あんたしっかりやってきてね。しかし、無事に帰ってきてよ。結婚式の準備は私がしておくから」。老婆の一人息子が出征して行く。「お前が死んだら大変だ。しかし、しっかりやっておいで」と泣き崩れてゐる。戦争は嫌だ、平和がいい、これは当たり前でせう。しかしそれは感情ではないですか。知識人だったらそこでカンマして、「ハウエバー＝しかしながら」と書いて今度は理性で考へなければいけない。日本人の多くは理性で考へずに「戦争は嫌だ、だからだめだ」とやった。アメリカ人は、やはりハウエバー以下を考へたのです。戦争は嫌だ、しかしながら、一人息子だけど、こんなことを許してゐたら仕方がないから出しませう、と。そして勝った。勝ったブッシュ大統領を国民の九一パーセントが支持した。やはり、日本に比べればアメリカの方が大国だと私は思ひます。日本は肝心な以上の三点を忘れてしまった。

最後に大変な皮肉を申し上げたい。私はナショナリストです。ナショナリストであるから「アメリカと手を切ってはいけない」と言ってゐる。にもかかはらず、政府を含めて日本人はアメリカの神経を逆撫ですることばかりやった。これは自民党もけしからん。自民党の足を引っ張ったのは社会党。野党全体が引っ張った。こんな日本、国際国家なんて言はない方がいいと思ふんです。日本人の今の常識はどうですか。アンマンに難民が出てきた時、これ

を救ふにはどうしたらいいかと議論した。日本人の常識＝コンセンサスでは、これに自衛隊を出すと海外派兵になる。これは自衛隊法違反、憲法違反、政府解釈違反である。だから、先づ民間機を出して、民間機で足らざる分は仕方がないから自衛隊機を使ふ。

今、日本に万が一のことがあったらどうしますか。すぐ側にフセイン大統領みたいのがゐて、核を持って何をするかわからない。今、アメリカの関心は専ら北朝鮮に向いてゐる。核を持たれたら何が起こるかわからないからです。南北朝鮮が統一するのは大いに結構だと思ふけれども、朝鮮半島は日本に怨念を抱いてゐる人達がたくさんゐる。韓国だけでも今、常備軍が百万人近くゐる。これは日本の自衛隊の四倍です。北朝鮮が核を持ったら韓国は必ず持つ。統一すれば、日本に反感を持った統一国家が出来る。かういふ状況で、万が一のことがあったらどうするんですか。今の日本の常識に従ふと、「待てよ、外国が攻めて来た場合に、自衛隊を当てると、専守防衛といふ大前提が崩れていく。これは憲法違反、自衛隊法違反で日本の防衛政策の根本に違反するから、仕様がないから民間人に銃と弾薬を与へて民間人を出せ。自衛隊は憲法違反にならない様に後方支援に当てろ」となる。さうすると戦争が嫌で堪らない日本の若者は世界で一番安全な機構、自衛隊に殺到するだらう。そしてその時初めて自衛隊は一番得意の絶頂時代を迎へるだらう。これが皮肉を込めた私の結論であります。

質疑応答

〈問〉日本はソ連に経済援助をすべきでせうか。

〈答〉今年のロンドンサミットで二つの極端な意見が出てきた。一つはソ連に大規模金融支援をしようではないかといふ意見で、統一ドイツが言ひ始め、フランスとイタリアが賛成した。これに対し、アメリカとイギリスが慎重論を唱へた。日本はこの立場に立った。つまりアングロサクソンプラス日本対欧州勢力といふ具合に西側の中で亀裂が生まれた。ドイツがソ連に対する経済援助に積極的なのは、ドイツがソ連に対しては加害者、つまり独ソ不可侵条約をヒットラーが踏みにじってモスクワに進撃したからです。これに対して日本はドイツの場合とは根本的に違って、日ソ不可侵条約を破ったのはソ連であるから、ソ連が加害者で日本は被害者である。

更にドイツの統一はゴルバチョフに力があった一瞬のチャンスを捉へて実現した訳ですから、ゴルバチョフに恩恵を受けたといふ意識が非常に強い。日本は、六十万の関東軍を中心とする日本人が、シベリア、モンゴル他まで引っ張っていかれ、一番長い人は十一年も抑留され、六万人が飢えと寒さで死んだ。しかも北方四島をゴルバチョフは歯舞、色丹すら返さ

うと言はなかった。この様に、ドイツと根本的に違ふ。

ドイツは統一と引換へに巨額なお金を貸してしまった。しかもドイツは現在東ドイツに多額の金を使って経済がをかしくなってゐる。アメリカもフランスもイギリスもイタリアもカナダも経済的に頼りにならない。日本が一番金を持ってゐる。ドイツは何とかして西側全体を、何よりも日本を引っ張り込みたい。ただし、日本はさういふ訳には行かない。日本とドイツには根本的な違ひがある。ドイツといふ国は、ソ連と接近した時に非常に危険な衝撃を世界に与へる。一九一七年にロシア革命が起こって、二〇年にソ連が単独講和を結んだのはドイツです。ベルサイユ体制下にあったドイツがそこからスッとくぐり抜けたのは二二年に独ソの秘密会議でラッパロ条約を結んだからです。そして三九年には独ソ不可

侵条約を結ぶ。この様にドイツとソ連の接近は非常に危険である。日本は冷静にならなければいけない。日本としては北方四島が帰って来るまではソ連に対する金融支援は一切してはいけない。

日本を除外した西側諸国は、アメリカを先頭にしてソ連の体質を改善しようと考へてゐる。今、ソ連は爪と牙は異常に大きいが、身体は骨と皮ばかりである。少し太らせてやるから爪と牙は切りなさいといふ訳で、軍需産業を民需に切替へ、政治体制を民主政治に移行させ、計画経済をやめさせ、市場経済に移行させる。かういふ体質改善をして、毒にも薬にもならない国にしてしまはうと考へてゐる。これを金融支援を梃子に誘導しようと考へてゐる訳です。

その状況の中で、今、日本が一番金を持ってゐるのであるから、日本が一言「ノー」と言へば、ゴルバチョフも西側も自分達は今金がない、「しまった、日本につむじを曲げられるとどうにもならんぞ」と気付くことになる。ただこれをやるだけの外交能力が現在の日本にあるかどうかは非常に疑問であると思ひます。

〈問〉今後の日本と北朝鮮との関係をどう考へたらよいでせうか。

〈答〉北朝鮮と日本との関係正常化の交渉が出てきたのは、韓国外交の輝かしい勝利です。これを始めたのは朴正熙大統領です。朴大統領の時、高麗大学のキム教授が大統領補佐官と

して、南北の交渉で北朝鮮を交渉の場に引っ張り出すためには、結局は北を経済力で圧倒的に引き離さなければならないといふ結論を出した。そしてそれが功を奏して現在一対六あるいは一対十といはれる位の物凄い差が南北についてしまった。これが第一。

第二は軍事力ですが、当初は北の方が少しは軍事的に優位だった。特に空軍力が強い。これをバランスさせる為に国連軍、米軍が韓国に駐留してゐた。これが経済の物凄い発展を背景にして去年辺りから韓国の軍事力が次第に北を追ひ抜くやうになって来た。

第三は、北方外交といふのを韓国が考へた。一九六〇年代後半に、西ドイツのブラントが政権を取った。ブラントは東ドイツとの関係を正常化する為には、東の頭越しに、ポーランド、チェコ、ハンガリー、ソ連と、次第に関係を結んで行くことが得策だと考へ、実際さうした。これには遂に東ドイツも悲鳴を上げざるを得ない。ブラントは東ドイツと国交を樹立した国とは国交を持たないといふハルシュタインといふ西ドイツの外務大臣が唱へた原則を破棄していったのです。これで遂に東ドイツと西ドイツとの関係正常化が出来た。これをブラント外交あるいは東方外交と言ふ。これに倣って韓国のキム氏は朴大統領と相談して北方外交をやり始めた。これに弾みがついたのがノ・テウ大統領が一番先に手がけたソウルオリンピクです。この時に共産主義国がたくさん来て、韓国外交は総力を上げてチャンスを作り、次々に国交正常化していったのです。遂に去年にはソ連との間で国交を正常化し、今、中国

との国交正常化を考へてゐる。

この様な状況の中で、北朝鮮の金日成は突破口を見つける以外になくなってしまった。日本及びアメリカと国交を正常化することです。しかしアメリカは手強い。アメリカは平壌北方六十キロのネーヘンにある原子炉と核燃料再処理工場を宇宙衛星で撮って、これをオープンにしなければ国交正常化の話は出来ないと言ってゐる。

一方日本は、自民党と社会党とが戦後のことまで謝ってきた。戦後何も悪いことをしてゐないのだから謝る必要がないのに謝ってきた。国交正常化の話が出来たのはいいけれども我々は厳密に条件を付けなければいけない。条件の第一は、我々のすぐ対岸に核武装国家を作らないことである。第二は、李恩恵問題。人攫ひをする様な国とどうして話し合ひをしなければいけないのか。先づ攫はれて行方不明になった人達の消息を明らかにすることが条件です。その上で国交正常化するならしたらよい。ただし、さういふ腹が今の政府・自民党にあるか否かは大変疑問に思ひます。

戦後思想からの覚醒を！

——より人間らしく生きるために——

神奈川県立湘南高校教諭
亜細亜大学非常勤講師
山内健生

ヤマユリ

はじめに――日の丸・君が代は軍国主義？
歴史の中の日の丸・君が代――「国旗国歌」略史――
日の丸・君が代反対論の本音
〈戦後思想〉とは何か
日本の無条件降伏？
言論の自由の保障？
天皇の人間宣言？
平和憲法の制定？
太平洋戦争の敗北？
人間らしく生きるために

はじめに――日の丸・君が代は軍国主義？

標題に掲げた「戦後思想からの覚醒を！」とは、現在の我国で疑ふまでもなく当り前のこととされてゐる「ある種の価値観歴史観」が実は事実から遊離したかなり歪なものであることに気づいて欲しい、目覚めてそこから脱却して欲しいといふことです。そして「より人間らしく生きる」とは、どのやうなことなのかを各々の胸に手を当てて考へて欲しいのです。

昨夏、平成二年のこの合宿教室（第三十五回、阿蘇）に参加した学生がその感想を記した中に「初めはなんだかアブナイなァと思いました。日の丸を掲げたり君が代を歌うことに対して、漠然と軍国主義を思いうかべていたからです」（参加者感想文集）とありました。今の我国の思想的風潮と考へ合せてみて、日の丸を正面に掲げた開会式で「二度も」君が代を斉唱したのですから、皆さんの中にも似たやうな感想を抱いた人がゐてもをかしくはないでせう。

例へば「日の丸・君が代と文部省」と題した朝日新聞の社説（平成二年七月十八日付）には「国旗・国歌は元来、その国民によって敬愛されるべきものだ。だが、戦前の国家体制や戦争の記憶もからんで、日の丸や君が代に対する思いは、人さまざまだと思う」「学校教育で教える内容は、基本的に、父母のだれもが納得できることがらであるべきではないか」とあり

ました。要するに朝日は新学習指導要領で平成二年度から入学式や卒業式などでは「国旗を掲揚するとともに、国歌を斉唱するよう指導するものとする」としたことに反対してゐるのです。その理由として「戦前の国家体制や戦争の記憶」をあげてゐます。先の大学生の感想文の一節は、知らず知らずのうちに、かうしたマス・メディアの報道に影響されたものといへます。それでゐて「軍国主義」について、「戦前の国家体制」について、深く考へようとしてゐるかといふとさうでもない。まさに「漠然と」忌避すべきが当然と決めつけてゐる感じです。

おそらく戦時中は「日の丸」も「君が代」も大いに使用されたことでせう。対外的意識から生れたのが国旗・国歌ですから。昭和十九年十一月生れの私には、戦争と日の丸・君が代が結びつくといふのは、映画や小説の中でのことで、直接的体験としてはありません。しかし、つい最近の湾岸戦争に出征する兵士を送るアメリカ国内の緊迫した様子をテレビで見ますと、かつて我国でも同様な光景が展開されたんだらうなあと容易に察せられました。日の丸や君が代だけではありません。我国が参戦したのですから、人も物も多く深く戦争にかかはったはずです。

私の従兄は戦死してゐます。伯父は著述業でしたので海軍の報道班員として協力しました。その他にも身内から何人もが出征してゐます。今でこそ「平和の擁護者」「戦争の告発者」の

やうな顔をしてゐる朝日新聞など最も深く戦争に関与した報道機関のひとつです。現在、「日の丸・君が代と文部省」と題して自主的な姿勢で文部省を批判してゐる朝日は、それと同じく自らの判断で、かつて戦争を報道し戦意の昂揚を大いに説いたのです。やむなく書かされたなどといふレベルのことではありません。大学図書館には古い新聞の合本があるはずですから、一度、目を通してみて下さい。ご納得いただけると思ひます。

「戦争に関係したものは全ていけないことなんだ。私はそれとは無関係なんだ」といへば通りがいいやうになってゐますが、かうした風潮こそ、これから採り上げようとする〈戦後思想〉の反映に他なりません。

歴史の中の日の丸・君が代―「国旗国歌」略史―

まづ「日の丸」と「君が代」について少しお話をします。国旗・国歌は幕末から明治への開国期に諸外国との交流交際の中から生れてきました。しかし、その源は古く、どちらも今から千年以上も遡ります。

すでに七世紀初め、推古天皇の御代で聖徳太子の時代ですが、我国を「日出づる処」（遣隋使が携行した国書の一節）と自己認識してゐました。その百年後の文武天皇大宝元年（七〇一）の朝賀の儀式では「日像」を描いた幟が建てられました。武家時代に入ってからも「日の丸」はいろんな場面に登場します。源平合戦、屋島の戦ひの折、那須与一宗高が射た的は平家方女性の掲げた「皆紅に日出だしたる扇」でした。上杉謙信らの戦国大名の旗指物にも日の丸が描かれてゐます。「長篠の戦合戦図屏風」には織田・徳川軍と武田軍の双方に日の丸の旗指物が描き込まれてゐます。江戸初期の朱印船も日章旗を掲げました。相撲の軍配などにも描かれます。そして幕末に至って、薩摩藩主島津斉彬らの建白によって「日本総船印者、白地日之丸幟」と定められた（安政元年一八五四）ことが国旗としての直接的な第一歩でした。その後「一般御国標」（文久三年一八六三）となり、明治三年の太政官布告によって、現在の日の

丸の体裁になりました。

「日の丸」が太陽を意味してゐることはいふまでもありません。万物を等しく育む太陽の光こそは心豊かに共存共栄していく原点であり、私共の祖先が信仰の対象として拝礼してきたものです。皇祖神・天照大御神は太陽をシンボライズした日の神です。また赤い色は「まごころ」を表し、誠意・進取・勇気を意味し、丸い形は円満な心と国民の団結を示すといはれます。そして、白い色は清浄と純潔を尊ぶわが国民性を表象してゐるといはれます。

「君が代」の源流は『古今和歌集』（延喜五年九〇五）の「わがきみは　ちよにやちよに　さざれ石の　いはほとなりて　こけのむすまで」といふ歌（題しらず　読人しらず）であり、長和二年（一〇一三）の成立とされる『和漢朗詠集』（「祝」の部）には「君が代は……」と今日と全く同一の歌詞が収められてゐます。ただ古い歌といふだけでなく、日の丸と同様にそれぞれの時代に賀歌として広く歌はれてきました。神事・仏事や宴席においても愛誦され、江戸時代に入ると物語・謡曲・浄瑠璃の脚本・浮世草子などにも出てきますし、盆踊り歌にも採り入れられました。

むろん、それぞれ独特の曲律で歌はれてきたのですが、レドレミソミレ……の現在の旋律は明治十三年、宮内省伶人の林広守が雅楽の曲節に基づいて作曲したもので、それを後に海軍軍楽隊の育て親となったドイツ人音楽家フランツ・エッケルトが五線譜に写しとったもの

です。

国歌としての「君が代」の意味は次のやうになると思ひます。

古来から、天皇陛下を統合の中心に仰いできた我国が、小さな石や粘土などが堆積し永い歳月の間に凝結して礫岩となり、さらに時間の経過とともにその上を苔が美しく覆ふやうになるまで、いついつまでも千年も万年も永く久しく栄えますやうに。

「天皇陛下を統合の中心に仰ぐ我国」などといふと、それは明治以降の百二十年余のことだと言はれさうですが、決してそのやうに新しいことではなく、政治的実権の有無に拘らず、それこそ有史以来、一貫する我国の基本的スタイルです。律令以前も、律令時代も、そして武家政権の時代においても同様でした。武門の棟梁は朝廷から征夷大将軍に任ぜられました。豊臣秀吉が関白太政大臣として政務を摂ったことはご存知でせう。また浅野「内匠頭（たくみのかみ）」長矩、吉良「上野介（かうづけのすけ）」義央、井伊「掃頭守（かもんのかみ）」直弼などの官職名は、間に幕府が介在するとはいへ、もともとは全て朝廷における官職です。その官職名を冠することに武家は誉れを覚えたのです。

北畠親房に『職原抄』といふ官職の沿革・補任の次第・職掌などについて記した書（興国四年一三四〇）があります。この書物は武家政権が完全に全国に行きわたった江戸時代において

も多く研究され沢山の注釈書が出されてゐます。幕藩体制下といへども、大義名分（我国の基本的あり方）を明らかにすることへの関心が相当のものであったことを物語ってゐます。

ですから「古来から、天皇陛下を統合の中心に仰いできた我国」といふ言ひ方は、誇張でも何んでもなく、事実を辿っていけば自然と浮かびあがってくる歴史の姿です。これこそが我国のconstitution（国憲・憲法・国体）——国の個性・国柄——です。先に引用した朝日新聞の社説は「戦前の国家体制」を頭から悪しきものとしてゐましたが、大日本帝国憲法も日本国憲法も「第一章　天皇」で始ってゐる点で、constitutionが反映してゐるのです。

従って、あまり威丈高になって日の丸・君が代を論ずる必要もありませんし、「アブナイなァ」などと警戒する必要などサラサラありません。私共の祖先達が永い永い歳月の間、大切にしてきたことですから、後世の我々は懐しむやうな敬ひの気持ちで受けとめればいいのです。さうすることが伝統に対する後世の我々として自然な態度だと思ひます。

日の丸・君が代反対論の本音

要するに「日の丸」「君が代」は戦争の旗でも歌でもありません。遥か昔から、いろんな場面で用ひられてきた「隆盛祈念の形象」であり「祝賀祝福の詞」なのです。それが国際交流

が本格化する中で、対外的意識と自国意識が高まって「国旗」「国歌」となって行ったのです。

「日の丸・君が代は平和日本のシンボル」などと、ことさらに「平和」と結びつけて擁護しようとする人がゐます。その善意はわかるとしても、そんなに「平和」にこだはる必要はありません。我国の歴史の中から生れてきた国旗・国歌ですから、平和時代には「平和日本の象徴」に、非常時には「非常時日本の象徴」になります。だからこそ、国旗であり国歌なのです。もっともイギリスで出版されてゐる「世界の国歌」に関する書物では「君が代」をpeaceful reign（平和の御代・穏かな治世）と訳してゐるさうです。

ですから、我国が戦争に敗れて戦勝国アメリカの占領下におかれた（独立主権を喪失した）時期は、掲揚することも斉唱することも禁止されました（部分的には「許可」されましたが）。独立の回復にともなって「日の丸」「君が代」は甦りました。それだけのことです。スターリンとヒトラーの密約以来、五十年間、ソ連共産党政権下におかれたバルト三国に、独立の回復とともに、それぞれの国旗が蘇生したのと全く同じことです。

ただ左翼革命の妄念にとりつかれた日教組を初めとする伝統否定勢力が陰に陽に妨害工作をしてきたことは事実です。それに塩を送ってゐるのが例へば先に見た朝日の社説です。「国旗・国歌は大切であるが、日の丸・君が代は戦争の記憶と重なる」。日の丸と君が代を否定しようとする彼らの本音は国柄の否定（精神的伝統の破壊）にあるのですが、それをストレート

には出さずに「戦前と戦後は違ふ」「戦争にかかはったものは忌避すべきだ」といふ〈戦後思想〉に巧みにとり入って、ことさら「戦争の記憶」と関連づけようとしてゐるのです。しかし、あらゆるものが戦争に関与したはずなのに、「日の丸」「君が代」だけが戦争と関連づけられて論じられるといふのはまことに胡散臭いことです。戦争といふと直ちにマイナス・イメージを浮かべるのは〈戦後思想〉なのですが、その意味で「平和日本のシンボル」として、日の丸・君が代の大切さを説くのも、戦争に関係したものは悪だといふ〈戦後思想〉の延長上にある考へ方といへると思ひます。

イギリス国歌は「気高き女王を　永遠に守らせ給へ」とゴッドに祈念し、韓国国歌（愛国歌）は「東海（日本海）の水が乾き尽きるまで」神は永遠に韓民族をお守り下さるとしてゐます。フランス国歌は「立て　国民　いざ　鉾とれ　進め　進め　仇なす敵を葬らん」と勇猛なる内容です。それぞれの国の歴史に根ざしたところに国旗と国歌があります。我国の歴史に深くつらなる日の丸と君が代を大切にしたいものです。

〈戦後思想〉とは何か

さて、本題に入りますが、「戦争を忌避する」といふ一見、尤もらしい〈戦後思想〉ですが、

そこには根深く深刻な問題が孕まれてゐるやうに思はれてなりません。〈戦後思想〉を私なりに定義してみました。

> 戦後思想とは「わが国民の無類の拝外的な対外的無警戒と、敗戦後とくに顕著になった外国（戦勝国）からの影響（情報操作）とが、相乗積となってわが国民の頭と心を蝕んでゐる刹那的唯物的な物の見方や感じ方」のことである。それは忘恩的であり動物的でもある。

まづ「拝外的」といふところに注意して下さい。外から来たものにすぐ飛びつくといふことです。歴史を回顧した時に「儒教」「仏教」「漢字」「律令」などの大陸文化を自らの身の長に合ふやうにアレンジして来ましたから、それほど心配することはないかも知れません。また今日の活発なる経済的諸活動を内から支へてゐるのも「拝外的」な技術習得意欲とその応用能力にあるともいへるのです。片仮名文字の氾濫も旺盛な文化摂取能力の現れでもあるのですから、「拝外的な対外的無警戒」は一概に否定すべきものではありません。

しかし、厳粛であるべき結婚式を「一生に一度のことだから〝アーメン〟式でやってみたい」などとキリスト教会式に憧れるやうではやはり困ります（実はキリスト教といふ一神教的排他的宗教による儀式を信仰とは無関係にファッションにしてしまふところに野放図ともいふべきたく

ましい日本人の文化的食欲があるともいへるのですが）。「JR線」などといふ略称も、国語の破壊といふべきでせう。「拝外的」といふことは「お人好し」「だまされやすい」といふことですから、やはり反省すべき点も多々あるわけです。かうした「対外的無警戒」と意図的人為的な「戦勝国からの情報操作」とが掛け算的に影響し合って（相乗積となって）、自分自身の物の見方や感じ方に一定の枠をはめてゐるといふことです。

経済大国などと内外で言はれて久しくなりますが、その言葉とは裏腹に、年々、国際社会に伍していく我国の精神的パワーは衰へていってゐるやうに思はれてなりません。「日の丸・君が代は戦争につながる」などといふ意見を聞かされると「本当に徹底的に我国は物理戦だけでなく情報戦にも敗れてしまったのだ」との思ひにかられ、敗戦の傷跡がいよいよ大きく口を開けてゐるやうに思はれてならない時があります。敗戦の結果、日本人の眼と心で事実を正しく見据ゑることができなくなってゐるといふことです。

〈戦後思想〉を形づくってゐる基本的用語のいくつかを具体的に挙げてみます。

①「太平洋戦争の敗北」
②「日本の無条件降伏」
③「言論の自由の保障」

④「天皇の人間宣言」
⑤「平和憲法の制定」

例へば右の五項目は、およそ今日の我国の政治・文化・教育・思想・世相等について語る際に欠くことのできないものとなってゐます。皆さんが（私も同じですが）これまで教はってきた内容や日常的に接するマスコミからの情報を思ひ浮かべてみて下さい。①の「太平洋戦争の敗北」が②③④⑤をもたらしたわけですが、それらを疑問の余地のないこととして金科玉条視するのが〈戦後思想〉です。皆さんにこの問題を考へてみろ！といふのは、譬へは乱暴ですが、金魚鉢の金魚に溜水でいいのかと問ひかけるやうなもので、少々残酷なことですが是非とも「金魚鉢」の外に自由なる広やかな世界があるといふことに気づいていただきたいのです。それでは実態はどうだったのでせうか。①については最後に述べるとして、②③④⑤のそれぞれについて要点のみをお話いたします。

日本の無条件降伏？

日常の会話の中で「日本は無条件降伏をしたのだから」云々と話されるのを耳にすることがあると思ひます。新聞や書籍では「日本、無条件降伏」の文字を見い出すのにさほどの苦労はいりません。我国は昭和二十年八月十四日「ポツダム宣言」の受諾を決定して、連合国

言論の自由の保障？

に降伏しました。ポツダム宣言は我国に対する「戦争終結の機会を与へる」ための米英中三ケ国の宣言です。そこには「五、吾等の条件は左の如し」と明記してあります。そして「軍国主義勢力の除去・戦争遂行能力の破砕に必要な諸地点の占領・領土の制限・軍隊の平和的生産的方面への復帰・民主主義的傾向の復活強化・軍事産業の禁止・将来における占領軍の撤収」の七項目の条件が掲げられ、最後に「十三、吾等は、日本国政府が直ちに全日本国軍隊の無条件降伏を宣言」「せんことを同政府に要求す」とあります。無条件の降伏といっても「国家」と「軍隊」とでは質的に異ります。

翌九月二日、東京湾上に浮かぶ米戦艦ミズリー号で調印された降伏文書にも「一切の日本国軍隊及日本国の支配下に在る一切の軍隊の連合国に対する無条件降伏」云々の文言が盛られ、ポツダム宣言の条項を誠実に履行する旨が約されてゐます。ところが、九月六日「連合国と日本との関係は契約的基礎の上にあるのではなく日本は連合国に対して無条件降伏を行ったのである」「マックァーサー元帥の権威の範囲に対する日本人の質問を許してはならない」とのトールマン大統領の通達が占領行政のキャップであった連合国軍最高司令官マッカーサー宛になされるのです。しかしながらこの通達が報道されるのは九月二十六日（二十四日、ホワイト・ハウス新聞発表）でした。なぜ二十日間も公表が遅れたのでせうか。

降伏したとはいへ、当時、政府も新聞も、少しでも自国に有利に事態を展開させるにはど

うしたらいいかといふ点で共通認識に立ってゐました。ポツダム宣言の範囲内であっても、占領軍と「交渉」し「折衝」するといふ姿勢でした。これは占領軍側としては都合が悪かった。そこで九月六日付の通達となったのですが、これはポツダム宣言からの逸脱は明らかです。直ちに公表したのでは、政府からも「自由な新聞」からも論難されることは目に見えてゐました。

同盟通信社　九月十四日午後五時、一切の業務停止を命じられる。九月十五日正午より事前検閲を受けて業務を再開。

朝日新聞　九月十八日午後四時から二十日午後四時までの四十八時間の発行停止を命じられる。

ニッポンタイムス（英字紙）　九月十九日、二十四時間の発行停止を命じられる。

朝日新聞
毎日新聞
読売報知
日本産業経済
東京新聞
十月八日から事前検閲が実施される。

九月十八日、占領軍当局は「日本に与へる新聞紙法」を発表しました。これは「一、報道は厳格なる真実を守らざるべからず」から始まる十箇条の「……するべからず」から成立ってゐました。何を以って真実とするかは占領軍側の胸の内にあったことは、十月八日から各紙を検閲下においたことでも明らかです。占領軍の言論に対する姿勢は「発行停止処分」の段階で十分に浸透したと見ていいでせう。

即ち、発行停止処分後の九月二十六日付の紙面には、「連合国と日本との関係は契約的基礎の上にあるのではなく日本は連合国に対して無条件降伏を行ったのである」との二十日前の通達は掲載されても、ポツダム宣言違反を指摘した文字はなかったのです。批判し得る新聞が存在しなかったのです。占領軍による検閲は、かつての出版法・新聞紙法などに基づく内務省のやり方と違って、伏字や削除の痕跡を残させない「より巧妙」なものでした（江藤淳著

『忘れたことと忘れさせられたこと』文芸春秋刊を参照。）

従って、現在も「ついにドイツの敗北後の七月、アメリカ・イギリス・中国は、三国共同でポツダム宣言を発表し（略）無条件降伏を求めた」「八月十四日、日本はついに無条件降伏をした」などと記した教科書（『高校日本史』実教出版刊、三二〇頁）が発行されてゐるのです。またノンフィクション作品の中にも次のやうな一節が書き込まれるのです。

この二十三日（注・昭和二十年十月）、日本の新聞界には歴史始まって以来の異変が起きていた。

朝日新聞と読売新聞が「新聞の民主化」を目指して、「社員大会」を開いたのである。

ずっと、日本の軍部に押えつけられていた日本のマスコミにとって、これは日本の歴史始まって以来の事件、といってもよかった。「真の言論の自由」というものをかつて一度も持ったことのなかった日本の新聞界にとって、これがどのぐらいモニュメンタルな出来事であったかは、現在の感覚では恐らく説明できないだろう。

（鈴木明著『日本プロ野球復活の日』一五九頁、集英社文庫）

さっと読み飛ばしてしまひさうですが、昭和二十年十月といへば、朝日も読売も占領軍の検閲体制下に入った時期でした。

天皇の人間宣言？

敗戦から四ケ月余り、初めて迎へた元旦に昭和天皇が発せられた「新日本建設に関する詔書」のことが、どういふわけか「人間宣言」といはれてゐます。昭和天皇の崩御を伝へる朝日新聞の記事にも「現人神から人間天皇へ」の小見出しで「二十一年元旦の詔書で『天皇は現人神などではない』とみずから〝人間宣言〟をされ……」（昭和六十四年一月七日付夕刊）とありました。しかし、「現人神」といふ語は詔書には出て来ませんから、ずいぶんと粗雑な書き方です。次の箇所をさして〝人間宣言〟と呼んでゐるのです。

朕ト爾等国民トノ間ノ紐帯ハ、終始相互ノ信頼ト敬愛トニ依テ結バレ、単ナル神話ト伝説トニ依テ生ゼルモノニ非ズ。天皇ヲ以テ現御神トシ、且日本国民ヲ以テ他ノ民族ニ優越セル民族ニシテ、延テ世界ヲ支配スベキ運命ヲ有ストノ架空ナル観念ニ基クモノニ非ズ。

朝日の例のやうに今日では多く混同されてゐますが、「現人神（あらひとがみ）」と「現御神（あきつみかみ）」とは違ひます。富山女子短期大学の廣瀬誠先生が指摘されるやうに「時として現身で出現する畏怖すべき神が現人神」であって、「いつも人間の姿をされ、人間として生活されてゐる天皇を現人神と申し上げるのは誤用であらう」。現御神は「国家の大事を宣言する詔勅の冒頭に置き、統治者の

資格・総攬者の権威を示す」時に使はれる尊称で、天皇以外には転用されることのなかった語です（廣瀬誠著『萬葉集――その漲るいのち――』一八四頁、国文研叢書）。

要するに日本国民のセルフ・イメージを傷つけたかったといふ占領軍側の意図がまづありました。そのために教育勅語に代る詔書は出せないものか。その意向は占領地住民の「啓蒙工作」を主要任務とする民間情報教育局（CIE）によって具体化が図られ、CIE教育課長H・D・ヘンダーソンから知人の学習院英語教師H・H・ブライスを通して学習院の山梨勝之進院長に伝へられ、さらに政府へと伝はっていきます。わが政府はこの機会に「天皇を神聖視する国民意識」に対する国際世論からの風当りを和げることができるならばと考へたやうです。

まことに異例中の異例ですが、詔書の草案が英文で起草され、その後において「致命的な決定的な誤訳」をしてしまひます。

They are not predicated on the false conception that the Emperor is divine, and that……

とあった所を「(朕ト爾等国民トノ紐帯ハ)天皇ヲ以テ現御神トシ、且…トノ架空ナル観念ニ基クモノニ非ズ」と翻訳してしまったのです。divineは「ゴッドの属性を有する」といふことですから、キリスト教的信仰における神（ゴッド）ではないとすべきだったのです。「天皇を以てゴッド

的な神・超自然的な神とするのは架空なる観念である」とすべきだったのです。なまじひ「現御神」といふ伝統的な言葉を充てたことで新たな混乱の種をまいてしまひました。

自然と人間と神々が隔絶することなく連続してゐるところに、我国の伝統的神観念の特色が見られます。さうした神観念を前提にして現御神といふ尊称が生れてきたのです。英文草案からもっとストレートに訳すべきだったといふよりも、当時の政府担当者が「創造主」（唯一絶対・全知全能のゴッド）と「八百万の神々」との違ひついて配慮をするだけの見識を兼そなへてゐたならばと悔やまれてなりません。まことに皮肉なことですが、英文草案の方が「正しい」といふことになってしまひました。

神とゴッドの混同混用は、明治初年にバイブルを和訳する際に「唯一絶対のゴッド」を不用意にも「神」としたことから発しました。その結果、在来の神々とゴッドが混同され、現在も、伝統的神観念は深大な混乱の渦中に放置されたままです。

かうしたことを何ら意に介せず「神天皇から人間天皇へ」などといふ情報が垂れ流しにされてゐるのが現状です。

いまひとつ「新日本建設に関する詔書」で見落してはならない点は、冒頭に五ケ条の御誓文を引用してゐることです。

茲ニ新年ヲ迎フ。顧ミレバ、明治天皇明治ノ初、国是トシテ五箇条ノ御誓文ヲ下シ給ヘリ。曰ク

一、広ク会議ヲ興シ万機公論ニ決スベシ。

一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ経綸ヲ行フベシ。

一、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス。

一、智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スベシ。

叡旨公明正大、又何ヲカ加ヘン。朕ハ茲ニ誓ヲ新ニシテ国運ヲ開カント欲ス。

「叡旨」とはここでは明治天皇のお考へです。そして「公明正大、又何ヲカ加ヘン」とはまことに明快です。

ここに御誓文が入れられたのは昭和天皇の御指示からでした。後に（昭和五十二年八月二十三日）、宮内庁記者団から「詔書のはじめに五箇条ノ御誓文を入れられたのは陛下御自身のご希望でせうか」と問はれて、次のやうにお答へになってゐます。

それが実は、あの詔書の一番の目的であって、神格とかさういふことは二の（次の）問題でした。当時はアメリカその他諸外国の勢力が強く、日本が圧倒される心配があったので、民主主義を採用されたのは明治天皇であって、日本の民主主義は決して輸入のものではな

いといふことを示す必要があった。日本の国民が誇りを忘れては非常に具合が悪いと思って、誇りを忘れさせないためにあの宣言を考へたのです。

詔書をお出しになった陛下自らが「二の次の問題」とされてゐるのに、国民の方はそちらに力点をおいて、それも粗雑な理解認識のまま「神から人間へ」「神格否定の宣言」としてゐるのはずいぶんとをかしなことだと思ひませんか。（大原康男著『天皇―その論の変遷と皇室制度』展転社刊を参照）

平和憲法の制定？

占領下の昭和二十一年十一月三日に公布された日本国憲法（翌年五月三日施行）について、小学校でも中学校でも高校でも、三つの特色があると何度も教へてゐます。私もさう教はりました。「国民主権・平和主義・基本的人権の尊重」の三つです。果してこれで憲法を学んだことになるのでせうか。日本国憲法の特色の第一は何といっても、主権喪失の占領下に、占領軍当局によって原案が作成され（一人の日本人も参画してゐない）、帝国憲法の改正といふ形式を履んで制定されたといふことです。ポツダム宣言の受諾がどうして「憲法の改正」にまでつながったのか私にはまだ十分には理解ができません。「無条件降伏だ」とした占領軍の高圧的姿勢によるとしか考へられません。やはり物理的に敗れるといふことは大変なことだったのです。その時は臥薪嘗胆で捲土重来を期して耐へるしか他に術がなかったとしても、情

報戦（精神的）にまで敗北したとしたら立直りの契機をつかむことはできないでせう。

降伏文書への調印が行はれたミズリー号は二つの星条旗で飾られてゐました。ポールに翻へる星条旗は真珠湾への攻撃を受けた日に連邦議会に掲げられてゐたもの、もうひとつの艦尾の砲台の上に広げられた黄ばんだ星の数が三十一の星条旗は、一八五四年（安政元年）、和親条約を結ばせて下田・箱館を開港させたペリー提督の率ゐる東インド艦隊に掲げられてゐた国旗だったのです。九十年近い歳月をかけて、やうやくてこずらせた日本を意のままにできる……。

いまも覚えてゐますが、子供心に「勝った国は新式の兵器で装備してどんどん強くなっていくのに、なぜ敗けた方は軍備を持ってはいけないんだ。ますます差が開くだけだ。どうしてこの憲法が素晴らしいのだらう」と思ったものです。「全日本国軍隊の無条件降伏」によって「完全に武装解除せられたる」状態を将来的に維持しようとするところに「第九条」は位置づけられます。

第一次大戦で敗北したドイツは「陸軍十万人・海軍三十六隻」といふ枠を講和条約によって「外から」はめられました。我国は「日本国民の意思」を僭称し得た占領軍当局が「陸軍ゼロ・海軍ゼロ・空軍ゼロ」といふ枠を、あたかも「内から」のものであるかの如く偽装して憲法に書き込んだのです。それも帝国憲法の改正といふ擬制をとりながら。日本国憲法第

九条第二項「陸海空その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」との文言は、主権を喪失してゐた我国の全く手の及ばぬところで練られたものなのです。

これを称して「平和憲法」と呼ぶのです。軍備を放棄した憲法だから「平和憲法」。何とも単純な発想です。いまやマス・コミだけでなく自民党から共産党まで〝平和憲法〟のオン・パレードです。防衛庁長官も「平和憲法があるから軍事大国化することはありません」などと演説してゐます。

アメリカからみて、こんなにお人好しで御しやすい国はないでせう。しかし、同盟国として協力していく相手としては頼りなく思ってゐることでせう。

太平洋戦争の敗北？

これまでみてきた「日本の無条件降伏？」「言論の自由の保障？」「天皇の人間宣言？」「平和憲法の制定？」の大前提たる「太平洋戦争の敗北」についてお話をします。全ての根はここにあるといってもいいのです。

「今次の対米英戦は、支那事変をも含め大東亜戦争と呼称す」（昭和十六年十二月十二日、内閣情報局の発表）——「支那事変をも含め」とは、昭和十二年七月七日の事変勃発まで遡るといふことではなく、昭和十六年十二月八日からは支那事変区域も大東亜戦争に含むといふことです（『波涛』第七十号）——といふのが我国政府の立場でした。アメリカは対日戦を「太平

洋戦争」、対ドイツ戦を「ヨーロッパ戦争」と呼んでゐました。大東亜戦争と聞いて、ああ太平洋戦争のことを言ってゐるんだとすぐおわかりになることでせう。それにしても年齢に似合はず古めかしい言ひ方をするものだと思はれるかも知れません。同じ時代を回顧する時に、自国の用語よりも、旧敵国の言葉の方に親近感を覚えるとすればやはり問題です。そのやうに感じられるといふことは戦勝国の情報操作としては成功したことになります。即ち、「大東亜戦争」は敗戦後、使用を禁止された言葉だったのです。

昭和二十年十二月十五日付の占領軍当局から政府への覚書には「公文書ニ於テ『大東亜戦争』」なる用語は「之ヲ使用スルコトヲ禁止スル、而シテカカル用語ノ即刻停止ヲ命令スル」とありました。報道機関さへ検閲体制下におかれた当時ですから、公文書に限らず、民間の出版物においても「大東亜戦争」が削られ「太平洋戦争」へと置きかへられたとしても驚くにあたりません。教科書は文部省検定をうける「公文書」ですから「太平洋戦争」となったことは言ふまでもありません。

この頃、「太平洋戦争史――真実なき軍国日本の崩壊――連合軍司令部提供」といふ見出しの記事が主要紙（朝日にも）を飾ってゐました（昭和二十年十二月八日から十七日までの連載）。これが我国のマス・コミに「太平洋戦争」が登場した最初です。次がその書き出しです。

……今や日本国民が今次戦争の完全なる歴史を知ることは、絶対に必要である。日本

国民はこれによって如何にして敗れたか、又何故に軍国主義によってかかる悲惨な目に遭はねばならぬかを理解することが出来よう。これによってのみ日本国民は軍国主義的行為に反抗し国際平和社会の一員としての国家を再建する為の知識と気力とを持ち得るのである。かかる観点から米軍司令部は日本及び日本国民を今日の運命に導いた事件を取扱った特別記事を掲載するものである。

これを読むと、「日本は敗れるべくして敗れたのだ」といった感じです。この連載記事の開始された「十二月八日」は、開戦以来、各紙が「初心を忘れるな」との戦意の昂揚記事を掲げてゐた日だったのです。ここからも占領軍当局の日本国民のセルフ・イメージを変へようとする強い意図が読みとれるではありませんか。

大東亜戦争と太平洋戦争。どちらでもいいではないかと思はれるかも知れませんが、言葉には文脈がありますから、そこには本質的な差異があるのです。

「太平洋戦争」における我国の役廻りは打倒されるべき敵です。「打倒日本」が太平洋戦争の目的でした。その日本が敗北に追ひ込まれたことは「いいこと」だったんです。日本が敗れたことは歓迎すべきことであり、その後の改革は当然に「過去との断続」となります。そして日本が武装解除され、それが将来的に続くことは「いいこと」なのです。

ところが「大東亜戦争」の文脈の中では、祖国日本の勝利は当然のことであって、それが

こと志と違って敗れてしまったことは「口惜しく無念なこと」です。敗れたら復興しなければならない。その後の復興は「同胞の苦労を思ひ無念の懐ひを承け継いで立ち上がらう」といふことになるでせう。戦歿者への慰霊もここから生れて参ります。志操の継承です。

太平洋戦争の文脈でいきますと「敗けてよかった戦争で亡くなった人をどうして追悼しなければならないのか」となります。せいぜい「戦争犠牲者」として、航空機事故の死者と同様に涙を誘ふにとどまります。そして敗れるべくして敗れた「敗けてよかった不義の戦ひ」をした者の子孫が私共ですから、「自分は一体、何者だらう」と真面目な人ほど自己不信に陥ることになります。太平洋戦争といふ言葉で大東亜戦争の時代を語るといふことは、敵側の立場から父や祖父の時代を顧みることに他ならないのです。自己不信は父や祖父の時代への不信、即ち「祖国への不信」でもあります。ここから日本国民としての矜恃や主体性が生れてくるはずもありません。日本人は自画像を描けないのです。

「大東亜戦争の敗北」を「太平洋戦争の敗北」として語ってゐる間は、自国の敗北をストレートに受けとめることはできないでせう。自国の敗北を率直に残念なことと感じられないうちは主体性の確立は覚束ないことです。

『太平洋戦争史』
—真実なき軍国日本の崩壊—
—何故、かかる悲惨な目に遭はねばならないのか—

『大東亜戦争史』
—口惜しき祖国の敗北—
—足らざるを補ひ復興に邁進しよう—

太平洋戦争と大東亜戦争とでは、日本人にとって、右の如くに違ってくるのです。しかしながら、今日、マス・コミで大東亜戦争にお目にかかることは万分の一の確率しかありませんし、教科書も申し訳程度に太平洋戦争に語注をつけて「当時、敗戦に至るまで『大東亜戦争』の名称が使われた」などとしてゐます。間違っても閣僚が大東亜戦争を口にすることはありません。占領時代の言論統制が今も生き続けてゐるのです。戦勝国アメリカの情報戦の罠にまんまと引っかかったままなのです。どこまで人が好いのでせうか。

人間らしく生きるために

先頃、少し話題になったミシガン大学社会調査研究所を中心に行はれた「世界価値観調査」によりますと、日本の若者が他の国々の青年に比して際立ってゐました。「日本人であること

に誇りを感じますか」（「はい」六三％）。同趣旨の質問に対して、アメリカ人は九六％・韓国人は八〇％が「はい」。「二度と戦争はあってほしくないが、もし仮にそういう事態になったら、あなたは進んで国のために戦いますか」に対して「はい」は日本人一〇％・韓国人八五％・アメリカ人七〇％（読売新聞、平成三年六月十五日付）。

ここに我国の青年達の自国に対する不信が如実に表はれてゐると思ひます。やはり「大東亜戦争」と「太平洋戦争」とは単なる言葉の置き換へではなかったのです。父や祖父の時代の苦渋に満ちた歩みを旧敵側の文脈（価値観）で振り返ってゐるやうでは、そこでの日本人はまるで馬鹿げた行為の連続となるでせう。敗けるために戦ってゐるのですから。嘲りの対象ですらあります。

父や祖父の時代の者と後の世代の者との間に共感共鳴する国民的な精神的基盤がないとするならば、あとはその日暮しになるしかありません。「太平洋戦争の敗北」後の改革が伝統的価値観を否定することになったのも理の当然です。自ら進んで過去との断絶を宜しとするやうになったのです。かうして「戦前と戦後は違ふ」「戦争には私は無関係だ」「戦争に関与したものは忌避しなければならない」等の〈戦後思想〉が形づくられていったのです。

とにかく過去との断絶が〈戦後思想〉の核心ですから、古いものは新しいものが如何に素晴らしいものかを証明するための引立て役でしかなくなってしまひました。例へば帝国憲法

は日本国憲法の素晴しさを証拠づけるための悪しき証文として扱はれました。「平和の現在」（自分）を正当化するためにのみ、「悪しき戦争の時代」（祖父・父）は回顧され指弾されてゐるのも同じことです。「戦争を告発する平和屋」は決して自分のこととして戦争を考へ「反省」してゐるわけではありません。今日の自分のアリバイ証明のために、「自分の手は汚れてゐない」と言ふために、祖父を父を貶しめてゐるのです。さうすることが自らを穢してゐることに気づきもせずに。

しかし、精神的に自覚的に過去とつながり得るのは人間だけです。過去をふまへ未来を見据ゑて今日に生きるのが人間でせう。その先人の「志操の継承」といふ最も人間らしいことを等閑視してしまったら、その日暮しの、その時々の自分にとって都合のいい生き方をすることになってしまひます。

万一の時、進んで自国のために戦ひますか、「ノー」。〈戦後思想〉が「刹那的唯物的で、忘恩的であり動物的である」といふのは、かういふことなのです。そして、世界各国国民は（そこでの学校教育は）、この対極にあるといふことを十分に弁へるべきでせう。自らの主体性を保持するべく努める者のみが他者の矜恃のありかたに考へ及ぶことができます。これが国際的交流や世界平和の基盤でもあるのです。

○

「太平洋戦争の敗北?」から「平和憲法の制定?」までのここで採り上げた事柄は、すべて今日の私共の問題なのです。いかに占領行政が巧妙で高圧的であったかを論証しても、それだけでは無意味なことです。アメリカにしてみれば多くの血を流した上での勝利でしたから我国を料理しようと本気になったとしても当然です。問題はそれに対応した我国の甘さです。物理的降伏のあとの一方的情報戦(占領)はやむを得なかったわけですが、その後においてなほ占領下の価値観をひきずってゐるのはいかにも残念なことです。「無類の拝外的な対外的無警戒」といふのは決して大袈裟な言ひ方ではありません。

敗戦国が、その後の戦後体制を百パーセント謳歌してゐるなどといふことは、本当に人間的にも異常なことなのです。

講話

教育は難しい、然れど面白い

福岡県立新宮高校教諭
小　野　吉　宣

ヒマワリ

新聞投書の一件

「一人出家すれば魔宮皆動ず」

高校生の世界

一旦緩急アレバ、義勇公ニ奉ジ

厳しさに徹す

卒業式のこと

登校拒否の生徒も卒業

若し自他の二境を存して修行せば

新聞投書の一件

僕が教員になったのが昭和四十六年ですから、今年で教員歴二十年といふことになりますが、僕が教員になる前年、二十二歳のときに、西日本新聞に「ストをやめ、教員に情熱を」といふ題で投書をしてゐました。この投書を紹介することから僕の話しを始めたいと思ひます。

生徒は教師の言動の背後に、一つの強力な人間像を求めてゆく過程で精神的に成長をとげてゆくものである。私は無意識のうちにも、生き方の手本を求めてきた。しかし昨今のやうに、教師が授業を放棄し政治や賃金闘争に終始してゐれば、生徒や父兄に不信感をいだかせるだけだ。

私の経験であるが、高校のとき、授業を放棄してデモに参加した国語の教師に街頭でバッタリと出会った。先生は一瞬「シマッタ」といふうしろめたさのこもった目をされた。私は尊敬してゐた先生が生徒をはふり出してデモってゐる姿に、先生に裏切られたいひしれぬ悲しみを覚えたものだ。

この国語の先生、僕の大好きな先生でしたから授業を一所懸命聞いてゐました。教科書の

中に、作品を書いた作家の経歴を見て「何年東大卒」とあるとこの作家は先生の何期年上の先輩でといって自分が東大出身であることを僕達に知らせた上で、含蓄のあるいい授業をされてゐた。あの日は、その先生の授業も自習になり、当時は「もうかり」と呼び、午後は帰っていいといふことになった。

街を通って帰ってゐると、向かうからデモ隊の人がずうっと列を作って通ってきた。僕は好奇心があるから、どんな人がデモをしてゐるのかなとじっと見てゐました。レインコートに、ハンチング帽子をかぶった先生も列の中にをられたのです。それで先生に「こんにちは」と挨拶しようと思って待ちかまへ、挨拶をしたら、その先生は挨拶を返されなかったのです。右の文章のやうに「シマッタ」といふ表情をなされた。先生は本当にまづいところを見られたといふ顔をされ、僕の方は、今まで尊敬してゐた先生に裏切られたといふ感じを消しがたく持ったわけです。

「一人出家すれば魔宮皆動ず」

教師になる以上は、生徒にあのやうな表情を決してみせないでいい堂々たる教師になってやらう、ただ一人組合に入らぬから人一倍勉強して授業に熱意をこめようと決心しました。

教師になって最初の年、ストライキありデモあり で、福岡の筑豊地区は特に荒れてゐました。校長が僕を呼んで「明日教職員のストライキがあり、校門で組合員がピケを張るから、いつもより一時間ぐらゐ早く来てをきなさい」と言はれる。こっそり組合員がピケを張る前に学校に入ってをきなさいと校長がいはれるが、僕は正々堂々とストに入らないのである。いつもの時間に学校に行きました。校門には他校の先生や労働者がきてピケを張ってゐました。よくみると生徒達は狭い横の通用門をひっそりと入ってゐました。

をかしいのではないか、生徒も僕も真ん中を通るべきではないかと思ひ、僕は真ん中を通ってゆかうとしました。するとツカツカと、後できくと隣の学校の野球部の顧問だったらしいが、鬼瓦みたいないかつい顔の男が僕の前に立ちはだかった。僕はショ

ルダーバックを担いで学校に行ってをりましたが、右肩をバシッと突いて、「スト決行中になんで入るんだ」といふ。鞄を突き落され僕はしかたなく拾ひあげながら、「これは暴力ではないか」と思った。そこで僕は「今あなたは僕に対して暴力をふるひましたね。」とつめ寄り、「あなた、もう一度ここを突いてみませんか」と言ったのです。登校中の生徒達も立ち止まり人だかりができてゐる。そこで相手は形勢が不利になったと思ったのか、一歩さがり道をスーッと黙って開けた、そこで僕はもう一度勇をふるひ起して「おい生徒諸君、心配をかけたけれども、今日は平常通り授業があるんだから教室に入りなさい」と言って、ピケの張ってある校門を開けさせたこともあります。

今ふり返ってみると、多勢に対し一人でよくもあんなことがやれたなあといふ出来事が沢山ありましたが、根底にはごく単純ではありますが生徒に「シマッタ、恥づかしい」といふ態度は決してとるまいといふ発想があったと思ひます。更には教育正常化の灯はたった一人でも立ちあがれば、きっと大きくともる。学生時代に学んだ「一人出家すれば魔宮皆動ず」といふ聖徳太子の信念体験が、僕の内面の強い支へとなってゐたと思はれます。

高校生の世界

国民文化研究会副理事長の小柳陽太郎先生著の『戦後教育の中で』（国文研叢書23）は、教育の原理を考へる上で、教師が避けては通れない大切なテーマを、先生の教育体験から、パースペクティブにとらへて考察してありますから、教育者必読の書であると言へます。先生は、安直に戦前の教育原理を否定されずに、歴史を貫く教育観を持ってをられるので、僕達戦後生れよりも、人間の本性が一層深く正確にみえるクライテリオン（基準）をしっかりと打ち樹ててをられます。

第二章の「教育と文化」の中に、小題の「高校生の世界」（昭和四十四年六月『高校と教育』第五号所載）があります。高校生が、学校の勉強から解き放たれたとき、かれら高校生を待ってゐる世界が、どんなに異様な世界であるか、生徒が教室の壁に書いた漫画、修学旅行のバスの中で歌ふ生徒のうたを例にあげて、教師は「高校生の世界」について、どのやうにみればよいか卓見を述べてをられます。

高校生と日頃接してゐまして、生徒との自然な共通する話題がますます少なくなり、僕達とは違ふ世界に住んでゐるに違ひないとは感じますが、そのやうな現象的把へ方から鋭く切

りこんで、小柳先生は、その本質を観てとり次のやうに言ってをられます。

落書きの漫画に対しては、「その奇妙な漫画の世界に生徒は住んでゐる。それにひたり切ってゐるわけではなからうが、学校の勉強から解放されたとき、彼らを待ってゐるのがこのやうな異様な世界だといふことを、教師はもう一度考へてみるべきではないか。」（73頁）修学旅行のバスの中で「彼らはけろりとした顔でどぎつい恋の歌を歌ふのだ。甘ったるい歌を、もう甘ったるいとは感じないほどに生徒の心はその中にひたり切ってゐる。しかも悪いことには、その甘さは海のむかうの頽廃し切った情緒から生れた甘さなのだ。生徒の心は、その濁った情緒の中に、いはば無重力の状態でただよってゐる。」（74頁）

文部省は二十一世紀に向かって、国際社会に生きる日本人を育成するといふ観点に立ち、新学習指導要領を昭和六十二年十二月の臨教審答申で明らかにしました。その中で「人間としての在り方生き方」の教育を重視したのは一応評価されます。だが、小柳先生が昭和四十四年に指摘されてゐた「生徒の心は、その濁った情緒の中に、いはば無重力の状態でただよってゐる。」ここに日本の子供達を放置してしまってゐることに対して、新学習指導要領の改定に従事した方々は、どれほどの痛感があったのでせうか。

「濁った情緒の中に」ゐる子供達に重力の中心点をはっきり教へて、救ひ出さうとはしないで、子供達の道徳的心情を豊かにし、道徳的判断力を高め、道徳的実践意欲と態度の向上

を図ること等は決して可能ではないとはその後の歴史が示してゐる通りではないでせうか。

一旦緩急アレバ、義勇公ニ奉ジ

小柳先生は「ここには、人間がその根本から腐ってゆくやうな頽廃の影がある。この勢をどこかで喰ひとめない限り一切の教育の営みは無意味なのだ」（74頁）と言はれる。海のむかうの頽廃し切った情緒を科学文明を駆使して日本に送り込む当のアメリカは、イラクとの戦端を平成三年（一九九一）一月十五日に開きました。頽廃し切った情緒の中に、ひたってゐるはずの海の向かうのアメリカの青年達は、灼熱の地、中東アラブへ、親や妻子との涙の別れをし、皆さんもテレビニュースでご覧になったやうに、勇敢にも出で立ちました。僕は同じ日本の若者とアメリカの若者の違ひといふのは、ここではないかと思ひました。

日本は法外とも思へる金を出しましたが、世界からは軽蔑こそされ、何の感謝もされませんでした。一旦緩急アレバ、義勇公ニ奉ジた、つまり侵略は許さないといふ正義のために生命をかけて戦った若者達からみれば、嫌悪すべき民族と映ったのではないでせうか。「金は出すが自分の血は一滴も流さない」日本の姿勢は決して許されないでせう。教育勅語に表明されてゐる「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ズ」は国際社会では何も古いことではないのです。こ

の徳目は日本人の道徳教育の根幹に据ゑられねばならないのです。

戦後教育の中で教育勅語の内容を深く吟味することなくかなぐり捨ててしまった「日本人としての在り方生き方」では、決してアメリカ人は僕達日本人を「戦友」と呼びはしないといふ痛恨の国民的体験を、つい先刻させられたばかりです。

臨教審の第二次答申をみても第三次答申をみても、国際化への提言を行ってはゐるものの、提言の発想が日本国憲法と教育基本法及び、学校教育法に定める「教育の目的」と「目標」に沿ったものであるから、国際社会に生きる「人間としての在り方生き方」の提言がなされてゐるものの、皮肉なことに、国際社会では、根本的なところで通用しないものとなってゐます。

しかし、僕達は、他を攻めるばかりではどうしやうもありません。目の前にはいつも真理を求める生徒達がゐて、教師からのアプローチを、素直に伸びんと待ってゐます。

厳しさに徹す

教師は、現代がかかへる問題に、いどみ、切り拓く気魄を持ってゐなければなりません。教師は生徒達に対し、統一された師表たるべき人間として生き、その生き方を教育の場で、

絶えず問ふてゐてこそ、教師であるといへます。家庭では、ひたすらに、あるひはむなしく努力する母親の行為は感謝の対象であり、「厳にして慈」（佐藤一斎「言録」）なる父親が、子供達にとって尊敬の対象となるやうに、学校では、時代がいかに変転してゐても、やはり感謝と尊敬の対象として教師が存在しなければなりません。

教育心理学によれば、厳しくすると子供の自主性が育たず陰日向（ひなた）のある人間にしてしまふといひます。しかしこの見解は、人間心理のほんの一面を捉へたものに過ぎません。にもかかはらず戦後教育を受けた親達そして教師は、子供は厳しく叱るべきではないと呪縛されてしまひ、教育に対する自信と心理的な自由を奪はれてゐます。

子供に対しての干渉のしすぎと、厳しくするといふことは、教育的には別次元にあります。図式的に言へば厳しさから尊敬心が生徒の心の中にはぐくまれ、もう一つ、感謝される先生とは、親身になることだと僕は思ひます。ただ「頑張れよ」と声をかけるのではなく、親身になって教へ更に教へ込むひたむきさを失ひたくないと思ってゐます。

卒業式のこと

生徒をほめることも簡単なやうで難しく、ほめすぎて図々しくならせることもあります。

自分の生き方のすべてをかけて、生徒の心に向かひあって叱りつけることは尚難しい。一年生で迎へ入れ三年間を過ごして卒業させるまでには悲喜こもごも色々あります。

僕は体育館で全体の卒業式があった後にクラスで一人一人に卒業証書を渡すことにしてゐます。僕のクラスは男ばかりのクラスだったから、生徒から花をもらへるなんて予想もしてゐませんでした。だけど最初の生徒に証書を渡したら、学生服の後ろから隠してゐた白いカーネーションを取り出し、僕にくれました。この生徒一人だらうと思ってゐたら次の生徒も次の生徒も僕に花を渡すのです。十人目ぐらゐは手に花をかかへたままで渡してゐましたが、持てなくなったので、教壇に積んでゆきました。

登校拒否の生徒も卒業

だんだん終はりに近づいた頃、F君の番となりました。F君は今流行の病気で学校に行く時間がくるとお腹が痛くなったり頭痛がしたりする登校拒否症の生徒でした。

登校拒否症になって、病院に預ける先生が周りにゐましたが、大半は治って学校に復帰したためしがない。ひどいのになると十五歳で登校拒否になると治るのに十五年間ぐらゐかかると覚悟しなさい、などと医者は言ふのださうです。そんな馬鹿な話しがありますか。この

子を病院に預けると治るのは三〇歳だといふのです。そんなことできますか。僕はこの子を皆と一緒に卒業させたいと思ふから、生徒の皆も、お母さんにもその決意を伝へ実行してきました。休むときは、母親に連絡をもらって車で往復四〇分ぐらいの家へ迎へに行くのです。同時に、登校拒否を始め青年期特有の病気を治す研究をしました。森田療法とか色々応用しました。結論として、僕は相手の心の中に入り、信頼関係の絆をつくることだと直観し、作業療法など試みてきました。

二学期の終はり頃、うつ状態が激しくなってきました。ある朝迎へに行き、玄関のチャイムをピンポーンと鳴らしたら、母子家庭ですが、お母さんが泣きながら出て来られました。「もう私はこの子に対して力が及びません。何と言っても聞かないのです」と泣かれる。皆さんだったら母親に対し何と言ってあげますか。その答へは、何か適当ないい本に書いてありますか。それを調べる時間がありますか。僕はこんな優しい良いお母さんを何度も泣かすF君に腹が立った。「お前、なんでお母さんを泣かすのか。何度泣かせればお前は気が済むのか」と僕は頬ぺたを張りました。もう怒りが治まらなかったから壁に押しつけて「何だ」と言った。「お前は病気でも何でもない。もう許せない。」僕は本当にもう許せないといふ気持になった。教育者がなってはいけないといふ感情的な気持になってゐた。ところがその生徒が、ポロポロッと涙を流して「先生すみませんでした」と言ってくれた。「本当にお前は悔

ひ改めたのか」と僕は聞いた。「本当です。今度は、最後まで頑張って行きます」と言った。それでF君が証書をもらふところまできたのです。お母さんは教室の後ろの方に来てをられます。F君も花を出して、ひょうきん者だから、皆は手で渡すのに、口にくはへて渡すのです。だから僕も口でくはへて受けとり証書を渡しました。

そのあと「ちょっとみんな聞いてください。」とF君が皆に注意をうながし「僕は小野先生に担任をしてもらったから、みんなと一緒に卒業できたのです。とってもうれしいです。」と言ってくれたのです。

僕は単純で早くいへば馬鹿だから男泣きしました。うれしかったのです。全部証書を配り終ったあと、教卓の上は白いカーネーションの山、心を込めて皆が渡してくれた花束の山です。

それを見て思ひ出しました。『とっちゃん先生の国語教室』(国文研叢書22)の中の一節に「最後の授業」といふのがある。最後の授業でとっちゃん先生は花束を生徒からもらはれた。ところがとっちゃん先生、職員室にもって帰ると周りの先生に何か自分だけもらって恥づかしいと思はれ、図書館の空っぽの花瓶に挿して何もなかったやうに職員室に帰られたといふことを思ひ出した。

僕はそんな奥ゆかしいことが一度でもできればいいなと思ひながら、心の中で葛藤です。

毎朝僕に弁当を作って影で支へてくれた妻にも年老いた母にも見せたいなあと……。だけど後をみると全員の出席者の中にF君のお母さんがしきりに涙を流してをられる。そのとき僕は決心し、「ちょっとみんな聞いてくれ」と呼びかけ、全部の花束を両腕で抱きあげ、「美しいカーネーションの花を有難う。かうして君達の門出の日にお父さんお母さんの見守られる前でこれほど沢山の花束を抱くことができてこれに過ぐる喜びはない」と礼を述べた。教師として僕は親に素直に感謝を表現できる子供であってほしいと常々願ってきた。そこで「この花束を後に立ってをられるお父さんお母さん方に今日（こんにち）まで育てて頂き今日を迎へることができたことに『有難う』と言って渡してくれないだらうか」と生徒に言った。生徒達は一瞬、躊躇する表情をみせたので、「君達の好意は、一生の有難い思ひ出として胸に深く刻みこんでゐるのだから、今度は僕の願ひをきいてくれ」といふと、気持よく皆がうなづきそれぞれが親に渡し始めた。大きな声で有難うございましたといふものあり、照れながら小さな声で言ふものあり。だがこれほどまで喜びの輪が大きくなるとは思ひもよらなかった。生徒も親も心を開き合ひ率直に外に喜びを出し合った。

若し自他の二境を存して修行せば

生徒が教師に対するときは、あたかも患者が医師に向かふやうに、教師に全信頼を置き、不安と期待を交錯して対してゐる。なのに教師がそれに答へ得ないまなざしを向け、生徒の心に染み込まないありきたりの言葉しか発することが出来なくて、生徒にかへって失望を与へてゐることがある。

逆に己れの心を空しくして、生徒に対し得てゐるときがある。そのときは生徒の心の微妙な波動が教師の心に伝はってくる。黒上正一郎先生の言葉を借りれば、教師と生徒といふ「自他の二境が解き放たれ」（『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』68頁）ヴィヴィッドに総合的直観力が働き出してゐるからである。ここから国民教化としての真の教育が展開されると僕は考へるのです。「若し自他の二境を存して修行せば、即ち修する所廣からずして、物とその苦樂を同じうすること能はず。」己れに対し厳しさに徹することができねばならない。もっともっと一人一人の生徒に対して、親身にならねばならない。それがゆゑに厳しさに徹するならば「あの生徒はダメだ。指導を受けつけない」などと言ふ愚痴や泣き事めいたことは決して言へはしない。「生徒の心に向かひあって、厳しい刹那をつみ重ねる」教育は確かに至難の業

である。しかしそのつみ重ねが教師の精神をゆたかにしてゆき、生徒の魂に火を点じることも可能となるのではないでせうか。

相模の国に集ひて歴史を想ふ

富山女子短期大学教授
廣　瀬　　誠

シジミチョウ

ここ神奈川県の一帯は、昔の国名で云へば、相武（相模）の国であったわけで、『古事記』にすでにその名が出てゐます。どんな場面か少しお話致しませう。

有名な倭建命が東の賊を平らげる為に相模の国を通られた時、そこの豪族に欺かれて野原の中で火をかけられ、まさに絶体絶命の危機にさらされます。その時、姨倭比売命から賜った袋の中から火打ち石を取り出し、草薙の剣の鞘をはらって周りの草を刈り切って火打ち石で火を打ち出して此方側から賊に火を向け危ふいところで難を逃れました。

それからさらに東の方へ進み、走水の海（今の浦賀水道のあたり）を船で渡られた時に、大暴風となりまして、今にも船が覆りさうになります。その時、命に付き従ってをりました后弟橘比売命が「妾、御子に易りて海に入らむ。御子は遣されし政遂げて、覆奏したまふべし。」私は命様の身代はりとなって海に飛び込み、海の竜神の心をなだめてこの暴風を静めます。命様はどうか無事任務を果たして都にお帰りください。かういふ遺言をのこして海の中に飛び込まれたのです。その際に辞世の歌一首、

さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも

といふ歌です。あの相模の小野で野火に囲まれて大変な目に遭った時に、命様は煙に咽びな

がらもひたすら私の安否を気づかひかばって下さった、そのやさしい私の背の君よ。さういふ意味です。かうして海の藻屑と消えられたわけです。その後、海の浪はにはかに静かになり、命の船は無事対岸に到達できたのです。弟橘比売命の遺骸はつひに上がりませんでしたが、七日後に比売の櫛が海辺に打ち寄せられたので、この櫛を収めてお墓とされたのです。

さうして命は、東の蝦夷を平定した後、帰還なさる時、相模の国を通られる。足柄の坂を越えるともはや東の国は見えません。その坂に立って振り返ってみますと、最愛の后弟橘比売の沈んだ走水の海が彼方に見えてゐます。その走水の海を見て、「吾嬬(あづま)はや」――わが妻よ、ああ――といふ限りない亡き妻に対する愛惜の言葉をくり返されて去って行かれるのです。

これが『古事記』の伝へる伝説であり、相模の国に関する最古の記述であります。かういふ深い歴史伝承に彩られた土地である相模の国に私どもは集まってゐるといふことを思ひ直してみたいと思ふのです。

もうひとつお話します。NHKのテレビで太平記が放映されてゐます。つい最近もその場面がありましたが、後醍醐天皇の建武の中興がやうやく成った年、すでに足利尊氏は征夷大将軍となって天下の武士を牛耳っていかうといふ野望を持ってゐたわけですが、それをいち早く見抜かれたのは大塔宮護良親王(だいたふのみやもりなが)です。親王は今のうちに野望を抱く尊氏を退治しなければならぬといふことで、事を起こされ、大変な問題になります。後醍醐天皇は、建武の中興

が成ったばかりの時にさういふ騒ぎを起こしては、かへってまづいと思はれたのでございませう。護良親王を犠牲にして足利に預けられました。足利は護良親王を鎌倉に幽閉しまして、やがてどさくさに紛れて暗殺してしまったわけでございます。その鎌倉もこの相模の国で、ここからはすぐ近くであります。

古代の悲劇の皇子倭建命、そして中世の悲劇の皇子護良親王。倭建命は、御父景行天皇から西に東に賊の征伐を命ぜられて、その厳しいお仕打ちに心を痛めてをられました。また護良親王は、親政を進めるためのやむを得ぬ犠牲とはいへ御父後醍醐天皇からその身柄を足利に引き渡されたわけで、その点でお二人とも非常に似た運命を背負ってをられたやうに思ふわけでございます。さうした歴史の舞台となったのが、この神奈川県なのです。

また京都の朝廷と鎌倉幕府との間に、一触即発の

危機が迫ってゐた時、鎌倉の将軍は源實朝でした。その實朝は、自分はいかなることがあらうとも朝廷には背かないといふ堅い決意を、

山は裂け海は浅せなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも

と歌ひひとすぢの忠誠の気持ちを後鳥羽上皇に対して申し上げてをります。しかし實朝は暗殺されて、その後北条氏は朝廷との対立を深め、やがて實朝の死後わづか二年後に承久の変が起こり悲劇を招きました。その實朝はこの神奈川県の鎌倉にゐた将軍です。さういふ点でもこの地は大きな歴史の舞台でもあります。實朝は大雨が降った時、

時により過ぐれば民の嘆きなり八大龍王雨やめたまへ

といふ歌をうたって雨の止むのを八大龍王に祈ってをります。この八大龍王は、大山の阿夫利神社のことであると言はれてをります。大山といふのはこの場所から眺めますと、すぐそこに峙ってゐる鐘ケ嶽といふ山が見えますが、その後ろの方にあるのが大山です。そこに昔から雨の神様として阿夫利神社を祭ってあるわけで、さういふ点でもこの土地は歴史的な因

縁が深いわけであります。夕方になると、この辺り一帯杉の木立をふるはしてひぐらしの声が、カナカナカナ、カナカナカナと響いてきますが、その声に聞き入りながら、この土地を彩る古い歴史を私は静かにかみしめたわけでございます。

さういふ古い歴史ばかりではありません。ごく新しい歴史の舞台ともなってをります。昭和二十年九月にダグラス・マッカーサーがパイプをくはへて飛行機から日本に降り立ったのはこの厚木の地であります。日本列島が初めて外国の支配者に踏まれたその悲しむべき歴史もこの地は刻んでゐるわけです。さうした歴史を思ひ返して改めて私どもは、今後如何になすべきかといふことを考へてみなければならないと思ふのです。

さて、話をもとに戻してみませう。先程ご紹介した弟橘比売ですが、実に美しい名前ですね。若々しい瑞々しい「橘」を名前にしてゐます。この弟橘比売といふと思ひ出すのが、迩々藝命（ぎのみこと）の后となられた木花之佐久夜毗売（このはなのさくやひめ）です。この名前は桜の花の咲いてゐる姫といふ意味ですが、「夜（や）」といふ感動の助詞を混じへてゐます。桜の花が咲く、その美しさに対する賛嘆の気持ちがこのお名前に籠ってゐます。木花之佐久夜毗売、弟橘比売、いづれ劣らず美しいお名前だと思ひます。しかも、日本文化を彩ってきたのもこの桜と橘で、京都御所のきざはしの左右には、桜の花と橘の木とが植ゑてあります。さういふ点から見ても如何にこの桜、橘が日本文化に重要な植物であったかといふことがお分かりいただけると思ひます。そして

その美しい名前が『古事記』のひめ神達のお名前に付いてをるわけです。

『古事記』に出てくる神々の名前は、皆立派な美しいお名前です。特に天皇の直系の御先祖の神々のお名前はことさら立派です。天照大御神（あまてらすおほみかみ）、天を照らす太陽の神様で、光明に輝くお名前です。この頃歴史や神話の書物を見てをりますと、片仮名でアマテラスといふやうに呼び捨てにしてゐる本が多くありますが、失礼なことであります。日本の国の神様の中で最も尊い神様として皇室の御先祖と仰がれてゐる神様をアマテラスと呼ぶのです。須佐之男命（すさのをのみこと）ですと、スサノヲと言ってもスサノヲといふ言葉でまとまった意味を持ってゐるので、場合によってはよいかも知りません。しかしアマテラスといふのでは動詞のままであり、中途半端となって名前として意味をなしません。さういふ簡略主義に私たちは気をつけるべきです。さて天照大御神のお子様は天忍穂耳命（あめのおしほみみのみこと）と申上げます。忍穂耳といふのは大きく立派な稲の穂といふ意味です。そのお子様は天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇々藝命（あめにきしくににきしあまつひこひこほのにぎのみこと）と申上げます。

「天津日高日子」といふのは天照大御神のお子様であることを表す特別の敬ひの言葉ですから一応別にしますと、その意味は「天も地も賑やかで、稲の穂が賑やかに稔ってゐる」といふ立派なお名前です。そのお子様を天津日高日子穂々手見命（あまつひこひこほほでみのみこと）と申上げます。これも「穂々手見」といふのは稲の穂が瑞々しく出てくるといふ意味であります。かういふ風にみますと、御三代ともそのお名前には稲の穂がつけてあることからして、私は日本民族の中心である皇

室の御先祖が稲を持ってこの大和島根に到着されたのではないか、といふ感じが致します。

また、昨年大嘗祭が行はれましたが、その年初めて採れた稲の穂でつくったお米で御先祖の神々を祭り、新しい陛下もきこし召され、そして先祖の神々と新しい陛下とが一体にとけ合はれるといふ神聖な儀式でした。その儀式に稲の穂が出てくるといふことは、天照御神の御子孫達が、稲の穂をイメージした美しいお名前を持っていらっしゃるといふこととけっして無関係ではないと思ふのです。

ところで、かういふ美しいお名前の神様が三代続いた後、神様の命名に変化が現れます。といふのは日子穂々手見命のお子様は天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命と申上げます。お母さまは海の神様の娘に当たられる方で豊玉比売とおっしゃる。海の中で懐妊なさったのですが、お産のため海岸にやってこられます。そこで産屋を所望されたので、日子穂々手見命は鵜の羽で屋根を葺いて産屋を作られます。ところが完成しない前に出産が迫ります。それで「建鵜葺草葺不合」――鵜の羽根で葺くのが間に合はなかったの意――といふ名前が付いてゐるのです。

豊玉比売は出産後、日子穂々手見命と離婚されて、海の国に帰ってしまはれます。『日本書紀』ではその時、海辺に萱でお子様を包んで置いて行かれたと書いてあります。まことに不幸なお子様です。生まれるなりお母さまに捨てられたわけです。それでも何とか育たれたわ

けで、このやうなお名前が付けられたのですが、古代の神々の中でこんな未完成の名前を持った神様はただお一人だと思ひます。私はここに重大な意味があると思ふのです。それは、未完成を未完成のままとしてお名前にしてゐる点です。この建鵜葺草葺不合命を『古事記』の上巻の最後にして神代の物語りは終はり、その次からは神武天皇に始まる人の世の物語になります。全く未完成に終はった神様ですが、然し、この未完成があったればこそ次の人の世の時代が大きく膨らんでいくわけでございます。

考へてみますと、私どもが為す仕事といふものも、どこかに欠陥があるし、未完成のところがあります。然し、さういふ未完成があるがゆゑに新しい次の飛躍ができることも『古事記』は教へてくれます。

この合宿でも皆さんの心の中には充分言ひ足りなかったところや疑問が必ずあることでせう。しかしながら、さういふ未完成なところがあるがゆゑに次の大きな飛躍ができるのだと思ひたい。そしてその大飛躍を切に念願し期待するものでございます。

若き友らへ語りかける言葉

―いま私達の最も心すべきこと―

国民文化研究会常務理事
長内俊平

コゲラ

はじめに
豊かな物は、豊かな心から生まれる
豊かな心とは
聖徳太子様のみ言葉
み言葉から教へて頂いたいま一つのこと
行基様の歌
身近かな体験を大切に
いま私達が最も心すべきこと

はじめに

折角これから楽しい「夜の集ひ」があるといふのに、年寄りがまた話をするんださうだ。ああ一時間が夢の様に過ぎないかなあと思っていらっしゃる方もをられませう。

まことにお気の毒に思ひます。ところが、その考へには大きな間違ひが一つあるのです。時間といふものは、早くすぎてくれればいいなあと思ふ程遅くすぎるものなのです。

ですから、どうかあの老人にしたところが、家にをったら、そろそろ眠くなる時間だらうに、わざわざ話をしてくれると言ふのだから、お伽噺（とぎばなし）でも聞くつもりで、きいてやらうか、といふ優しい心になってきいて下されば幸です。

豊かな物は豊かな心から生れる

三年前の合宿（第三十三回昭和六十三年）でも申し上げたことでありますが、このごろまた「物は豊かになったが、心は貧しくなった」といふ発言をよく聞きます。

一見よいことに気付いてゐる様にきこえますが、果してさうなのかと、今一度皆さんと共

に、この問題を考へてみたいと思ひます。

一般に、「物」といはれますのは、具体的には、「私のもの」或は「私たちのもの」であります。私の本であり、私達の學校や図書館であります。

さうしますと、物と言っても、それは私の或は、我々の欲する物が、生産され世に出廻ってゐることに気付きます。誰も欲しがらないものは世に出ないでせう。

本居宣長さまは、『うひ山ふみ』のなかで、「大かた人は言と事と心とそのさま大低相かなひて、似たる物にて、たとへば心のかしこき人はいふ言のさまも、なすわざのさまも、それに応じてかしこく、心のつたなき人は、いふ言のさまも、なすわざのさまも、それに應じてつたなきもの也」と言ってをられます。

この言葉を、今の世に当てはめてみますと、世に出廻ってゐる物や、我々のやってゐることや、言ふてゐることや、言葉遣ひなどをみれば、我々国民の心のさまがよく分るといふことになるでありませう。

私も日本國民の一人でありますので、悪しざまに言ふことは好みませんが、週刊誌をはじめ、雑誌や新聞の氾濫、インスタント食品や各種罐入飲物等の氾濫、自転車、バイク、自動車等乗物の氾濫、レジャー施設の氾濫、またこれらに伴ふゴミの氾濫、交通事故の増大、また金にまつはる不正や犯罪、なげやりな言葉遣ひ、出生率の低下、等々、いまの日本の有様

は、我々国民の心のありさまを、そのまま反映してゐるのではありませんか。

反面、根気の要る伝統工芸や、土にまみれて働くお百姓さんなどの後継者なく、またあったとしても、その人のお嫁さんにならうとする女性が極めて少いと聞いてをります。

物は豊かになったが、心は貧しくなったのでは断じてありません。

我々日本人の豊かならざる心のさまを、そのまま映してゐるのが、今日の日本の現状であらうかと思ひます。

そのことに、先づ、我々は深く気付かなくてはならないと思ひます。

豊かな心とは

しからば、豊かな心とはどんな心であり、どうしたら、その豊かな心を恵まれる様になれるのでありませうか。

先におかくれになられた、昭和天皇様は、昭和五十二年、第三十二回の「国民体育大会」のため青森においでになられました。その折に、

弘前の秋はゆたけしりんごの實小山田の園をあかくいろどる

といふ御製をお詠みなさいました。

昭和天皇様がおいでになられた十月初旬の津軽地方は、まことによい天気が続きました。そして黄金色(こがねいろ)に稔った見渡す限りの田圃(たんぼ)の稲の穂が、なびくさまは、世にこんなにも美しいものがあるのかと思ふ程でした。

その稔り続く小山田のかたへに赤くたわわにみのった林檎畑がある。陛下は「ああ豊かだなあ」とお感じになられて、この御製となったものと拝されます。

また昭和五十七年に

さんしゅゆの花を見ながら公魚（わかさぎ）と菜の花漬を畫にたうべぬ

といふ御製を詠んでいらっしゃいます。

私の小さな孫に教へましたらたちどころに覺えてしまった御歌であります。

春になると梅咲くかたへに万作が咲き出し、さんしゅゆが花開き、やがて連翹（れんぎょう）が、そして畑には菜の花（アブラナ）が咲きます。皆黄色い花です。近頃ではあまりみかけなくなりましたが、私の育った青森県の下北半島では、いまでも見渡す限りの菜の花畑があります。菜の花をみますと、

菜の花畠（ばたけ）に入日薄（いりひうす）れ
　見わたす山の端（は）　霞ふかし

春風そよふく　空を見れば
夕月（ゆふづき）かかりて　にほひ淡（すず）し

といふ小学唱歌がすぐ口遊さまれます。

この菜の花から採るのが、菜種油でとてもおいしい食用油です。小さい頃、一合（一八〇cc）

か二合、母に「俊ちゃんすまないけれども」と言はれ店によく買ひに行ったものです。
その菜の花畠の美しさは、また格別のものでした。心のなかに春の気が一ぱいに満ちてくる様に感じられたものです。
陛下は、春にさきがけて咲く、萌薫色の何とも言へぬ清やかな、さんしゅゆの花をごらんになられながら、北国で、やはり春にさきがけて採れる清らかな白魚である公魚とそして、いま申し上げた菜の花のお漬物を召しあがられたといふ、ただそれだけのお歌でありますが、何とも言へぬ豊かさを感じさせて下さいます。
そして人の真の幸はどこにあるかをも教へて下さる様な気がいたすのであります。

聖徳太子様のみ言葉

さきごろ、私は、聖徳太子様のみ言葉を拝してをりまして、深く心に刻まれたことがございます。私共が聖徳太子様のみ言葉を仰ぐことが出来ますのも、一重に黒上正一郎先生のお遺し下さった『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』といふ御本の導きによるものでございましてその御恩は謝す言葉もない程であります。
さて、維摩経といふお経のなかに、お釈迦様が、菩薩の学ぶべきこと(修行すべきこと)を、

いろいろ説いてをられる箇所がございます。（菩薩行品）

そのなかに「少欲知足にして世法を捨てず」といふ教へが出て参りますが、太子様はこの教へをご自分の体験にてらし合せられながら釋されるみ文のなかで、「〈少欲知足〉とは、分に過ぎざるをいふ」（維摩經義疏）と、おっしゃってをられる箇所がございます。

私は、しばらく前から豊かな心は、足るを知るこころから恵まれてくるのではないか、と思ひ続けて参りました。しかし「足るを知る」の境に近づくことは、まことに至難な道であることにこのごろ気付かしめられたのであります。

宮澤賢治先生の「雨にも負けず」といふ詩の中では、「一日に玄米四合と味噌と少しの野菜を食べ……野原の松の林の蔭の小さな萱葺の小屋にゐて」それで足れりの境地にをられる方もあれば、私の様に、人様から、素晴らしい奥さんだと賞められる様な家内を恵まれてをりながら、もう少し料理が上手につくれたらなあ、もう少し字がうまく書けたらなあ、といつも不満に思ってゐる者もをります。さういふ自分に気付かせられてから、この「知足」といふ境地に一歩でも近づくには、どうしたらいいものだらうか、といふ思ひが心を離れぬ様になって参りました。

さうした折に、この「少欲知足とは、分に過ぎざるを言ふ」とのみ言葉に接することが出来たのであります。

私は、このみ言葉を拝しましたとき、太子様は、私に「長内、人は人間としての分を知らなくてはなりませんよ。君は、自分では相当な男だと思ってゐるかも知らないが、よく自分をみつめてごらんなさい。さうしたら自分程至らぬもの、自分程謝恩の心の足らぬものは、この世にをらぬことに気付く筈でせう。また自分では相当賢い男だと思ってゐるだらうが、明日のわが身さへ分らぬではありませんか。自力と人智には限りがあるのですよ。このことに深く気付いたなら、つつしみの心を持たざるを得なくなるでせう」と語りかけて下さった様な気が致したのであります。

その尊い導きを頂きましたとき、自づ口遊さまれましたのは、

田に畑にところゆづりてしづがすむいほりちひさく見えわたるかな（「田家」明治四十二年）

といふ、明治天皇の御製でございました。

私は、このお百姓さんの心を心とし深く慎みの心を持たなければならぬことを教へられたのであります。

人としての分即ち自力の限界に気づき、人智の限界に気付き、尊いものに掌を合せずにをれぬ慎しみの心を深めてゆくことが、豊かな心に恵まれる基となるものではないだらうかと

気付かしめられたのであります。

み言葉から教へて頂いたいま一つのこと

また最近「自然保護」といふことがよく言はれます。これも一見よいことを言ってゐる様でありますが、吟味を要する様に思はれます。

第一に私達はこの言葉を遣ふとき「自然」とは分りきったものと思ひ込んでをる気味がないでありませうか。

しかし自然とは自明な（みれば分るといふ）ものでせうか。

この合宿にも二度おいで下さり、忘れ得ぬお話をして下さった、岡潔先生は、昭和四十四年の第十四回合宿で、我々が自然といふものを全くわかってゐないことについて「自然科学者は、自然とは何であるかといふことを言明しないのです。そんなものは、見れば分るであらう。わかり切ったものだ、と決めてしまって、それを研究対象にしてゐます。その研究の結果を集めたものが、自然科学であります」（『日本への回帰第五集』所載「欧米は間違ってゐる」のなかの一文）とおっしゃられました。

いましばらく自然とは何かについて皆さんと一緒に考へてみませう。

「自然」といふ言葉をきいて皆さんは、何を思ひ浮べますか。海山の景色ですか。私は、海、山、空や小鳥や虫や草や木と同時に、いつも自分を思ひます。

小鳥は夕方になると塒に帰ってゆきます。

そして夜が明けるといち早く鳴き出します。　ああ自分も小鳥と同じなんだなあと思ひます。私も夜になると小鳥の様に睡くなり、朝になると眼を醒します。また春になり、草木の芽が萌えだしますと、何とも言へず心が弾んで来ます。夏になると、まぶしい陽ざかりのなかに海遠く、また山の上高く立ち昇る入道雲をみては、希望に胸をふくらませ秋になり、虫が鳴き、木の葉の散ってゆくさまをみると何となく物悲しくなります。そして冬になり、寒い北風に吹かれては、心身が凛々として来ます。

ああ自分は、自然と切りはなせない存在なんだなあ。いや自然そのものなんだなあ。いふなれば、自然の姿をそのまま映した小自然なんだなあ、とつくづく思ひます。

ですから、私自身をしづかにみつめれば、自然といふものが、少しは見えて来るのではないかと言ふ気がいたします。

ところが、この私自身が、少しどころか全く分らないのです。

そもそも生れるときからしてさうでせう。お父さん、お母さんの子として生れたくて、私の父母の子として生れて来たのか。

日本人として、生れて来たくて日本人に生れて来たのか。そんなことは全く分りません。ただ不思議な縁としか言ひ様がないでせう。

またどんなに老いることがいやであっても浦島太郎の様に、いつまでも若さを保ってゐることは出来ませんでせう。

いつ死ぬか誰も分らんでせう。死ぬのがいやだからと、不老長寿の薬を飲んでみたところで死を免れることは出来ません。

さらには、心を離れて肉体はなく、肉体を離れて、心はないことには気付いてをりますが、しからば心と身体はいかなる関係にあるのか、また肉体を離れて心はない筈なのに、人は死んでも霊魂は不滅であるとも言はれてをります。

私も霊魂の不滅を信じてをりますが、誰もその秘密を知りません。

世界の四聖人の一人と言はれるソクラテス様でさへ「ぼくは…われみずからを知るということがいまだできないでいる」（プラトン著、藤沢令夫訳『パイドロス』岩波文庫）と言ってをられます。

以上申し上げたことにより、私達は、自然とは何かが、一向に分ってゐないことに少しはお気付き頂けたかと存じます。

行基様の歌

ほろほろと鳴く山鳥の声きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ

といふ行基（ぎょうき）さま（奈良時代の高僧）の歌を、私は大好きでありますが、私の様なものでも、窓近く来て鳴く鳥の声を聞くと、ああ、お袋でないか、青砥宏一君（小生の親友昭和六一年没―国文研刊・『青砥通信鈔』参照）ではないかと思ふことがよくあります。

また故郷へ帰りますと、海も山も小川も木も草も小鳥も虫も、私に語りかけて来る様な思ひがします。

ことに戸数僅か七十戸（こ）しかない青森県下北半島の小さな漁村で育ちました私にとって、海は私の友であり、私の一部であり、私自身である様な気がいたします。

今でも海が見えて来て、潮の香がすると、私の胸の鼓動が早まって参ります。母の胸へ帰る思ひがするからでありませう。

私達人間は自然と一体であり、それと関はりなしには一刻も生きてゆけぬ関係にあるのです。

私の家内は、昔の女学校を出、三人の子の母親といふ極めて平凡な主婦でありますが、ときをりびっくりする様なことを申します。

先頃も故郷へ帰る列車のなかで「木や草が緑で空が青いって言ふことは、本当に有難いことですね」と言ひました。私は常日頃偉さうなことばかり申してをりますが、木や草が緑で空が青いのは当り前のことと思ってをりましたので、ビックリして家内の顔をみました。そして惚れ直しました。

私達は、螢がゐなくなったら実は、親友がゐなくなった様に大きな声で泣かなければいけないのです。

「自然保護」といふ言葉には、その悲しみがこもってをりません。

大体「保護」とは、自分より下のものをかばふといふ意味でせう。とんでもない傲りではないですか。私達にとってそれなしに一刻も生きてゆけない空気・水・食物は、すべて自然からの恵みでせう。自然によって守られ生かされてゐるのは、私達人間ではないですか。

聖徳太子様は、「憍は是れ悪中の極なること明らかなり」（維摩経義疏菩薩行品）と言ってをられます。

私達人間の人智ではかり知ることの出来ぬ霊妙不可思議の存在である。自然にむかふときは、私達の祖先達が、海、山、川、風などをすべて神と尊み掌を合せた様な、深いつつし

みの心をいつも持ってゐなくてはならぬと思ふのです。

身近かな体験を大切に

只今も申し上げました様に、物事を考へるときは、いつも身近かな体験と照らし合せながら、自分との対話を基にしてすることが大切であります。

友人が「私のお袋は世界一だよ」と言ふ言葉を聞くと、じーんとして来ます。

何といふ偉い男なんだと思ひます。

しかし「我が国は世界一だよ」といふ言葉を聞いた途端、「そんな筈があるかよ」といふ言葉が返って来ます。

何故なのでせうか。「私の母は世界一である」ことは、よくて「我が国は世界一である」ことは何故間違ひなのでせうか。

先日新聞をみてをりましたら、カナダ在住の中山福雄さん（多分カナダの大学かどこかで教官をなさっていらっしゃる方でせう。）といふ方が詠った

「おおカナダ」胸張って歌ふ教へ子は日本の国歌歌へと迫る

といふ歌が載ってをり、大変感動致しました。その教へ子の方は、カナダ人なのでせう。祖国カナダを心から誇りに思ってゐるそのまごころが伝はって来たからであります。

友人が「私の母は世界一だよ」と言ってゐるのは、決して世界中の母を比べてみて、その中で、私の母は一番だよと言ってゐるのではないのです。自分の表現を絶した、このお袋の子として生れた心からのよろこびと、誇りと、思慕の信（まこと）を、さういふ表現でしか言ひ現はし得なかったのです。

そもそも母といふものは、友人にとっても、私にとっても、世界にたった一人しかゐないのです。世界中の母などといふものはゐないのです。世界中の母などといふのは、実体のない概念にしかすぎないのです。

そのことに皆おぼろげながら気が付いてゐるのです。ですから、お母さんのことを賞めると、「ああさうか」といって感動するのです。

ところが、一歩、国といふ言葉をきいた途端、実体のない概念の世界へ迷ひ込んで、馬鹿を言へ、「日本が世界一の国だ、といふなら、そのことをはっきり説明しろよ」と言ひ張るのです。

説明といふといかにも學術的にきこえますが、この世の中には、説明出来る世界と、説明出来ない世界があることを、しっかり知って置くことは大事であります。

「小春日和の暖かさに溶けて、今日もどこからか、のどかな子供達の唄声がきこえてくる」といふ文をよく覚えてゐます。小学校の読本で習ったものです。この文にある「小春日和」って、どんなことかと聞かれれば、私達日本人なら、晩秋初冬のあの春の様に暖かな陽のさす縁側を思ひ出すでせう。ついで、コックリコックリ居眠りしてをるおばあさんの姿も。

しかし南洋の島々の人に、小春日和といふことを本当に分る様に説明することは不可能でせう。

また最近のはやり歌のなかに「津軽には、七つの雪が降るとか、粉雪、綿雪、つぶ雪、ざらめ雪、水雪、かた雪、春まつ氷雪」といふ津軽の雪をうたった歌詞があります。

私は津軽衆ですから大体分りますけれども、津軽に住んでみたことのない方に、その一つ一つが、身体で分る様に説明することは、どんな文学の達人でも、氷の博士様でも出来ないことです。それらは皆体験してみなくては分らぬことであります。

そんな話をすれば、皆さんは「たしかに然うだな」と納得してくれます。

ところが、天皇とか国柄などと言ふ言葉を聞いた途端に、その素直な心を惜し気もなく振り捨てて「もっと論理的に分る様に説明しろよ」といふことになってしまふのです。

小春日和や雪でさへ、分る様に説明出来ぬのに、何万年何千年続いて来たわが国の尊く奥深い国柄について、手っ取り早く、分る様に説明出来る筈がないではありませんか。

説明出来るものは、全体との関連を絶ち切った部分部分のことについてだけなのです。

生きたる全体は、身心で全一的に感じとるしかないのです。

いま全一的に感じとると申し上げましたが、お分りにくければ、先の昭和天皇様が、お病気ときいたとき、あなた方の、おぢい様・おばあ様が、どういふ態度をとられたかを思ひ出して下されば、すぐ分ります。

お病気ときいて、じっとして居れず、神棚へお燈明をあげ、一心にお祈りなさったでせう。次の朝からは、産土様にお参りに通ひ、そして、いよいよみ病が重くなられてゆく知らせに、二重橋まで出かけ熱禱なさいましたね。あの姿が、国柄を全一的に感じとった方の姿なのです。

さういふ全一的な感じ方でしか、天皇や国柄は分らぬのです。このことをしっかり知っておかなくてはなりません。

いま私達が最も心すべきこと

先日、メキシコのインディオの若者達が、太平洋の荒浪洗ふ危険一ぱいな磯に、三ケ月もの間テントを張って、婚約者に贈る花嫁衣装を織る糸を貝で染めてゆく様子をテレビで観て

ゐました。

小さな貝を一つ採っては、その貝からにじみ出る僅かな液を糸に塗りつける。一つ採ってはまた塗る。全く気の遠くなる様な忍耐を要する危険な作業でした。さうして染め上げた世にも美しい糸で、婚約者は花嫁衣裳を一心に機で織り、その衣裳をつけて村人の祝福をうけるのです。観てゐて胸が熱くなって来てどうしやうもありませんでした。

それは、一つには

多摩川にさらすてづくりさらさらに何ぞこの子のここだかなしき（万葉集巻十四東歌 三三七三）

と歌った私達祖先の懐かしい若者達の簡素にして、つよく美しい姿が、このインディオの若者達の姿と重なって見える様な思ひがしたからであります。

いま一つは、この若者達の姿をみつつ人の幸とは、貧しい着物を着てゐるとか、よい家に住んでゐるとかなど、外からみて云々すべきことではなくて、本人が真に幸であると感じてゐるか否かの、その本人の心の持ち方、その一点にあることを今更の様に教へられたからであります。

何万何千年と続いてきた祖国日本の精神伝統を敬慕する心を失ひ、何一つ、これといふ天

然資源のない国の国民でありながら、他国から輸入した、子孫からの預りものである、この大切な地球の産物を惜し気もなく消費して、勿体ないといふ尊い言葉も忘れ、心の痛みを感じなくなりつつある、人間としての分、即ちつつしみの心を失ひかけてゐる。いまの私達が、未だ文明化されてをらぬ国々の方達に向って「私達を見習ひなさい。そしたら必ず幸になりますよ」と胸を張って申せませうか。

いま私達日本人がなすべき最も大切なことは、この、人としてのつつしみの心をよびもどすことであります。

さう申しあげますと、なかには、そんなことでは生温いとお思ひの方もをられませうが、この世の中で、一番むづかしいことは、自分の行ひをあらためることであります。

しかしそれなしに、人を動かし、世を動かすことは出来ません。聖徳太子様は、維摩経義疏のなかで「若し天下の道理を論ぜば、悪を遣り善を取るは必ず己に始まりて方に能く人を勧む。若し自ら能くせずんば安ぞ人を勧むるを得む」とおっしゃってをられます。「必ず」といふみ言葉にこもる人生に対するご確信を共に仰ぎたいと存じます。

私は、いま「よびもどす」と申し上げました。それは、もともと自分にないものを、新たに身につけることは至難の道でありますが、我々には、つつしみ深く、廣く豊かな魂をもった祖先の血が脉々と流れてゐる筈であります。私達にして、人間の分に気付き、人智のはか

らひを清く洗ひ捨てて、素直な心に立かへるならば、我々の血潮に流れてゐる尊い魂が、音たてて甦って来ないといふことがあり得ませうか。

私は、それを信じてをります。

御清聴有難うございました。

完

短歌入門

短歌創作導入講義

―短歌の本質と魅力―

福岡県立須恵高校教諭
那　須　三　元

カワセミ

はじめに

何を題材として詠むか

創作の際、特に注意すべきこと

短歌の調べについて

はじめに

この合宿では、参加者全員に短歌を詠んでいただくことが伝統になってゐます。短歌を実際に自分で詠んでみる、同時に他の人の詠んだ短歌を味はってみる、といふのが、この合宿における研修の大きな柱の一つなのです。では短歌といふ言葉を聞いて、皆さんはどのやうなイメージをお持ちになるでせうか。恐らく、古臭いとか、特殊な言葉を使ふ難しいもの、などといふ感じをお持ちの方が多いのではないかと思ひます。また、感傷的・言葉の弄びといったイメージもあるのではないでせうか。いづれにしろ、身近なものとか気軽に作れるものといふイメージではないと思ひます。私自身も高校を出るまではそのやうなイメージを持ってをりましたし、高校の国語教育の現場にをりまして国語の教科書における短歌の扱ひを見ますと、そのやうな印象を多くの人が持つのも分かる気が致します。と言ひますのは、例へば、私が高校一年生に短歌を初めて作らせる前に生徒に何か知ってゐる短歌を挙げてみよと言ひますと、多くの生徒が挙げるのは、長塚節の

垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども

といふ短歌です。この歌を生徒がどう受け取ってゐるかと言ひますと、「垂乳根の」が母に懸

かる枕詞であり、「垂乳根」と「たるみたれども」とが縁語的な関係にあり、四句切れで、結句の「たるみたれども」が倒置されてゐる、などといふ言はば歌の外形的な事柄が中心なのです。そのために、作者の母親に対する気持ちにはあまり注意が払はれない。さういふところに前述のやうなイメージを生む土壌があるのではないかと思ひます。

長塚節といふ人は明治十二年に茨城県に生まれた歌人で、新聞「日本」紙上で正岡子規を知りその後子規の弟子となって、子規からとてもかはいがられた人です。しかし三十三歳の時喉頭結核にかかり、ほおっておいたら余命一年といふう診断を受け非常に動揺します。その後婚約も自分から解消し、東京と博多での入院治療を繰り返しますが、先の歌は詞書によると、婚約解消のことで苦悩し東京の病院を一時退院して故郷に帰った時の歌なのです。節の家は素封家であったやうですが、父親の政治活動のために家運は傾きつつあったと言ひます。さういふ時、長男である節が喉頭結核にかかり、彼の母の悲しみはいかばかりであったでせうか。「垂乳根の」という枕詞には、年老いた母に対する申し訳なさ、また労りといった気持ちが感じられます。そしてその母が作者のために青蚊帳を釣ってくれるのですが、年老いた母ですからきちんと蚊帳を釣ることはできない、しかし不治の病に冒され久しぶりに帰郷した息子を思ふ母親の気持ちが伝はってこないでせうか。そして「すがしといねつ」といふ言葉には、体を冒しつつある病魔への不安と婚約解消による苦悩、さういふ中で久しぶり

に帰った故郷で母の深い愛情に包まれ安らかに眠りにつく安心感・安堵感が感じられます。忍び寄る死の影と戦ってゐた節には、年老いた母親の愛情が身に滲みて感じられたに違ひないのです。

作者はこの後一年もしないうちに亡くなりますが、この歌に表れた余命少ない作者の母に対する万感の思ひは、決して感傷的なものではなく、何か人生の真実とでも言ふべき人間にとって本当に大切な感情ではないかと思ふのです。

短歌は、万葉集以来現代に至るまで沢山の歌集があり、沢山の歌人が出てゐます。ですから時代によってまた歌人によって、実に様々な詠み方があるわけです。高校の国語の教科書にも現代の短歌がいろいろ載ってゐますが、何か特殊な雰囲気とか気分を表現することで独自の境地を作り上げようとした歌が多いやうです。確かに表現としてみれば面白いし、

その雰囲気や気分がよく出てゐると思ふ時もまゝあるのですが、自分も詠んでみたくなるやうな身近な感じとか、心の奥底に響いてくるといふ感じはあまりないのです。かういふところが、短歌を我々から遠ざけてゐる原因かもしれません。しかし短歌が千数百年も詠み継がれてきて、現在に至ってもなほ多くの詠み手と読者を持ってゐるのは、短歌が以上のやうな万人の心の奥底に響く言はば人生の真実といったものを表現してきたからであらうし、また日常生活の中での些細な思ひを手軽に表現できたからではないかと思ふのです。それが短歌の持つ根本的性質であり、魅力ではないでせうか。今日はそのやうな短歌の詠み方について、私なりの手引きをさせていただきたいと思ひます。

何を題材として詠むか

短歌の詠み方の実際についてはお手元の国文研叢書「短歌のすすめ」三十五頁から五十八頁までに具体的に示してありますが、その中でも特に気をつけていただきたいことについて申し上げたいと思ひます。

短歌を詠まうとする場合、まず、最初に申し上げたいのは、何を題材として詠むか、といふことです（「短歌のすすめ」四十八頁～五十五頁参照）。これが、特に作り始めの頃はとても大

切だと考へてゐます。感じたことや感動を詠むのは勿論ですが、「感じたことや感動」と言っても、自分は何も感じてゐないのではないか、とか、どういふ心の動きを感動と言ふのだらうか、などといふふうに私も短歌に触れて間もない頃は随分困ったものです。

今日は合宿教室のちゃうど中間に当たりますが、ここで、皆さんがこの合宿教室に参加するために家を出てから後のことを思ひ返してみてください。合宿地に向ふ時、七沢自然教室に着いた時はどういふ気持ちでしたか。開会式の後未知の班員の方との出会ひがありましたが、友達の自己紹介を聞きながらどういふ感想を持たれたでせうか。そして最初の合宿導入講義ではアサヒビールに御勤務の坂東先生が、会社に入社以来折に触れてお詠みになった短歌を示されながら、とても生き生きと話されました。また二日目の朝には国武先生が、朝鮮半島を巡る古代日本の緊張した状況をわかりやすくお話しくださいました。そして昨晩は小野先生の、登校拒否の生徒を担任として持ち卒業させるまでのとても感銘深いお話しがありました。そして本日のこの短歌導入の時間となってゐるわけです。

この間、皆さんは実に様々の思ひをなさったのではなからうかと思ひます。参加する前の不安や期待、また講義や班別討論輪読を通してとまどひや共感、反発もあったかもしれません。また友達の態度や言葉に、何かをはっと気づかされるといふことはなかったでせうか。そのやうな様々な思ひが必ずあっただらうと思ふのです。短歌にその思ひを詠んでいただき

たいのです。それでは「何を題材として詠むか」について具体的に昨年の合宿教室で詠まれた歌を参考にしながら見ていきませう。

▼合宿を通しての様々な思ひを詠む

①ねむい目をこすりこすり皆集ふ阿蘇のふもとの朝の体操　拓大　松本直子
②見渡せば友は皆々論じれど我の口より出る言葉なく　拓大　道旗慎司
③討論で言葉出でこぬ苦しさを耐えしのびつつ合宿過ごしぬ　拓大　野間貴雄
④不安消え心開いて語り合うこの喜びをいかに伝えむ　茶水大　栗山敦子
⑤友だちの思ひを込めし言の葉をまぶたを閉ぢてひたすらに聞く　鹿大　藤原順子
⑥さしつまる時をむかえてのひとときにふと見る花はとてもかわいい　中大　古川広治
⑦阿蘇に来て胸はずませてタオル持ち友とつかりしラジウム鉱泉　西南大　田崎恭士
⑧緑濃き阿蘇の大地にリンリンと虫の音しげく涼を奏づる　一経大　吉永満男
⑨布団しき枕ならべて友だちと時のたつのを忘れ語らふ　鹿大　山内聡子
⑩父と子が湯ぶねにつかり楽しげに語る姿のうらやましきかな　社会人　江口勝博

①は、朝眠い目をこすりながら集ひの広場に向ふ時の歌、②③は班別討論の時の苦しい思

ひを詠んだ歌、いろいろ感動なさって言葉が次々に出てくる方もいらっしゃると思ひますが、班員の中には討論に参加できず苦しい思ひで過ごしてをられる方もいらっしゃると思ひます。さういふ方はぜひその思ひを歌に詠んでいただきたいですね。④⑤もやはり班別討論の時の歌ですが、④は初めはよく知らなくて話もできなかったけれども、班員の皆さんと仲良くなっていろんなことが話せるやうになったといふ喜びが詠んであります。⑤は心の底から思ひを一生懸命に語る言葉に、思はず自分も引き込まれ真剣に聞いたといふ歌でせう。⑥の歌は講義や班別討論で緊張した後の休憩時間などに、ふと窓の外を見ると外の景色がぱっと目に飛び込んできたといふ歌、⑦は、阿蘇の温泉は有名ですが、その名物の温泉に楽しく入ったといふ歌、⑧は「涼を奏づる」といふ表現を再考する必要があると思ひますが、この七沢自然教室でも蟬の声がしきりに聞こえますね、その声に清涼感を覚えたといふ歌、⑨は、あまりに話すのが楽しくてつい夜ふかしをしてしまったといふ歌、⑩は社会人の方の歌ですが、この方にもやはり小さな子供がいらっしゃるのかもしれません。以上、十首の歌を紹介しましたが、このやうに皆さんもこの三日間で様々のことをお感じになってゐると思ひます。ただ、例へば①に「ねむい目をこすりこすり」とありましたが、「自分もちゃうどその眠い思ひで朝集まってきたことを詠まうと思ってゐたけれども、もうレジュメで紹介されたから真似したようで詠みづらい」と思っていらっしゃる方もあるかも知れません。似たやうな気持ち

を詠みましてもその人なりの言葉で表現しますと全く味はひの異なる歌が出来上がりますので、安心して詠んでいただきたいと思ひます。

▼印象に残った、または感銘を受けた事実・場面を詠む

⑪班友（とも）のこと詠める歌々書き添えてはるか阿蘇より親へ便りす　早大　大島伸一

⑫きりたてる火口の底の深きより白き煙の湧き上がりくる　亜大　福富賢介

①～⑩の歌には「眠い」「苦しさ」など気持ちを直接表現する言葉が使はれてをりましたが、⑪⑫の歌にはさういふ言葉は使はれてをりません。⑪の「班友のことを詠める歌々」といふ言葉には、大島君がそれまで班の中で友達といろんな話をし、そのことがとても印象深かったのだなといふことが感じられます。「親へ便りす」といふ言葉にも大島君が御両親とどういふふうに生きて来られたかが彷彿とします。「楽しい」などの言葉はありませんが、詠んだ方の気持ちがよく伝はって来ます。⑫の歌も「素晴らしい景色だった」といふ言葉はありませんが、阿蘇の火口からの眺めの雄大さ・迫力が伝はって来るやうに思ひます。このやうに、印象に残った事実・場面をそのまま表現しても感動はよく伝はるものです。

創作の際、特に注意すべきこと

▼言葉を選んで五七五七七の型に整える努力をする。

御存知の通り短歌には五七五七七といふ形式があります。慣れないうちにはこの形式に自分の気持ちを詠み込むのは苦しい作業ですが、自分で歌を詠み他の人の歌を味はふうちに、その五七五七七の言葉が詠み手の心の動きそのままのうねりとなって伝はってくる、さういふ経験をきっとなさるだらうと思ひます。ところで、「短歌のすすめ」六十八頁にあるやうに、強い感動を表現する場合は自然に「字余り」になる場合があります。しかし「字足らず」は避けなければなりません。短歌の生命と言ふべき五七五七七のリズムが死んでしまふからです。

▼感動の中心を見定め（→一首一文）、それをできるだけ詳しく具体的に表現する（「短歌のすすめ」三十八頁参照）

①楽しいな皆と一緒に美味しいな焼いたとうきび歯ぐきに楊枝　　拓大　呉　祥慶

②元気なき我を励ます先輩の本音の言葉心に残れり

鹿大　前田徹夫

「感動の中心を見定める」とは、自分が何に心を動かされたのか、そのポイントをはっきりと見極めることです。短歌は三十一文字しかありませんが、感動の中心が的確な言葉で端的に表現されますと絶大な表現力を発揮します。①の歌の場合、「楽しい」「美味しい」といふ二つの中心がありますが、どちらか一方を中心に表現する方がよいのです。「友達と一緒にとうきびを食べてとても楽しかった」といふ歌にすると、「その時食べたとうきびもうまかっただらうな」と思ふし、「友達と一緒に食べたとうきびが美味しかった」と詠むと、「友達と一緒に食べてさぞ楽しかっただらうな」とわかります。ですから一方は不必要なのです。このやうにして中心を絞り込むことで、何よりも感動の表現に必要な言葉を一つでも多く盛り込むことができ、感動をより的確に表現できるやうになるのです。さうすると「歯ぐきに楊枝」といふやうな言葉の入る余地は無くなります。

②を読みますと、前田君は先輩の一生懸命に語るその表情・言葉の調子が強く印象に残ってゐるやうです。「本音の言葉」の内容をもっと具体的に詠むと、前田君の受けた印象がもっと強く伝はる思ひます。一首では表現し切れない場合は、連作といふ方法がありますが、これは後に触れることにします。「感動の中心を見定める」といふことに関して、昨年私が一緒

に勉強させていただいた班での短歌相互批評の例を参考にしながら、もう少し述べたいと思ひます。

③火口より白煙を出す中岳に友と歩きて登りけるなり　九大　花田芳夫
　↓○にぎやかにたはむれごとを言ひ合ひて笑ひつつ登る山道楽し
　レクレーションの折、バスの中より

④草千里馬に乗りたる幼子をささへし父の様胸せまる　大分大　佐藤健之
　↓○不安気に馬に乗る子にその父のよりそふ姿のほほゑましきかな
　○我もまた我が父親と馬に乗りし幼き日々の思ひ出さるる

③の歌は、気持ちは大体分かるが今一つぴんと来ないといふことで、班員からいろいろと質問が出てをりました。すると「友と一緒にいろんな話をして、それがとても楽しかった」といふことが一番詠みたかったとのことでした。「それなら『火口より白煙を出す中岳』といふ言葉は要らないのではないか」といふ班員の指摘で、花田君は一生懸命に考へてをりましたが、その結果右のやうな歌になったのです。楽しい様子が最初の歌に比べて生き生きと伝はってくるのではないでせうか。④の歌は、「『胸迫る』といふ言葉は、その上の言葉に較べ

て重すぎるために浮いてしまってゐるやうに思ふ。」「それは『幼子をささへし父』といふ姿に何か特別の思ひがあるのではないか。それを語ってほしい。」などの指摘があり、班員のアドバイスをもとに佐藤君は右のように詠み直しました。漠然としか感じられなかった佐藤君の感動が、まるで霧が晴れたやうに明確になったと思ひます。

以上のやうに、感動の中心のよく捉へられた歌はその感動が生き生きと伝はるやうになります。そして、感動の中心を見定めていきますと、たくさんの言葉が自然に湧いてくるものです。すると一首で表現できない場合がある。さういふ場合は感動の中心毎に一首づつ歌を分けて詠むとよいのです。それを連作と言ひます。④の歌はさういふ理由で二首になったのです。

連作といふことについて次に私の歌を見てください。この合宿の最後には全体感想自由発表といふ時間がありますが、昨年対馬の白井先生が登壇されました。私は先生のお話しを聞いて非常に感銘を受け、日頃はこんなに沢山歌はできないのですが、次々に歌が生まれてきたのです。

全体感想自由発表の折、白井傳先生のお話しをお聞きして（連作）　発表者

⑬国境の島に住みまし奉公の深き覚悟に生きます師はも（「も」→感動を表す言葉）

⑭過ぎし日のいくさに着けし軍服の繕ひ今も続けらるとふ（「とふ」→と言ふことだ）
⑮いつにても履かるるやうにと軍靴には油を塗りて手入れしたまふと（「と」→同右）
⑯壇上に示さるる軍靴は新しきものの如くに輝きて見ゆ
⑰この外にさらに水筒飯盒も日々手入れして行李の中に
⑱ひとたびも緩急あらばこの軍靴履きて奉ずと師は語らるる
⑲年召され物腰やはく小柄なる師の胸内に満つる覚悟よ
⑳話さるる師のお姿の尊さに思はず涙す胸熱くなりて

⑬は全体的な印象です。「奉公の深き覚悟」とは抽象的ですので、以下にそれを先生のお話しのどこから感じたか具体的に詠んでゐます。⑭⑮⑰⑱は印象深かった先生の言葉を歌にし、⑯は、先生が壇上で軍靴を掲げて見せてくださった、その場面が強い印象となって残り、その場面をそのまま詠みました。⑲はお話しを聞いての感想、⑳は「思はず涙した」といふ事実を詠んでゐます。

昨晩、小野先生の「教育体験を語る」といふ御講話がありましたが、皆さんも強く心を動かされたのではないでしょうか。講義室から宿泊棟に戻る途中、口々に「感動した」「素晴らしいお話しだった」といふ声を聞きました。今その御講話を思ひ出しますと、いろんな場面

が浮かんできませんか。それをぜひ言葉にしていただきたい、歌に詠み上げていただきたいと思って私の拙い短歌を紹介致しました。

短歌の調べについて

ゑみたたへ「もう春ですよ」と喜びを体いっぱい歌ふ吾子はも

坂東一男（アサヒビール勤務）

合宿の最初の講義で、坂東先生が学生時代この合宿教室に参加して学んだことを社会人として生きる指針とされ、会社や家庭において明るくそして積極的に毎日を送ってをられるお姿に接し強い魅力を感じました。その講義の中で紹介された歌は印象に残る歌がいくつもありましたが、右の歌を読みますと、先生の小さいお子さんが楽しさうに歌ってゐる様子がまざまざと浮かび、短歌の威力に改めて驚かされます。何とも言へず生き生きとしたリズムが伝はってこないでせうか。それが、短歌の調べと言はれるものです。私たちを魅きつける先生のお人柄は、この短歌に表れたリズムそのものと言へると思ひます。

阿蘇登山のバスの車中にて（連作）

白井傳（長崎県対馬在住）

三号車バスのマイクをたにぎりて広瀬中佐のおんどとりけり
おほあそのみどりひろぬにかぜわたり広瀬中佐のうたとどろきぬ
むねをはりこゑはりあげてうたひけり一兵のひはろかしのびて
みはるかすくさせんりをゆくおほのはらうしがくさはむのどかなりけり
うしとともわがのるバスもゆきゆけるくさせんりみちうれしかりけり
おほいなるひのやまあそにもゆるいのちひそともひつつここにきりけり
わがむねのもゆるおもひとうたひける平野次郎のおもほゆるかな

先程御紹介致しました対馬の白井傳先生の、昨年の合宿でのお歌です。どうか虚心に、声に出して何度か読んでみてください。そしてこの連作全体に流れる響きを心に感じ取っていただきたい。張りつめた中にも躍動してやまない調べが感じられませんか。既に小学校校長を退職されて久しい先生ですが、この伸びやかな緊張した調べが先生の御精神そのものなのです。

短歌にはこのやうに単なる表面的意味ではない「調べ」とか「リズム」とか言はれるもの

があります。そしてそれこそが、詠み手の心のうねりを直接我々の心に伝へるものです。それには五七五七七という形式が実に重要な働きをしてゐるので、この短歌の形式は日本人の心の表現手段として本当に素晴らしい形式と言へるのです。

この会場に皆さんより一足早く参りまして、この時間の始まるのを緊張して待ってをりましたら、自然教室の職員の方が「今日はとてもいい天気になりました。公園からの眺めもとてもいいですよ。」とおっしゃいました。次のレクレーションの時間、この素晴らしい短歌の形式に、胸の内の思ひをどうか思ふ存分表現していただきたいと思ひます。

御清聴どうもありがたう御座いました。

創作短歌全体批評

山口県立高森高校教諭
宝　辺　矢太郎

自然の息吹き

はじめに

批評と添削

をはりに

はじめに

短歌を作ってみようと百回聞いても作らなければ意味は無いのです。この困難な行から逃げることなく、兎も角も作ってみたといふことが尊いのでして、先づは感謝申し上げなければなりません。

ところで、自分の思ったことを三十一文字に託してみようと言っても、これが本当に難しい。思ふやうな表現が出来ない。私も短歌を作ることをこの合宿で教はって二十年になりますが、何十年作ってゐる人も、いつでも初心の苦労をしてゐるのです。

自分の気持に沿ふ最も適切な言葉を探し、また最も適切なしらべになるやうに何度も何度も指を折りつゝ呟く。さうして自分なりにまあまあこんな所かなといふ作品が出来る訳ですが、実はそれでおしまひではない。本当の意味で歌はまだ息をしてゐないのです。人に見て貰って初めて歌としてのいのちが吹き込まれると言っていい。抑々検証を経ない生の短歌のままで、自分の気持がそのまま人に伝はると、先づ思はない方がよろしいのです。正しいと思ってゐる言葉遣ひが間違ってゐるかもしれない。一人よがりでとんでもない誤解を与へる表現があるかもしれない。何が言ひたいのかよく分らないかもしれない。其処に自分の歌を

発表して、人の意見を聴いてみることが必要になってくるのです。自分で作って人の意見を聴く、この一連の過程が短歌創作の内容であり、言葉の修練であり、こころの練磨に繋がってゆく訳です。

それではこれから班別でお互ひに批評し合ふ上で留意すべきことを二点申し上げます。先づ相手の気持になること。相手の気持をよく理解することです。私どもの歌は大体下手であると認識することは大事なのですが、下手だからと言ってつまらない歌は無いのです。いくらよんでもよく分らない。そのときでも相手の身になって、どうしてかういふ表現をしてゐるのか、何が言ひたいのか、言ひたいことが何かあるのか、といふ風に相手の気持を推察しつゝその表現を検討していく訳です。そのとき、作った人はその時の情況を包み隠さず、「かういふつもりでこの言葉を選んだんだ」と説明して下さい。また、その場にゐる人は必ずその人の気持を推し測る質問なりを言ってあげることです。

次に正確な表現に直すこと。字の間違ひや文法的な語法の誤りは辞書を引けば大体直りますが、肝腎要の表現については、それが、をかしい、相応しくないからと言って、無下に解体して作り替へるといふ風にしないで、出来るだけ相手の気持を尊重しつゝ、少し表現を変へることから皆で直し合ってゆけばよいと思ひます。

批評と添削

この大部になる歌稿に全部目を通すのもかなり疲れるものですが、まことに楽しく読ませて戴きました。実際の歌作はこの数倍になりませうから大した量です。導入講義で那須三元先生が短歌を作るよろこびを話して下さいましたが楽しかったですね。たった一時間の御話を聴いただけで、それでは私も一つ、と皆さん作れるものなのです。

とは言ふものの次のやうな悩みを抱へた方もをられ、多くの人の気持を代弁してゐるかの如くなので、初めに御紹介しませう。

短歌でも作ってみろとすすめられ悩んだ末にこんな歌

短歌など興味もないのに作らされあげくの果てには批判を受ける

初めの歌。「でも」と言はれると一寸心外なのですが随分抵抗があるやうです。しかし「悩んだ」といふ経験には敬意を表したいと思ひます。次の方の歌にある「あげくの果てには」には絶望的な響きが窺へますが、「興味」のある無しではなく、私共が何故短歌を作ってみることをお勧めするのか、歌を詠む意味合ひなり姿勢なりを今一度考へて戴けませんか。

○

敷島の道は楽しとのたまひし坂東氏のうらやましきかな

我が愛す三井先生の歌二首を声ろうたけく氏は詠み給ふ

嬉し気に酒の話をする氏は酒をこよなく愛し給ふか

常日頃短歌を作る生活を成し得る氏は生き生きと見ゆ

講師の坂東一男さんをお呼びする表現に作者は苦慮されてゐるやうです。〝師の君は〟とい

ふ気持とは少し違ふし、〝先輩〟と言っても年が離れ過ぎてゐるし、〝大人（うし）〟としても場合によれば〝師の君〟以上の語感があります。難しいところです。それにしても坂東氏（うじ）にはギクッとしました。少し直します。一首目。「のたまひし」は「語らるる」の方が良いでせう。二首目。「ろうたけく」は上品なといふ意味になり、あのときの詠まれた情景にそぐひませんので、「らうらうと」とすればどうですか。他には特に申し上げることも無い実に堂々たる素晴らしい連作短歌だと思ひます。

○

言葉にはならぬ思ひをしぼり出し語る友の姿尊し

一読、歌の坐りが一寸良くないのは、「語る友の」が字足らずになってゐるからです。しかしかういふ歌は必ず姿が良くなります。と言ふのは一生懸命詠んでゐるからです。かういふ事が歌ひたいのだらうといふ事が良く分るからです。さて、「言葉にはならぬ」と、友だち御本人の気持なら分るのですが、端の者がさう断言してよろしいのか少し疑問が残ります。また「思ひをしぼり出し」とは言はないでせう。しぼり出すやうにと言ふ比喩的な表現は考へられますが、かと言って「とつとつ」でも無ささうだ。次の様に直してみましたので参考にして下さい。

言の葉をしぼり出すごとその思ひ語れる友の姿尊し

○

仮面取り心開いて語り合ふ本音で話す班別討論

「仮面取り」にはドキッとしますが、続く「心開いて」「本音で話す」と三重の意味の重複は考へるべきです。そしてもっと具体的に詠んでほしいのです。どんな様子で語り合ひがなされたのでせう。また仮名遣ひも文語的言ひ回しもこの際一緒に勉強してゆきませう。歴史的仮名遣ひや文語的表現にはやはり正しい日本語の骨格が保たれてゐますので、それに沿ふことが自分の気持を正し、感受性を鍛へることにも繋がっていきます。短歌も志です。

班別討論にて

心開き友と語れば語るままに熱き思ひの胸ぬちに充つ

○

七沢の学び舎目指し集ひたる学生如何に求道せしめん

そのまま読めば、集まった学生達にどのやうにして正しい道を求めさせようか、となり御

本人が教祖になって了ふ。自分で求道しに来た訳ですから、「学生」といふ傍観者的な表現は取って次の様にしてみました。

七沢の学び舎に共に集ひたる友らといかに道を求めん

しかし「道を求めん」といふ言葉が実感の伴はない観念になって了ふため、作者の高揚感が出ません。どのやうなことを期待して学ばうとしてゐるのか、よく皆さんと話し合ひ、もっと違った表現が出来ないか、研究してみて下さい。

○

青空や私の心上天気草葉の群れもさわさわ揺れる

上の句の俳句的テンポが瑕なのです。短歌は一首一文であれ、といふのは歌にいのちが吹き込まれるための必須の要件なのです。出来るだけひと続きの文章になるやうに語調を整へるのです。下の句は具体的な情景を捉へてゐて良いのですが、如何せん上の句とのアンバランスが、折角の爽快感を損ねて了ってゐるのです。少し直してみました。

空はれてそよふく風にさわさわと草葉はゆれて快きなり

同じやうな情景でせうか。別の班の方にかういふ歌があります。

やはらかな日の光うけさやさやと風にゆらるる木々の緑葉

「私の心上天気」と言はなくても分るでせう。言はない方がいいのです。そして一首一文になってゐますね。また「さわさわ」「さやさや」と、お二人の使ってゐる擬声語にも微妙な語感の違ひがありますから注意して下さい。「さわさわ」には少し背の高い草葉が連想されます。

○

青空と緑の木々にはさまれてとけてなくなる自分の色が

気分は好意的にみれば分らぬでもありません。天地の自然にとり囲まれた忘我の境地に作者はあるやうです。ただ、青空と緑の木々にはさまれた作者の位置が不可解で、このやうに上と下にはさまれるといふ捉へ方が理屈っぽくなるのです。「とけてなくなる自分の色」とい

ふ少し気の利いたやうな言葉が曲物で、この言葉で作者の感情が非常に分りにくくなってゐるのです。概念語は極力排除していきませう。短歌は〝感情が本〟です。一応次の様に直してみましたが、余り良い歌ではないので、班の人の力を結集して、感情を表現する努力をして下さい。

緑こき木立ちの間より果てしなき青空とほくながめやるかな

○

坂東一男先生の講義をお聞きして
古の人も詠み来し酒の和歌喜びたたへ読みます師はも
心から溢るる喜び語らるる講師の面輪晴れやかにして

かういふ歌が私共が言ふところの良い歌の基準になってゐると理解して下さって結構です。決して説明に陥ってなく、一首一文で語調も整ってをり、日本語の分る人ならみんな作者と共感を共にしてくれるのではないですか。作者の感動が真直ぐに伝はって参ります。

○

再会は不意に来たりて驚かす我年月の流るるを知る

これも一首二文になってゐます。上の句の主語は「再開」、一寸気の利いた風の表現ですが、このため語調に無理が生じました。下の句の主語は「我」で、時の経つ感慨を催してゐます。「驚かす」といふのは一種の擬人法で、擬人法は使ってはいけない訳では無いのですが、この場合はこのため切実さが滲み出て参りません。この〝驚かす〟の中身がこの歌の中身でせう。勿論よろこびの中身とは思ひます。しかし悪意にとれば、その友に昔借金でもしてゐれば〝ギクッ〟と驚く訳でせう。要するに説明を要するのはよろしくなく、歌としてもう一度考へ直さねばなりません。少し直してみます。

なつかしき君を見つけて驚きぬ幾年をへてここに会ふとは

面白いことに再会の喜びを詠んだ別の方の歌がありますので読んでみませう。

簑田誠一君（前任校の生徒）と会ふ

仮名簿めくりてゆけばなつかしき君の名前を見つけ出だしぬ

故郷をはるかへだてしこの地にて君と会ふとは何の縁か

説明を要しない、具体的に詠むとはかういふことなのです。参考にして下さい。

○

三日目の午後の講義を終え大木君に家より電話
家からの急なしらせにおどろきて顔色変えて君は出でけり
知らせをきき今すぐ帰るとのことを班友（とも）らに告げて部屋を出る君

非常に急迫した緊張した場面に出くはすと私達はみんな心が活き活きと活動してくるのですね。瞬間の情景に動く率直な感情が尊いのだと改めて思はしめられます。この感情は時が移って詠むともう駄目なのです。心が冷めてくるため思ひが言葉になり難く、思ひを残したいといふ情熱が希薄になるからです。長く想へば情は鈍ります。

さて、この歌に若干の語法の訂正と語順の倒置を施すと、随分姿が良くなりますので、実感して下さい。

大木君に家より電話のありて
家よりの急なる知らせにおどろきて君は出でけり顔色変へて
知らせをきき今すぐ帰ると我らに告げ急ぎ荷物をまとめ始めぬ

○

班討にて

思ふまま話せずにただ沈黙すひぐらしの声さらに高まり

三句切れでこれも一首二文ですが、作者の経験には誰もが共感するところでせうから、割合直し易く、ひと続きの文章のやうに、と心懸けると例へば次の様になります。また詞書も短歌と一体です。略語はいけませんので注意して下さい。

班別討論にて

思ふまま話せずにただ黙(もだ)しをればひぐらしの声高く聞こえ来

特に言ふべきことの無い自分ではあるが、何かしら心に浮かぶことでも、つまらない意見と思ひつゝ言葉に出して言はうとしてみるがそれもままならない、ああ早く誰か話してくれないかなあ、とふと眼を外に遣れば、ひぐらしの声が殊更に高く聞こえて来た、といふ光景も眼に浮かびます。いい題材だと思ひます。

○

すなほなる友どちの言葉ききながらいつしか心ひろがりゆくかも

一箇所文語的言ひ回しに直すだけで歌がピリッと締まります。それにしても「いつしか心」が「ひろがりゆくかも」とは何といふ素晴らしい経験をなさったのかと感動しました。この合宿教室が目指してゐるものを一言で言って貰ったやうです。自分の知識の虜になってゐる人には「心がひろがる」悦びはなかなか分らないと思ふ。自分といふこだはりを離れたとき、何を見ても面白い。このこだはりから離れるにはどうしても「すなほなる」友どちの声、言葉が必要なのです。

すなほなる友だちの言葉ききをればいつしか心ひろがりゆくかも

○

学びには遅くのときはあらざると六十五歳のわれも集ひ来

「とき」は「疾き」のことですが、ここでは「はやき」でいいと思ひます。また「集ひ来」と現在形で止めるよりも「来にけり」としたらどうでせう。下の句の打ちつけに直叙される

言ひ回しが印象ぶかい一首でした。

さて、この合宿にはアルバイトの高校生諸君が四人参加してをり、裏方の仕事を務めて下さいました。中でもこの大部になる歌稿は彼らの深夜に及ぶ精力的な集中作業の御蔭で出来た、まことに貴い一巻であります。この高校生諸君もまた歌の道に参加してくれてゐるのです。まことに有難いことです。その内の一首を御紹介します。

事務所にて仕事の合間にいただいた茶のあたたかさに心が和む
こころの籠った一杯のお茶がこんなに美味しいものかと私までそのお茶を戴いたやうな気分になります。

をはりに

この歌稿には何十年と歌の道を踏まれ、私共も導かれ仰いで来た方々が大勢をられますが、最後に御三方のお歌を拝誦させて戴きたいと思ひます。

加納祐五

合宿地に向ふ途上にて

けふよりは夏合宿かこころはづみ七沢さして車馳せゆく
さねさしさがみの小野と詠みましし小野の里べかこのゆく道は
燃ゆる日の中にたたしし古事をおもひてあれば山近付きぬ
雲たれて雨もよひする空の下にもだししづまる山並みあはれ
見れどあかぬみどり列山（つらやま）たつ霧の流れやまずて見えかくれする
うましこのやまふところによき友とともに語らばこころたるべし

幾度も拝誦してをりますと、限り無い余韻に我が心足りる思ひです。四首目五首目を拝誦してゐて、いつか小柳陽太郎先生が、田子の浦ゆ、で始まる有名な山部赤人の歌に対して、雪をかぶった富士の姿のやうな歌を詠むのは至難のこと、と仰言ったことが思ひ出されました。あはれな山の姿のやうな、また流れてゐる霧の姿のやうなお歌と申したらいいのでせうか。そんなことを感じました。

白井　傳

つゆくさのうすむらさきにさきてありちさきいのちはおのもおのもに
あをやまをいくまがりしてひろのはらつゆひかりをりくさぬすがしも
あせふけばすずかぜわたるもりのさとしばくさはらにしばしいこへる
おにぎりにのりをしまいてたべにけりひるげはたのしわかきともらと

二首目の五句目は「くさのすがしも」の意。やまとことばのしらべの美しさと奥行きは何度も拝誦して味はふ他ないもので、例へば三首目にしても私達は殆ど同じ経験を散策でしてゐるのですが、かういふお歌を詠みますと、自然を内心に味はふといふことがどんなに修練を要するかを教へられます。薄っぺらな経験を経験と思ってゐる自分に気付かされます。

廣瀬　誠

合宿地にて背後の山を望む

神さぶる七沢の山いただきに群れ立つ樹々を雲かすめゆく
頂めがけそそり傾きうち茂る神さぶる樹々見れどあかぬかも
日の本のいのち護らむとつどふわれらを山の神たち見そなはしたまへ

そがひなる阿夫利の山は千早振る神の御山とひたながめつつ
七沢山夕雲かかり杉木立とよもして鳴くひぐらしの声

四首目の「そがひなる」は、後の方にあるの意。この連作を拝誦して打たれる魔力のやうな力を思ふとき、「ことそぎて（事殺ぎて）力ある」といふ言葉が思ひ出されます。余分なものが一切殺ぎ取られ、簡潔で素朴な言葉のシラベにこそ、まことの力は籠る、といふ意味かと思ひます。繰返し拝誦するとき、はかり知れぬ深淵の世界に誘はれるやうな気が致します。

○

さて、これから班別でお互ひの短歌を批評し合ふ時間が持たれますが、今迄余り発言されなかった方も、折角この合宿に来て言葉の修練をしてゐるのですから、そしてこんなに楽しく心和むひとときは無いのですから、大いに発言し、〝ああこころたれり〟と言ひたいものです。

相手の気持にならうと努力していくと、いつしか自分といふこだはりを離れます。自分のことを考へないでひたすら相手のことを考へてゐた自分を発見するでせう。そしてこんな自分の歌にもみんなが没頭してくれてゐると思ふとき、どんなに広やかな世界に包まれてゐるかを実感されるでせう。

一年のあゆみ

亜細亜大学経営学部四年
佐藤順一郎

講義の後に研修室に向かふ

平成二年（一九九〇年）八月二日未明、イラク軍が突如、隣国クウェートに武力侵攻を開始した。イラクのクウェート占領、クウェート在駐西側諸国人の拘禁といふ暴挙に対し、国連安全保障理事会は同日直ちにイラクを非難、クウェートからの撤退要求決議を採択した。国連安保理はさらに十一月二十九日、対イラク「武力容認」決議を採択、撤退期限を明年一月十五日とした。しかしイラク国民議会はフセイン大統領の主張する「妥協せず」との政策のもと、十二の国連決議を無視し続けた。撤退期限後の一月十七日、遂に米軍主導の連合軍（俗に言ふ多国籍軍）は、イラク、クウェートへの攻撃を開始。一ケ月間の戦闘の後、二月二十六日、連合軍はクウェート市に侵攻、同市をイラクの手から解放した。所謂湾岸危機・戦争である。

石油の約七割を中東に依存し、人質として在クウェート日本人を拘禁されもした我が国は、湾岸危機の正に当事者であった。政府では「中東貢献策」なるものが論議され、またマスコミでもそれらについて様々な議論が展開された。その中で医官や輸送・通信支援部隊としての自衛隊派遣の是非が問はれた。しかしそれらについて国内世論は「戦争絶対反対」「人命第一」の感情論からくる所謂「一国平和主義」の論調が支配的であった。これは、自分達だけは危険なことに関はりたくないといふことを「平和」の名を借りて語ってゐるだけではないか。そのあまり、クウェートで起きてゐる現実を直視せず、我国はどうあるべきかといふ判

断が出来なくなってしまったことは、私達日本人が戦後の長い平和の中で安穏としてゐた代償であらう。当事者でありながら、全くその意識のないことを世界中に露呈してしまった結果、湾岸戦争後に日本は、友好国アメリカをはじめ、世界中の国々に対して信頼を失墜してしまったのである。

中東をめぐる報道の中で、大変印象深いものがあった。人質のイギリス人少年がフセイン大統領からの握手を直立不動で拒んだシーンである。「不正には断じて屈しない」との、この毅然たる態度には誰もが心を打たれたのではないか。これに対し、日本人の人質が解放されたときは、フセイン大統領に折り鶴を贈ったといふ。あたかも、命を助けてもらったお礼を言ふが如き行ひであった。人質をとるといふ非道な行動に出たのは、他ならぬフセイン大統領である。その非道に対する彼我の違ひが如実に現れてゐた。

確かに命は大切である。助かって喜ぶのも分かる。しかし自分達さへ助かれば良いのか。アメリカはじめ、各国はこのイギリス人少年が見せた精神と同じ思ひをもってイラクに対してゐたのである。自衛隊海外派遣問題の論議の中にも見られたが、私達日本人にとって、守るべきものは「己れの命」だけになってしまってはゐないか。「自分さへ良ければ」といふ精神が湾岸危機・戦争への対応を論ずる中で多々みられたことには、同じ日本人として「これで良いのか」との疑問を持たざるを得なかった。そしてそのことが世界の信頼を失ふ原因と

なったことに、危機感を覚えたのである。

かうした中「湾岸危機」をテーマとした勉強会が行はれた。国連加盟国の多くが国連決議に基づいて、軍隊を動員し、クウェートの平和を取り戻さうと一致協力してゐる。我が日本は当事者意識のない今の状態で本当に良いのか、それが私達の問題意識であった。さうして湾岸危機に対して日本のあり方を考へてゆく中で、あらためて国家の問題が意識され、「日の丸・君が代」について考へる勉強会も併はせて行はれたのである。さらに短歌の会が行はれ、互ひの歌に込められた思ひに心を働かせてゆく勉強がなされた。湾岸危機・戦争についても、日の丸・君が代についても、この「心を一生懸命働かせる」ことを抜きにしては、ただ事実関係を追ふだけになる。心を働かせる、つまり身のまはりの問題を自分自身の問題として考へて行かうとの努力であった。

そしてこれらの活動の集大成として、春季合宿の企画に入っていった。内容を検討していく中で「湾岸戦争が行はれてゐる現状にあって、自分は日々安穏と生活してゐる。身のまはりで起こってゐる様々な問題を自分のものとしてとらへ、考へてゆけるやうになりたい」との声が聞かれた。そこで、昭和十五年当時の、大東亜戦争直前といふ状況の中、さうした状況と文学者である自分自身とをしっかりと見据ゑた、小林秀雄氏の「文學と自分」の輪読を中心に行はれることに決定された。春季合宿は平成三年三月十六日から十九日までの三泊四

日間、神奈川県のアサヒビール葉山寮にて開催された。以下にその内容を記述する。

春季合宿日程表

	3月16日(月)	3月17日(火)	3月18日(水)	3月19日(木)
7:00		起床	起床	起床
		朝のつどひ	朝のつどひ	朝のつどひ
8:00		朝食	朝食	朝食
9:00		輪読	輪読	感想発表及び感想文執筆短歌詠草
				閉会式
10:00				退所
11:00				
12:00		昼食	昼食	
1:00	入所	国武忠彦先生御講義〈質疑応答〉	レクリエーション	
2:00	開会式			
	自己紹介			
3:00	輪読導入発表（茅野兄）			
	(移動)			
4:00				
5:00	輪読	輪読	短歌詠草	
6:00				
7:00	夕食 入浴	夕食 入浴	夕食 入浴	
8:00				
9:00	輪読	輪読	短歌相互批評	
10:00	就寝	就寝	夜のつどひ	

開会式、所懐表明の後、亜細亜大学経済学部三年茅野輝章君による輪読導入発表が行はれ、それを受けて、初日の夜から「文學と自分」の輪読に入った。「文學と自分」の中に次の文章がある。

「一文學者としては飽くまでも文學は平和の仕事である事を信じてゐる。一方時到れば喜んで一兵卒として戰ふ。これが僕達の置かれてゐる現實の状態であります」

この文章には、自分の置かれてゐる切迫した立場をしっかりと見据ゑた、氏の緊張感が込められてゐる。小林氏は何故このやうに言へるのか。「文學と自分」の後半に

「（文學者の覺悟とは）一方から言へば自然や歴史を心を虚しくして受容する覺悟とも言へるのである」

と言ふ文章がある。ここで言ふ「自然」とは自分を取りまいてゐる状況と言ひかへても良い。氏にとって、文学者であることは勿論、大東亜戦争直前と言ふ切迫した状況も「自然」であったのだらう。さういふ状況を自分の問題として引き受けようとする覚悟の中から生まれた

文章であると思ふ。私達も「心を虚しくして自然を受け入れ」れば、今の身のまはりの姿が見えてくるのではないか。そしてその中から、湾岸戦争などの問題を自分の問題として考へてゆく覚悟が生まれてくるのではないか。「心を虚しくして自然を受け入れる」といふ言葉は、特に参加者の心に残った言葉であった。かうして輪読は四日間続けられた。

二日目の午後には、学生時代から小林氏を愛読してをられる国武忠彦先生（神奈川県立金井高校教頭）に御講義をして頂いた。先生はまづ、何故マルキシズム全盛の時代に小林氏がマルクスの嘘を喝破出来たか、といふところに触れられ「アインシュタインの登場により物理学上の大革命がなされ、さらに量子力学によってアインシュタインを越える発見が次々となされていった。小林氏はベルクソンを通して現代物理学を勉強してをり、マルキシズムが踏まへてゐるのはニュートン的な古典の科学にすぎず、科学的理論としてのマルキシズムの虚妄を暴く自信があった」と話され「ベルクソンを読むと小林秀雄は大変親しいものになる」と言はれた。次にベルクソンの文章「構成的部分と部分的表現」の中から

「パリを訪れたその画家は、パリで描いたすべてのスケッチの下に心覚えとして、たぶん『パリ』という文字を記しておくだろう。画家はパリを実際に見たのだから、全体について得た直観の助けを借りてスケッチを全体へ移し、並置し、組み合わせることが出来るであろ

うが、しかしそれと逆の操作を行なう方法はまったくない。すなわち、どれほど精確なスケッチを無数に集め、さらにそれらが組み合わせられねばならないスケッチであることを指示する『パリ』という言葉がつけてあっても、パリを見ていなければ、得たこともない直観へ立ちもどってパリがどのようなものであるかという印象をもつことは不可能である。この場合取り扱われているものが真実の部分ではなくて、単なる符牒にすぎないからである」

を引用され、率直に対象に飛びこんで内側から明かすといふことがベルクソンの認識論であり、小林氏はこの認識論の大切さを、手をかへ品をかへ説いてゐることを話された。さらに小林氏の「様々なる意匠」から

「中天にかゝった満月は五寸に見える。理論はこの外観の虚偽を明かすが、五寸に見えるといふ現象自身は何等の錯誤も含んではゐない。人は目覺めて夢の愚を笑ふ、だが夢は夢の獨特の影像をもって眞實だ」

といふ文章を引用され「科学の測定によっても物体の実体をつかむことが出来なかったのなら、例へば月を肉眼でながめる不測な観察も望遠鏡で観測したものも真理ではないか。何故

自分の切実な体験に自信を持たないのだ、と氏は言ひたいのだ」と語られ、御講義を終へられた。

この後、三日目の夜には短歌相互批評が行はれ、お互ひの歌の表現を直すのみにとどまらず、その作歌姿勢にまで話が及び、熱のこもった相互批評が行はれた。最終日には感想発表が行はれ、春からの新入生勧誘の決意を固めて合宿地をあとにした。

四月に入り、私達は気分新たに、共に学び合ふ友を求めて勧誘活動を行っていった。真剣に考へ、つき合ってゆかうとの我々の思ひは、楽しさをサークル活動に求めようとする現代の風潮にそぐはず、勧誘活動は困難であった。しかしその中にも少人数ではあるが、新しい友をむかへ、各大学で輪読、合宿と熱のこもった研鑽がつまれた。今年の夏季合宿教室は、初めて九州よりところをかへて関東で行はれる。主催者の方々の意気込みたるや並々ならぬものがあり、学生、OB一体となって研鑽、勧誘活動に励んだ。そして準備万全の体制で合宿教室をむかへたのである。

〈地方合宿〉

主催	年月日	場所	参加大学
東京信和会	平成2年11月1日～3日	神奈川　湘南「湘南ユースホステル」	亜大、早大、中大、千葉大
中大読書尚友会	平成2年12月1日～2日	千葉　内房海岸「川原民宿」	中大、千葉大
早大積誠会	平成2年12月20日～21日	山梨　三富村「治郎兵衛荘」	早大
中大読書尚友会	平成3年2月2日～3日	神奈川　箱根「笛塚荘」	中大
早大積誠会	平成3年3月1日～3日	東京　御嶽「うつぼや荘」	早大
東京信和会	平成3年3月16日～19日	神奈川　葉山「アサヒビール葉山寮」	亜大、早大、中大、千葉大、東大
東京信和会	平成3年4月27日～26日	神奈川　厚木「七沢自然教室」	亜大、早大、中大、千葉大
早大積誠会	平成3年5月25日～26日	千葉　銚子「民宿文治」	早大
亜大日本文化研究会	平成3年6月15日～16日	東京　渋谷「渋谷青少年会館」	亜大

合宿教室のあらまし

千葉大学工学部四年
中　富　　仁

合宿参加者記念撮影

第三十六回全国学生青年合宿教室は、平成三年八月七日から十一日に至る四泊五日間、神奈川県厚木市立七沢自然教室にて開催された。合宿地は、丹沢連山の東麓の緑濃き木々に囲まれた、蜩（ひぐらし）の声の繁き土地であった。合宿の前準備は、在京ＯＢを中心に東京の正大寮に於いて進められ、合宿の二日前からは、国民文化研究会々員、並びにリーダー学生数名が一足先に合宿の地に集まり、最後の準備に取り掛かった。分担された作業は着々と進められていく。講義場の入り口横には、「さしのぼる朝日のごとくさはやかにもたまほしきはこころなりけり」といふ明治天皇の御製と、管理棟には、「たゆまずもすすむがををし路をゆく牛の歩みのおそくはあれども」といふ昭和天皇の御製が、それぞれ墨で大書された幟にして掲げられた。また、管理棟の石段を上がって来るところには、「友よ！とよべば友は来りぬ」と書かれた横断幕が掲げられた。夕刻には作業を終へ、合宿教室開催を待つのみとなった。

合宿教室の参加者の内訳は次の通りであった。

（学生班　四十八大学）

拓殖29、早稲田大15、亜細亜大10、防衛大6、九州大5、福岡大5、金沢工業大3、九州女子大3、湘北短大3、東京大2、金沢大2、長崎大2、中村学園大2、北海道工業大1、千葉大1、東京水産大1、帝京大1、東京農業大1、立正大1、玉川大1、明治大1、中央

大1、日本大1、関東学院大1、実践女子大1、武蔵野美術大短期1、高千穂商科大1、富山大1、福井工業大1、富山医科薬科大1、金沢経済大1、京都産業大1、京都橘女子大1、帝京平成短大1、大阪電気通信大1、大阪経済法科大1、岡山商科大1、岡山理科大1、ノートルダム清心女子大1、広島大1、国立呉病院付属リハビリテーション学院1、山口大1、山口県立衛生看護学院1、北九州大1、九州女子短大1、佐賀大1、熊本大1、鹿児島大1

計百二十三名（うち女子三十二名）

（社会人・教員班）　会社員、公務員、教員など

計二十九名

（招聘講師）　一名

（来賓）　五名

（国民文化研究会）　七十九名

（事務局）　六名

（写真）　一名

総計　二百四十四名

参加者は、合宿申込書のアンケートを基に七名乃至八名を単位とする班に編成され、事前合宿参加学生及び国民文化研究会々員が班長となった。男子学生班は十五箇班、女子学生班

は五箇班、社会人班は三箇班に分けられた。

以下、合宿教室の流れを記すが、各講師の講義内容については印象を記すに止めた。講義内容の詳細は、本書に掲載されてゐるのでそちらをお読み頂きたい。尚、本書に掲載されてゐない挨拶等の内容については、出来るだけ詳しく取り上げた。

第一日（八月七日）

〈開会式〉

午後二時半、緊張した雰囲気の中、参加者は講義場となるプレイホールに参列した。早稲田大学四年の山下拡男君の力強い開会宣言により第三十六回全国学生青年合宿教室は始まった。国歌斉唱の後、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられたすべての祖先の御霊に対し、一分間の黙禱を捧げた。

続いて主催者を代表して、社団法人国民文化研究会理事長、小田村寅二郎先生が登壇され、「この合宿開催につきましては、厚木市長の足立原茂徳さんをはじめ厚木市の方々に一方ならず、また物心両面にわたって大変なご協力をいただきましたことを厚く御礼申し上げます」

と挨拶された後、我々が合宿に向けて整へるべき心組みを話された。先生はまづ、「この合宿では、一人一人が一人の自立した人間として、お互ひに全く平等でお付き合ひ願ひたい」と語られた。そして、「この合宿では、日常の大学生活の中で行ってゐる知識を中心とした勉学だけでは片手落ちになってしまふといふことに気付いて帰って頂きたい」と話され、「相手の喜び、悲しみ等をわからうとし合ふ友達を作っていく力が現代の大学教育に欠けてゐますが、それが人間生活の原点です。どうかこの貴重な機会に、お互ひに眠ってゐる心を

8月10日(土) (第4日)	8月11日(日) (第5日)
(起　床) (洗面・清掃)	(起　床) (洗面・清掃)
朝の集ひ(国旗掲揚と国歌斉唱・体操) 朝　食	朝の集ひ(国旗掲揚と国歌斉唱・体操) 朝　食
(講　義) 山内健生氏	(合宿を顧みて) 上村和男氏 小田村寅二郎先生
(移　動)	参加者による (全体感想自由発表)
(班別討論)	感想文執筆及び 第2回短歌創作
昼　食	(清　掃)
(創作短歌全体批評) 宝辺矢太郎氏	閉　会　式 (このあと昼食)
(移　動)	(解　散)
(班　別 短歌相互批評)	
夕　食 入　浴 散　歩	
(講　話) 長内俊平先生	
(移　動)	
(夜の集ひ)	
就　床	

第三十六回「合宿教室」日程表

	8月7日(水)（第1日）	8月8日(木)（第2日）	8月9日(金)（第3日）
6:30		（起床）（洗面・清掃）	（起床）（洗面・清掃）
7:00		朝の集ひ（国旗掲揚と国歌斉唱・体操） 朝食	朝の集ひ（国旗掲揚と国歌斉唱・体操） 朝食
8:30		（講義） 国武忠彦氏	（短歌創作導入講義） 那須三元氏 （移動）
10:00		（移動）	ハイキング 深林公園 昼食 短歌創作
10:30		（班別討論）	
12:00		昼食	（記念写真撮影） （移動） （講義） 杏林大学教授 田久保忠衛先生
2:00			
2:30	開会式・合宿趣旨説明・諸注意伝達	（班別輪読）	（質疑応答） 田久保忠衛先生 （移動）
3:30	（移動）	（班別討論）	（班別討論）
4:00	（班別自己紹介）	（所感執筆）	
5:00	夕食 入浴 散歩	夕食 入浴 散歩	夕食 入浴 散歩
7:30	（合宿導入講義） 坂東一男氏	（講話） 小野吉宣氏 （移動）	（講話）廣瀬誠先生 慰霊祭説明
8:30	（移動）	（班別討論） （班別輪読）	慰霊祭執行
9:00	（班別討論）		（班別懇談）
10:00	就床	就床	就床

目覚まして、活発に働かせる方法を模索していく努力をして下さい」と語られ、この合宿では、各々が心を働かせながら、鍛へていくことの大切さを訴へかけられた。また、それに対応することとして「合宿教室では、いろいろな講義や講話が中心になってゐますが、班別討論、班別輪読、班別短歌相互批評といった班別の時間帯こそ大切な時間であることを心に留めて下さい」と語られた。その後、来賓を代表して厚木市長足立原茂徳氏が挨拶された。氏は、御自身がこの合宿教室の前身の学生青年合同合宿に学生として参加された体験や御自身の教育体験から「人と人との触れ合ひ、人が人を思ふ。さういふ思ひを通はすことができなくてなんで人となりうるだらうか。私はそのやうに考へて、子供たちが心の交流を出来る教育施設としてこの七沢自然教室を作りました。そして、全国の青年学生諸君がここで合宿を営む日を心待ちにして今日に至りました」と挨拶された。次いで、参加学生を代表して亜細亜大学四年佐藤順一郎君が「この合宿で共に学びあへるといふ不思議な縁を戴いたのでこれを大切に心を働かせながら学んでゆきませう」と呼び掛け、開会式を終了した。

続くオリエンテーションでは、新日本製鉄㈱勤務、今林賢郁合宿運営委員長が登壇され「人生や、社会や、学問について、本気で語り合ひ、単なる知り合ひで終はらない友人を作って下さい」と訴へられ、続いて、合宿細部にわたる注意事項が、神奈川県立津久井高校教諭、

大日方学指揮班長より伝達された。この後、参加者一同は各自の班室へ入り合宿参加の動機や日頃の生活ぶり等を含めた自己紹介を行った。

＜講義＞

合宿導入講義として、アサヒビール飲料㈱勤務、坂東一男先生が、「楽しき哉！敷島の道」と題して話をされた。先生は、「おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも」といふ明治天皇御製や土井晩翠の歌などの人生の支へとなってきた歌や、御自身が折に触れて創られてきた数々の歌を次々と詠まれていった。先生の根幹にあって忘れられない歌として、故三井甲之先生の「ますらをのかなしき命つみかさねつみかさねまもる大和島根を」「心しる友とかたれば心なごみながるるなみだとどめかねつも」の二首を朗々と詠み上げられた後、それぞれの歌に対する思ひを強い調子で語られ、「相手の立場に立ち、その人の心を偲んでゆくのが、敷島の道なのです」と述べられた。

＜班別討論＞

講義を終へると、全参加者は班室に戻り、最初の班別討論の時間に入った。講師の訴へられたかったことはどのやうなことか、各々がどこに感銘を受けたかを中心に討論が進められ

た。初めのうちは、講義の内容を自分の知識で解説したり、講義に対して部分的な誤解から反発する場合もあったやうである。しかし、ここではあらゆることを常に自分の問題として考へる態度が厳しく要求された。しばらく沈黙が続いたが、次第に一人一人が講義の中で自分が心を動かされた言葉は何だったかをじっと考へ始めた。この自分自身への問ひは、自づと友の語る言葉に敏感に反応しようとする心の働きへと広がっていった。班別討論は、講義終了後毎回行はれ、少しづつではあるが、一人一人が心を開いて真剣に語り合ふことの喜びを味はっていったのである。

第二日（八月八日）

合宿参加者は、毎朝六時半に各班室に流れるすがすがしい「日本唱歌」の音楽により目覚める。洗顔と清掃を急いですませた参加者は、プレイ

ホール前の広場に集合し、「朝の集ひ」が行はれる。国歌斉唱、国旗掲揚、ラジオ体操、連絡事項の伝達等がなされ、今日一日を過ごす心の準備が整へられていった。

〈講義〉

午前中には、神奈川県立金井高校教頭、国武忠彦先生が、「聖徳太子と楠木正成」と題して話された。先生は、天皇が日本の象徴とされながらも戦後教育においては素通りされてきたことを指摘され、まづ古代国家成立の過程で歴代の天皇方が果たされた役割を年表に沿って話してゆかれた。中でも先生は、聖徳太子が内治、外交、文化の様々な現実の国家課題に全力をもって当たられたことを指摘された後、十七条憲法を取り上げられて、太子の痛切なお言葉を偲ばれていった。さらに、太子のご精神を受け継がれた山背大兄王ご一家の悲劇的な最期を語られ、最後に、建武新政後、後醍醐天皇を守るために勝ち目のない戦と知りながら勇敢に戦った楠木正成について話された。

〈班別輪読〉

午後からは、午前中の講義で取り上げられた聖徳太子の十七条憲法を班毎に別れて輪読した。「和を以て貴しとなす」「人皆党（たむら）あり、亦達（さと）れる者少し」といふ言葉に込められた太子の

お気持ちを偲ばうと繰り返し声に出して輪読した。

＜所感執筆＞

合宿も二日目に入り、次第に班員相互に心の交流が生じてきた。合宿に参加して、今までの気持ちを率直に文章にすることによって一旦整理し、それを基に今まで言へなかったことを心を開いて語り合ひながら、班友の気持ちに必死に迫らうとした。

＜講話＞

夜には、福岡県立新宮高校教諭、小野吉宣先生が、「教育体験を語る―教育は難しい然れど面白い―」と題して、話をされた。先生は、御自身の二十年間に亘る教師生活を振り返りながら、家庭においてきちんと子供を躾ける親が少なくなってきてゐることを憂慮され、自らの生徒に対する強い決意を語って

合宿教室のあらまし（中富）

ゆかれた。そして、実際に登校拒否症の生徒に接した体験を切々と語られていった。

第三日（八月九日）

〈短歌導入講義・レクリエーション〉

午前中は、福岡県立須恵高校教諭、那須三元先生が短歌創作の手引きとして講義された。先生は、長塚節の短歌を例にとりながら、短歌の本質と魅力について語られた後、短歌を創作する上での留意点を説明してゆかれ、最後に速総別王（はやふさわけのみこ）や源実朝の歌など八首を紹介され「短歌はその調べを感じると、詠んだ人の気持ちが自分の心のなかに響いてくるのです」と語られた。

御講義の後、参加者はバスに分乗して、県立七沢

森林公園へと出発した。幸ひ好天にも恵まれ、広々とした公園で散策を楽しんだ。班員と野外で共に食べるおにぎりは、格別においしかった。

〈講義〉

午後からは、杏林大学教授、田久保忠衛先生に「激動する国際情勢と日本」と題してお話をいただいた。先生は、国際情勢を考へていく上で必要とされる三つの基本的姿勢として、一つは、広い視野からみること、二つにはあくまで事実に基づいて判断すること、三つには国際的な常識で判断することを挙げられた。そして、東西ドイツの統一に象徴される東欧諸国の激変と共産主義体制の崩壊、その間隙に起こった湾岸戦争など、最近の日本を取り巻く国際情勢について解説されていった。特に湾岸戦争に対する日本の対応について、「日本人は道義心を忘れてしまったのではないか」と強く訴へかけられた。

〈講話〉

夕食後、富山女子短期大学教授の廣瀬誠先生が登壇され、この合宿の地が「相武（さがむ）（相模）」と呼ばれてゐた古事記の昔を偲ばれ、倭建命が草薙の剣で野を刈り払ひ火を打って危機を逃れた焼津、又、倭建命が、波しげく海を渡れずにゐたときに、海の神を鎮める為に后の弟橘

比売命が「さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも」と歌ひ海中に身を投じた走水、そして倭建命が東征より帰る時に遙か相模の国を眺めて「我妻はや」と弟橘比売命の死を嘆かれた足柄峠の何れもがこの相模の国であり、この地が深い伝承に彩られた場所であることを紹介された。

△慰霊祭▽

まづ福岡県立玄界高校教諭、日比生哲也氏より慰霊祭の説明が行はれた。その後、夜の静寂の中、野外の広場に設置された祭壇の前に全員が整列した。まづお祓ひに代へて、故三井甲之先生の

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

の和歌朗詠により慰霊祭は始められた。

次に警蹕の声の響く中、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられた総ての祖先の御霊を最敬礼でお迎へする、降神の儀が行はれた。献饌の後、参加者一同を代表して、澤部壽孫氏が祭文を奏上、明治天皇・昭和天皇の御製を坂東一男氏が拝誦された。続いて玉串奉奠の後、全員で「海ゆかば」を斉唱、最後に昇神の儀が行はれ、撤饌の後、最敬礼のもと御霊をお送り申し上げ、慰霊祭は滞りなく終了した。

左に慰霊祭に於ける祭文と拝誦された御製を記しておく。

＜祭文＞

昨年の秋世界の人々の憧憬とあまたの国民のお祝ひ申し上ぐる中に今上陛下の御即位の大典と大嘗祭は恙なくとり行はれ喜びに満ちたる新しき年を迎へし今年平成三年八月の今宵丹沢山塊大山の麓厚木七沢に集へる我等第三十六回全国学生青年合宿教室参加の者ら朝夕に学びしこの山裾の広場を斎庭と定めまつりとこしへにみ国を守ります遠つみ祖達をはじめみ国のためにいのちを捧げ給ひてたふときみ国を守りましししもろもろのはらから達のみたまを招ぎまつりてみ祭り仕へまつらむとす

東欧に中東に動乱おこり混沌たる様相を呈せる世界において我が国の国際的地位いよいよたかまりゆ

けどもいにしへには聖徳太子近くには明治天皇間近には先つ帝昭和天皇と未曽有の国難の時代に出現せさせ給ひご一身をなげうち給ひてみ国を守りましししすめらみことをはじめとする御代御代のすめらみことまた御代御代のすめらみことに仕へ奉りしみ祖達のたふときまごころをともすれば忘れゆく世のさまを憂ひ驚きかへりみしめられつつ御講義に耳を傾け大御歌あるいは十七条憲法を心に味はひ時を惜しみては初めて会ひし友と心を開きて語り合ひわれらが日本の行くべき道をさだかに見定めんと心を合せてこの集ひを過ごし来れるさまを畏かれどもいましみこと達みそなはし給ひてみ国のゆくてをとこしへに守らせ給へと参加者一同に代り澤部壽孫謹み敬ひ恐み恐みも白す

（明治天皇御製）

をりにふれて

国の為いのちをすてしますらをのたま祭るべき時ちかづきぬ

をりにふれて

年へなば国のちからとなりぬべき人をおほくも失ひにけり

をりにふれて

よとともに語りつたへよ国のため命をすてし人のいさをを

子

すすみゆく世に生まれたるうなゐにも昔のことは教へおかなむ

日

さしのぼる朝日のごとくさはやかにもたまほしきは心なりけり

海

仇波のしづまりはてて四方のうみのどかならなむ世をいのるかな

寄夏草述懐

国のため民の為には夏草のことしげくともつとめざらめや

（昭和天皇御製）

千鳥が淵戦没者墓苑

国のため命ささげし人々のことを思へば胸せまりくる

引揚者に対して

国民とともに心をいためつつ帰りこぬ人をただ待ちに待つ

九州地方視察

高原にみやまきりしま美しくむらがり咲きて小鳥とぶなり

第四日（八月十日）

＜講義＞

午前中は、神奈川県立湘南高校教諭・亜細亜大学非常勤講師、山内健生先生が、「戦後思想からの覚醒を！――より人間らしく生きるために――」と題して話された。

先生は、まづ「日の丸」「君が代」の問題を取り上げられ、すぐに軍国主義を思ひ浮べるやうな現代の風潮がいかに硬直した考へであるかをその歴史を辿りながら話された。また、聖徳太子の「憲法十七条」の精神がいかに日本の歴史を貫いてゐるかを「五箇条の御誓文」と「新日本建設に関する詔書」を読まれながら指摘された。続いて、今日の教科書・マスコミで使用されてゐる戦後思想の基本的な用語として「太平洋戦争の敗北」「無条件の降伏」「言論の自由の保障」「天皇の神格否定」「平和憲法の誕生」の五つを挙げられ、それらの虚妄性を指摘された後、それからの覚醒を強く訴へられた。

＜短歌全体批評・班別相互批評＞

前日提出された参加者全員の短歌は、先生方により選歌され、事務局の夜を徹しての作業

により、一冊の歌稿に纏められた。そして全員の手に渡ったこの歌稿をもとに山口県立高森高校教諭、宝辺矢太郎先生が創作短歌全体批評を行はれた。先生は参加者の歌を各班から取り上げられ、その一首一首について作者の気持ちを推し量り、作者の言葉を尊重しながら丁寧に直してゆかれた。その後、それぞれは班室に戻り、班員一人一人の歌を全員で読み味はひながら相互に言葉を交はしていった。歌を通してお互ひの心情を述べあふうちに自然に班全体が一つにまとまり、そこに広やかな共感の世界が繰りひろげられてゆくやうであった。

〈講話〉

夜は、社団法人国民文化研究会常務理事・事務局長、長内俊平先生が「若き友らへ語りかける言葉―今私達の最も心すべきこと―」と題して御講話をされた。先生は、「現在の世の有様は、私達の豊かでない心を反映してゐるのではないか」と問ひ掛けられた後、聖徳太子と黒上正一郎先生の御言葉を紹介されながら、「足るを知る」こと「分に過ぎざる」ことが豊かな心に繋がり、私達が慎みの心を取り戻すことから本当の幸せが始まるのではないかと述べられた。

＜夜の集ひ＞

最後の夜を迎へ、プレイホールには宴席が設けられた。緊張した時間を過ごしてきた一同は、班毎、地域毎、大学毎に繰り広げられた歌や寸劇にしばし疲れも忘れ打ち興じた。最後に「ふるさと」を皆で唱和し、散会した。プレイホールを出ると、雨が降って暗かったが、職員の方々によって、たくさんの傘が用意され、また、道の両側には美しい灯が足元を照らしてをり、何の心配もなかった。職員の方が奏でるアコーディオンの音色に送られながら、一同は、すがすがしい気分でプレイホールを後にした。

第五日（八月十一日）

＜合宿を顧みて＞

最初に、社団法人国民文化研究会常務理事・千代

田コンサルタント代表取締役専務、上村和男先生が登壇され、「この五日間を振り返ってみると、心の修練がいかに大切か、お互ひに相手を信じて心を通はせ合はうと努力することがいかに大切かを身を以て知ったのではないでせうか」と語られた。また、明治天皇御製「たらちねの親につかへてまめなるが人のまことの始なりけり」を拝誦され、「御両親に感謝することが人の悲しみをわかる人間になる身近な第一歩ではないでせうか」と話された。

続いて社団法人国民文化研究会理事長・元亜細亜大学教授、小田村寅二郎先生が登壇された。先生は、「今、四日前の開会式が遠い過去のことのやうに思へるのは、この五日間諸君が大勢の皆さんと一緒に生活したお蔭で自分の持ってゐる頭と心の能力を最大限に発揮した精神生活をなさったためです」と述べられた後、講義の補足としてまづ、明治の初めに聖書と讃美歌を翻訳したとき、ゴッドを「神」と訳したが、明治天皇御製に「あた波をふせぎし人はみなと川神となりてぞ世を守るらむ」とあるやうに、生きてゐる人々が尊び敬ふ対象が日本の神であることを指摘され、「本来違ふものを同じ言葉で訳したことから様々な混乱が生じてゐるのです。ゴッドと神とは全く質の違ふ対象であることだけは一生を通じて忘れないで下さい」と述べられた。次に、「短歌を創る時には、字足らずは駄目だが、字余りはよい。人の気持ちが溢れるやうな思ひの時に、三十一文字の中に全部を込められずに、どうしても字余りを生むことがあるのです」と述べられ、「爆撃にたふれゆく民の上を思ひ戦とめけり身は

いかならんとも」といふ御製に込められた昭和天皇の大御心を偲ばれた。そして、「この合宿で一つの歌を詠む難しさを知ったことで、かういふ歌を詠める方はどんな方であるのかがわかってくるでせう。天皇とはどういふ御存在なのか、直接、歌で確かめてゆく力が皆さんの中に生まれつつあるのです」と話された。最後に「この合宿教室では皆さんがいろいろなことに気付いてゆく端緒を示して来ました。あとは皆さんの心の取り組み方次第です。それから、日本の国はどこにあるのかと質問された時、まづ最初に日本の国は私の胸の中にあるといふ思ひが大切です。自分は日本人だといふ感じが息づいてこなければ何もはっきりしてこないのです」と語られ、お話を終へられた。

〈全体感想自由発表〉

合宿教室を通して各自の所感を全員の前で自由に披瀝し合ふ全体感想自由発表の時間となった。参加の動機はそれぞれ違っても、この五日間寝食を共にし、友の言葉に、そして先人の言葉に心を寄せ合った体験は、各人の心にしっかりと刻みこまれたに違ひあるまい。一人の学生が登壇し発表し始めると、それに反応して次々と壇上にあがった。「なつかしいやうな、忘れてしまってゐた素直な気持ちになれた。そして祖先や日本の国に素直に感謝するやうになった」「学校に帰ったらこの合宿で学んだことを友人に伝へたい」「相手を論破するのでは

なく、お互ひの素直な気持ちを語り合へたことがうれしかった」「将来自衛官になることについて悩んでゐたが、この合宿に参加したことにより、国を守る決意を新たにすることができた」等々、心からの思ひを率直に語る友の姿がみられた。また「学生時代に参加して以来六年ぶりの参加で、今の自分の教員としての生活を支へてゐるのが学生時代に参加したこの合宿であることに初めて気付き、合宿の講義が素直に受け入れられるやうになった」と語られた小学校教諭の言葉は、実に感動的だった。

〈閉会式〉

参加者全員が心を合はせ精魂を傾けて営んできたこの合宿教室も、最後の日程である閉会式を迎へた。先づ、全員で国歌を斉唱した後、参加学生を代表して千葉大学四年の中富仁が「一回りも二回りも大きくなって、この合宿教室で出会った友と再会できるやう、お互ひに研鑽を積んでいきませう」と挨拶した。

続いて主催者を代表して、社団法人国民文化研究会副理事長・九州造形短期大学教授、小柳陽太郎先生が、足立原市長を初め、自然教室の職員の方々の細やかなお心配りに感謝の意を表された後、「先程全体感想自由発表の中でとりわけ心に残ったのは、皆さんが『班友の力

によって素直な気持ちになれた』と述べてくれたことです」と話された。そして「私達はある一つの主義主張を掲げて、その下についてこいといふ思想団体ではありません。私達のやってゐることは間違ひだらけでせうが、素直な気持ちになっていかうぢゃないか、といふ励まし合ひだけはこの会の使命であると思ってお互ひに研鑽を積んでゐるのです」と述べられ、江戸時代の桃園天皇の御製「神代より世々にかはらで君と臣の道すなほなる国はわがくに」を紹介され、「天皇が力で引張っていくのではない、天皇のお心と国民の心がお互ひに素直な気持ちで共感し合ひ、お互ひの心を心で匡し合ひながら、長い神代からの日本の国が続いて来たといふ強い確信がこの御製に表はれてゐます」と話された。更に「天皇の問題は決して難しくはありません。それは、天皇の持っていらっしゃる美しい心に反応し、美しいと感ずる気持ちを心の中に整へていく、といふことに尽きるんぢゃないでせうか」と述べられ、終戦時の昭和天皇御製に言及されて「自分の身を投げて、自分の身はどうなってもよいと、国民のことを本当にひたすら祈るやうに思っていらっしゃる昭和天皇のお気持ちがひしひしと伝はってきます。ここには肉親の情としか言ひやうのない陛下のお気持ちがあります。この美しいお気持ちが分かればどんな人だって心が動きますよね。戦後の思想は人間の人間らしさを、美しさに反応する心を奪ってしまひましたが、この美しいものに反応する心が学問の中心だと思ふのです」と語ってゆかれた。「この合宿で学んだものは知識ではなく、素直な気

持ちになれたことなのです。素直な気持ちになれば、色々なものが見えてくるといふことなのです」と話され、「この合宿で心を開いて素直な気持ちで語り合へた友達がゐることを心の中にしっかりと持ってそれぞれの大学に帰っていき、来年はたくさんの友達を誘って来て下さい」と語られて閉会の挨拶を終へられた。

その後、全員で「進めこの道」を斉唱し、防衛大学校三年濱口和久君が力強く「閉会宣言」を行ひ、四泊五日に亘る合宿教室は無事終了した。

式の後、ロビーで、あるひは班室で、お互ひに別れを惜しむ姿が見受けられた。新しき友情の芽生えた友らは、来年の再会を約して、それぞれ七沢の森を後にしたのだった。

合宿詠草

朝のつどひ

＜学生・社会人＞

久々に出逢ひし友と語りゆけば心通ひてなごみゆきける　長崎大教四年　早田保美

○

坂東先輩の講義を聞きて　早稲田大一文四年　大島伸一

営業は我が天職と胸を張りはつらつとして先輩（とも）は語りぬ

敷島の道は楽しとかたらるる坂東氏（うじ）のうらやましきかな　佐賀大理工四年　白木潤

常日頃短歌を作る生活を成し得る氏（うじ）は生き生きと見ゆ　㈱新東新潟支店　斎藤信二

小野吉宣先生の教育体験をお聞きして

登校を拒否する生徒を救はむとともに草取る師の君尊し　厚木市教育委員会　葉山神一

小野先生の御講義を拝聴して

父として我子に示す生き方を師は情熱もて教へ給ひぬ

長内先生の御講義を聞きて　小学校臨時講師　下田和子

おぼろ月夜しみじみ歌ふ先生の御声胸内にしみ入りて来ぬ

○

班別討論にて　東京大法四年　松岡恒男

我が心体ふるはせ感じたし人の言葉にこめられしものを

心開き共に語らふ友人になりたきものと切に思ほゆ　柘植大外四年　福元康文

言の葉をしぼり出すごとその思ひ語りゆく友の姿尊し　福岡大経一年　別府正寛

討論の中で　防衛大人文四年　新田洋

我が思ひうけとめくれし友どちとつき合ひゆきたしつどひの後も

○

七沢森林公園にて

草の上大の字になりて寝転がり太陽の光身に浴びるかも　九州大　工四年　黒木雅裕

見はるかす光のどけき七沢山緑の木々に蟬の鳴きをり　防衛大　人文三年　森安宏徳

草原をかける子供の笑ひ声聞きて幼き頃のなつかし　柘植大　外二年　多田雅信

山路きてみんみん蟬の声聞けば我が故郷を思ひ出しぬ　三菱電機　工　藤可哉

山の中小道歩めば夏の野の緑はるかに見えて美し　高千穂商科大　商一年　後藤謙太郎

緑なす丘の斜面を友どちと走る楽しさ我を忘るる　東京大　理Ⅰ一年　長原巨樹

陽ざし受け芝原の上に幼子や友らははしゃぎて笑ひびきぬ　福岡大　工四年　清家和弥

○

短歌相互批評にて

頭寄せ班友の心根おしはかり和歌を直せる姿うつくし　熊本大文二年　延塚恭子

全員で心一つに偲ぶれば心表はす和歌になりけり　福岡大経三年　梅崎建吉

友どちと作り直しし歌々は力合はせし思ひぞ実る　亜細亜大経営二年　諸藤譲

友だちの歌直さんと努むれば皆の心の一つになるかも　早稲田大教四年　山下拡男

○

慰霊祭にて

魂祭りかがり火あかるく先人の心うつしてもえさかるなり　厚木市教育委員会　西海雄一

かがり火のともる斎庭はしづまりて警蹕かかりかうべたれけり　宗教法人乃木神社　松吉宣和

○

夜の集ひにて

緊張しみんなで歌った夜の集ひ今では楽しき思ひでなりけり　福岡大法二年　牟田口隆文

気合こもる友の燕飛（えんぴ）のすばらしさ我もまけじとけいこにはげまん　厚木市役所　山口光男

早大生の声たからかに合唱する都の西北むねにしみきぬ　㈱日本植生　池内清巳

夜の集ひの終りて暗き道を宿泊棟に向ひて帰らむとせし折　東京水産大　水産一年　堀正明

道の辺に置かれし蠟燭ともされし人らの労（たつき）偲びつ帰るも

○

全体感想自由発表

川崎市立久末小学校　江崎　圭伊子

〝なだしお〟の苦しみこえてもう迷はないと語るを聞きて胸あつくなりぬ

合宿を終へて

金沢工業大　工四年　川合　晃義

学生の最後の夏にここに来ておもひもよらぬ友を得にけり

亜細亜大　経営四年　佐藤　順一郎

一人一人班友らの顔をみてをればさみしき想ひおのづこみ上ぐ

早稲田大　法一年　三島　圭介

新たなる友とかざらず語り合ふ合宿教室すばらしきかな

金沢大　工四年　谷崎　文保

我が友といつしか再び語らむと誓ひて別るる七沢の森

亜細亜大　経済三年　福富　賢介

忙しき日々の生活に戻りても思ひやる心持ち続けたし

早稲田大　社三年　村瀬　廣司

をりをりに文を送りて御班友らと交はりまさに深めんと思ふ

〈大学教官有志協議会・国民文化研究会〉

国民文化研究会理事長　小田村　寅二郎

良き友のしつらへくれし七沢の自然教室に今日ぞ集ひぬ

注　良き友（厚木市長さん）

東なる丹沢山は美はしき緑籠りゐて見るに清しき

宿泊棟・食堂棟・講義棟行き来する間も心なごみぬ

スタッフの心をこめて作られしこれの施設は行き届きをり

元㈱日特金属工業常務取締役　加納　祐五

合宿地に向ふ途上にて

けふよりは夏合宿かこころはづみ七沢さして車馳せゆく

さねさしさがみの小野と詠みましし小野の里べかこのゆく道は

燃ゆる火の中にたたしし古事をおもひてあれば山近付きぬ

雲たれて雨もよひする空の下にもだししづまる山並みあはれ

見れどあかぬみどり列山たつ霧の流れやまずて見えかくれする

この山のふところよけむよき友とともに語らばこころたるべし

㈱宝辺商店代表取締役　寳邊正久

廣瀬誠さんの太平記朗誦を聞く

よき友が容正して言ひ出でぬわれ一人生きてあればの楠公のことば
罪業深き妄念なれどもとそらんずる友のことばに胸せまりけり
正成公世にあらはれて幾千代を照らす不思議を友は語りぬ
古を今あるごとく語りたまふ友のことばにまなこうるむも

九州造形短期大学教授　小柳陽太郎

合宿最終日の朝

虫の音のさはにおこりて合宿の最終日の朝あけなむとする
霧ふかくこめしあしたよ若きらは昨夜の疲れにいまだ眠るか
合宿のいとなみとはに絶やさじと心一つにはげみたまひし
苦しきことここだあらむを朗らかに語りあひつつはげむみ友ら
たぢろかぬ友の力によみがへりよみがへりつつ続く合宿

今日を終らば心やすらにひととせの疲れ癒しませ若き友らよ

国民文化研究会常任理事　長内俊平

心身の力抜けゆく心地していま合宿の終り迎ふる
若きらはよくぞつとめしその準備にその運営に死力つくして
病の床おして来れる稲津君あを白き顔しつつ事務をとるかな
放送に斎庭づくりに独楽の如動く森田君にほとほとかまけつ
初めての指揮班長の大日方君いかにかたづきのきびしかりけむ
朝礼の指揮とる大島君朝ごとりりしき挨拶を述ぶ
開会式にみたま祭りに夜の集ひになりはひさきて君つらなり給ふ（足立原市長）
会場の設営こまごまわが事の如く職員の方々手伝ひくれし
明日よりは来ん夏めざしつとめなむつどひをたのむ人のためにも
谷ぞこゆ雲や湧くらむ鐘が嶽峯々こめて霧の流るる

合宿感想の歌

富山女子短期大学教授　廣瀬　誠

くりかへす君が代のメロディ正面の日の丸大きくそぞろうれしも（開会式）
ユーモアと笑ひまじへて説きませば岩戸あくるごと皆笑ひつつ（講義）
国際情勢ただごとならず息つめて一言も洩らさじとのり出してきく（講義）
君が代日の丸さまざまの問題鋭くも説きますを聴く拳にぎりて（講義）
あらためて太子の御言葉ひしと味はひ遠き亡き師を偲びまつるも（黒上先生憶念）
班別の討議にわれも加はりつ息つめて聴く若き人の声（班別討論）
討議の座にすわりつづくれば痛む足こらへてぞ聴くひたぶるの声（班別討論）
坐りつづけ足腰痛し頭痛しいまは眠らな手足のばして（班別討論）
一人一人の短歌をめぐりよき意見次々にいで座ははづみつつ（班別短歌相互批評）
己が歌に感極りて泣きむせびひそかに座を立ちかくれゆく人（班別短歌相互批評）
人泣けばわれも泣きつつ続けゆく歌の添削かなし短歌は（班別短歌相互批評）
夜をこめて策を練ります幹事らの底ゆく力を偲びまつるも（縁の下の労苦を思ふ）
力こめ声ひびかせてわれは説きつ相模にやどるかなしき古こと（わが講和）
うねりうつ思ひをこめてひと息にいぶきの狭霧（さぎり）と吐きいだしゆく（わが講和）

かがり火と暗やみのしじまに神を招ぐ声朗々と強くおごそかに（慰霊祭）
牛の如太くたくまし然れども神さびてかそけし神を招ぐ声（慰霊祭）
暗闇にひびくその声なつかしき関氏の声と頭垂れ聴くも（慰霊祭）
雨霧に隠れゆく山の杉木立現れては消ゆさらば別れむ（合宿終了）
なつかしき友らとかくて別るとも又々も逢はむ幸くましませ（合宿終了）

日本銀行監事　小田村　四　郎

十三班の班付として大木聴君（柘大一年）の帰郷を送る

祖父君の病篤しと七沢を下りし友はいかにますらむ
祖父君の身を案じつつ合宿に心残して君去りゆきぬ
会へばまた別るるは世の常なれど思はざる別れは悲しかりけり
短かかれど共に学びしこと忘れじ再び会はむ日をば待ちつつ

㈱日商岩井大阪エネルギー部部長　沢　部　壽　孫

合宿の終りに際し（八月十一日）

師や友と出会ひし日より三十年のすでに過ぎしも夢の如くに

三十年の長き年月思はるる師や先輩も年老いますと
いたらざる我にはあれど教はりしみ心継ぐべく励まざらめや
大阿蘇にまみえむその日を楽しみにつとめ生きなむ友らとともに

㈱新日本製鉄機械・プラント事業部部長代理　今林賢郁

「極まればまた甦へる道」ありと思ひ定めて励みし日々はも
西東あまたの友ら集ひきて厚木合宿迎ふるうれしさ

㈱竹中工務店国際事業本部営業部営業課長　稲津利比古

肝臓を患ひ、自宅静養中でありしが急遽合宿に参加す
やまひ得し身にはあれども合格に参加はたせしことぞうれしき
わがからだ気遣ひ給ひて声掛くる友あまたありがたきかな

㈱住友電気工業生産技術部主査　布瀬雅義

蓑田誠一君（第三十一班、熊本県・小学教諭）の「全体感想自由発表」を聞きて
この地にて八年ぶりに熊本の教へ子に会ひしと友（白浜裕会員）語りをり

発表の最後になりて登壇せしその教へ子は語り始めぬ
のどかなる学びの庭にまがまがしき争ひ起す人らありきと
年ふりて忘れをりたる合宿を思ひ出したり争ひの中で
はるけくも熊本の地より参じたりわらにもすがる思ひのままに
合宿のすべての講義しみじみと心に入りぬと語りたまひぬ
不思議なるえにしのしはざ心ある人とふたたびつながりを得し

神奈川県立津久井高等学校教諭　大日方　学

吉川広浩兄（第十三班、中央大四年）の「全体感想自由発表」の折の発言を聞きて

指揮班の苦労わかりしと壇上で友は頭を下げ給ひけり
壇上の友のことばのありがたくあまたの苦労の報はるる思ひす

（是松秀文選）

あとがき

神奈川県厚木市の「七沢自然教室」で営まれた合宿教室から早くも半年が経つ。この間、社会主義勢力の雄として君臨してきたソ連が、クーデタ未遂から共産党の壊滅を経て、つひには瓦解してしまふといふ国際政治上最大級の変事が惹起した。この止どまるところを知らぬ世界情勢の地滑りの如き変動は、一見平穏に見えるわが国にあっても否応なしに「国家の独立」の意味を問ひ直させる迫力を持つものであった。国家の滅亡は、戦ひに破れることだけに起因するのではない。要塞さながらの大国家でさへ内部から自壊することが、この世にはあり得る、といふ事実を私達は目の当りにしたわけである。

かうした急転する世界の現実の只中にあって、わが国の将来は如何にあるべきか、内外から押し寄せる難題を前にして、国政の行く方は混沌とした事態が続いてゐる。だが、いたづらに慷慨しても始まらないし、まして現状打開の奇策も妙手もあり得まい。

四泊五日の合宿教室は、世界情勢であれ生活の些事であれ「自分の胸にかみしめて問ふ」

体験なくして一歩も前に進めない、といふ人生の事実を示唆してくれるものであった。確かに「天下は大物なり」の感があるが、我々は、この事実から眼をそらさずに今後の歩みを続けたい思ふ。

本書の編集に当たっては、講義担当の方々をはじめ各位から原稿をとりまとめて頂き、ここに感謝申し上げる。なほ、各講義の扉頁には、合宿地に因んだ風景写真を掲げることとした。これらの写真の大半については、合宿地であった七沢自然教室の高橋武男所長のご好意によるものであり、厚くお礼申し上げたい。

さて、今年の合宿教室は八月八日（土）から十二日（水）までの四泊五日、熊本県は阿蘇の「阿蘇の司ビラパークホテル」において開催される運びである。講師には東京大学教授の平川祐弘先生、筑波大学教授の村松剛先生をお招きすることに決定してゐる。全国の学生・青年諸氏の多数のご参加を願ひつつあとがきに代へさせて頂く。

平成四年三月

編集委員　占部　賢志

——日本への回帰——

（第27集）

平成四年三月十日発行　　定価　七〇〇円
〒　二一〇円

編者　大学教官有志協議会

編集委員代表　社団法人　国民文化研究会　小田村寅二郎

発行所　社団法人　国民文化研究会
東京都中央区銀座
七—一〇—一八柳瀬ビル
振替（東京）六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします